

393.3
H51
5







393.3

H51

5

兵學研究會編



新輯戰術

第二卷



千城堂發行



# 新輯 戰術 第二卷 目次

## 第三篇 軍の運用と通信……………一

### 前 言……………一

#### 第一 想定……………四

第一問題 青國第一軍會戰指導ニ關スル方策……………七

第二問題 軍會戰指導ノ方策ニ基ク軍竝ニ兵站通信網……………二四

#### 第二 想定……………五九

第一問題 騎兵第一集團長ハ如何ニシテ任務ヲ達成セントスルヤ(攻撃)……………六五

第二問題 騎兵第一集團西那須野附近防禦ノ爲地形判斷……………七三

第三問題 騎兵集團ハ軍司令部ト如何ニシテ連絡ヲ確保セントスルヤ……………八〇

第四問題 集中間ニ於ケル第一軍通信網要圖……………八二

第五問題 第一師團任務達成ノ爲陣地占領要圖……………八六



第六問題	第一軍司令官ハ爾後如何ニシテ戰鬪ヲ指導セントスルヤ(拂曉攻撃)	一〇七
第七問題	第一軍戰鬪指導ニ伴フ軍通信隊命令	一一〇
第八問題	軍ハ爾後如何ニ戰鬪ヲ指導セントスルヤ(追撃準備)	一一二
第九問題	軍ノ追撃ニ伴フ軍通信隊命令	一一三
第十問題	軍司令官ハ以後如何ニシテ戰鬪ヲ指導セントスルヤ(敵陣地突破)	一一六
第十一問題	陣地攻撃ニ伴フ軍通信隊命令	一一三
第十二問題	軍ハ爾後如何ニ戰鬪ヲ指導セントスルヤ(敵ヲ退路外ニ壓迫撃滅)	一一九
第十三問題	軍司令官ノ企圖ニ基ク軍通信網要圖	一二七
第三想定	.....	一五三
第一問題	軍通信隊命令	一六〇
第二問題	隊附少佐ノ狀況判斷(軍ノ攻勢發起ニ應ズルヲ要ス)	一八七
第三問題	軍通信隊長處置アリヤ	一九〇
第四想定	.....	一九四
第一問題	師團長ハ如何ニシテ任務ヲ達成セントスルヤ(主力ヲ以テ轉進)	一九六

第二問題	軍通信隊長ハ如何ニシテ師團ト軍トノ間ノ連絡ヲ確保セントスルヤ	二〇九
第三問題	有線中隊長ノ作業部署ノ大要	二二三
第四問題	右縦隊長ノ決心(急進)	二二八
第五問題	師團長ノ決心(敵ヲ壓迫撃滅)	二三〇
附 錄	小田原戰史の研究	二三三



# 新輯 戰術 第二卷

## 第三節 軍の運用と通信

### 前 言

軍の運用を研究することは、本誌の直接目的に鑑みれば稍々縁遠い感もあるが、一般戦術に基礎概念を與ふる爲に必要とするので、既に數年前より試みられた所である。特に近代戦の如く、各國共に其の使用兵力が著しく増大してゐる實情よりすれば、軍の如きは既に大兵團と云ふ感じさへ起さない程迄に、一般化してしまつたやうに思はれるに於て殊に然りである。

併しながら、戰略單位たる師團の運用と此等戰略兵團を綜合統帥する軍の運用との間には、本質的な差異があり、著しく其の趣を異にしてゐるものがある。故に兵學の基礎研究未だ十分でない初級者に向つて、今直ちに軍の運用に就いて研究を要求することは無理であり、又大して益のない所であるものと思はれるが、併し、軍の作戦が如何なる経過を辿つて推移されるものであるかの概念を得ることは、一般戦術能力のレベルを高めて常軌を逸することなからしむる爲には大



いに効果的であると考へられる。是筆者が茲に菲才を顧みず敢て軍運用の一端を紹介せんと企圖した所以である。併し上述のやうな理由に基くものであるから、軍の運用そのものを、あくまで深刻に讀者に敲き込む程の意圖は有してゐないのである。唯紹介の路伴れと云つては適當でないかも知れぬが、一般に難解視されてゐる通信の運用を併せ講じて若干にても研究に花を添へて見たいと思ふ。是本篇開講の眼目である。

抑々通信の運用とは上下左右の組織を連絡して意志の疏通を圖る手段を講ずることである。従つて小部隊に於ては、隨時相互に面接其の他の手段によつて容易に意志の疏通が出来るから通信の運用と云ふことは大して問題とはならないのであるが、大兵團となるに従つて此の事は大きな問題となつて來るのである。通信が意志の疏通を目的とすることは、換言すれば指揮官が所望に應じ隨時言はんと欲する時に言ひ得聽かんと欲する時に聽き得る事を謂ふのである。此のことは一見極めて平凡な事ではあるが、同時に又極めて困難な問題である。如何となれば、人間の意志は極めて自由を欲し、欲望は無限にして足ることを知らない。従つて、此の人間の本能を常に満足することを要求される通信は常に決して満足し得る状態にあることは出来ないものである。蓋し無限の欲望を有限の實在特に極めて貧弱な手段を以て賄ふと云ふのであるから、所望の通り出来ない

いのは寧ろ當然なことである。此の本質的問題を度外して通信の運用を講じ、又は通信に過大な要求をしても、それは小兒の駄々であることを深く銘心しなければならぬ。茲に通信運用の困難性がある。

従つて通信の運用に方つては、先づ指揮官として、何時何處で幾何の通信量を最小限度必要とするかの腹を決定すること、即ち欲望を制限することが第一である。あれもこれも欲しいと云ふ欲望は、身の程知らずである。故に通信部隊程徹底的重點使用を必要とするものは他に多くないと心得へることが緊要である。從來戦史に鑑みるに、統帥指揮の不良の罪を通信の不良に歸してあやしまないものが尠くないやうだが、それは統帥指揮の中に通信の運用をも含まれてゐることを忘却したものである。固より通信部隊の訓練と努力の程度が通信の成果に及す所は輕視することとは出来ない、時としては寧ろ其の異常なる効果は統帥指揮の缺陷さへ補ふことのあることは、一度實戰場裏に於て大兵團の統帥指揮に關與した經驗のある者が齊しく密かに内心味ふ所の事實である。

斯る事實は再び統帥指揮の通信に對する依存性を増大して、動もすれば過大な要求を通信に求むる結果となり勝ちである。



抑、通信は技術である。技術は現實であつて空想や理念ではない。故に其の成果には限度がある。従つて通信に要求し、通信を運用せんとする者は、常に其の限度と成果とを確實に把握して、統帥上の理念的要望を可能なる現實の如何なる範圍に於て満足し、以て統帥指揮の目的を達成するかを深刻に研究することが緊急事である。

以下二、三想定について研究して見たいと思ふ。

## 第一想定

### 所要地圖

二百萬分一、大滿洲國詳圖  
五十萬分一、黑爾根、海倫、哈爾賓、訥河、齊々哈爾、伯都納

一、黑龍江ニ侵入ヲ企圖スル敵ヲ擊滅シ成ルベク廣ク同省ヲ領有スベキ任務ヲ有スル青國第一軍ハ三月上旬以來主力ヲ以テ哈爾賓附近、一部ヲ以テ伯都納附近ニ集中中ナリ

二、三月十日夕迄ニ軍司令官ノ知得セル狀況左ノ如シ

1. 敵ハ黑河及海拉爾ヲ根據トシ三月上旬以來鐵道其ノ他ニヨリ北安鎮及齊々哈爾附近ニ集

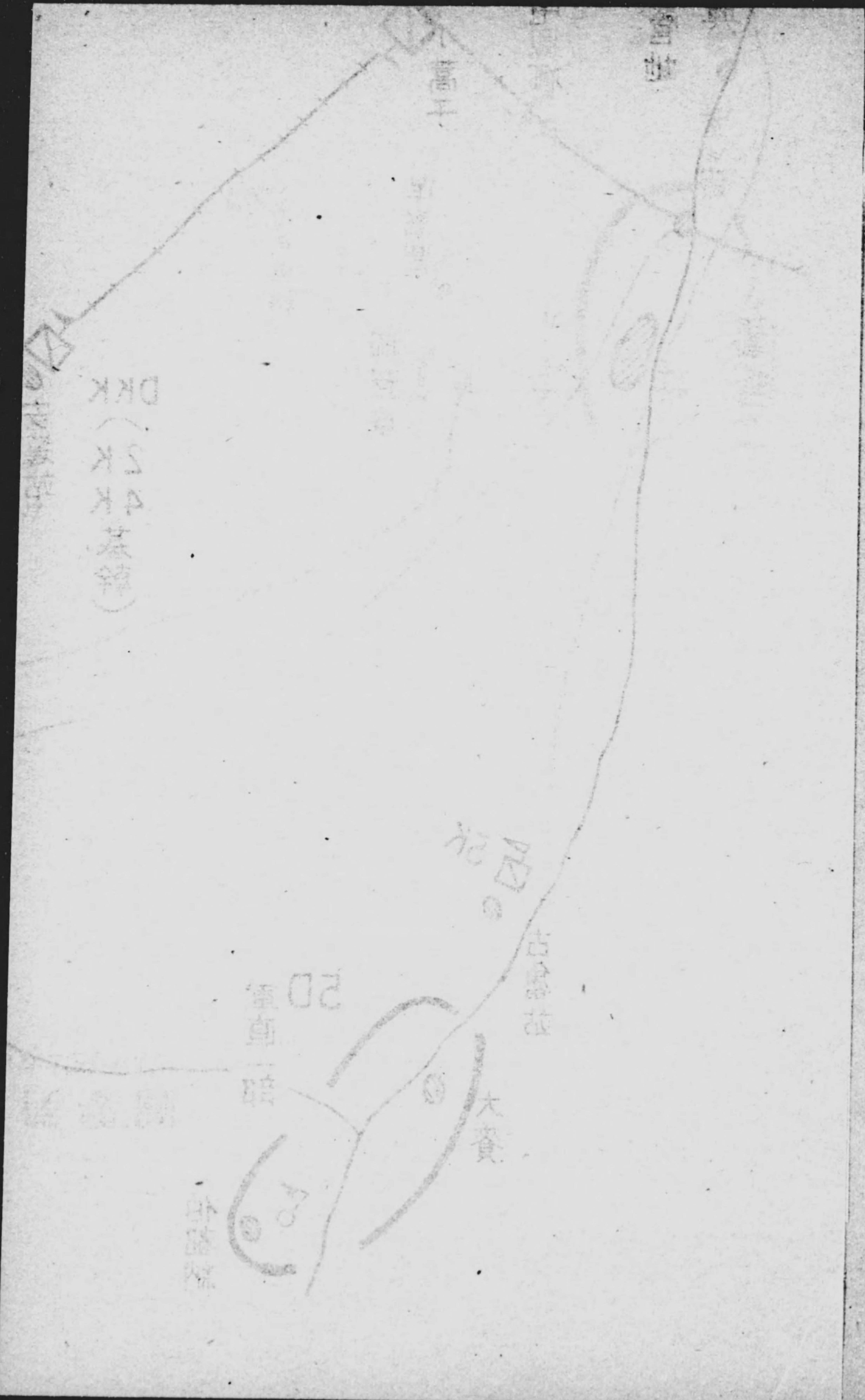
中中ナリ

2. 本夕ニ於ケル彼我ノ態勢別紙要圖ノ如シ
  3. 軍主力ノ集中掩護ハ初期第一師團之ニ任ゼシモ各師團ノ到着ニ伴ヒ其ノ警戒配備ヲ逐次交代シテ目下要圖ノ如キ配備ニ在リ
  4. 防空ハ各師團及飛行機ニ於テ各、分擔シアリ
  5. 兵站部隊ノ一部ハ集中間ノ補給ニ任ジアリ
- 三、作戰資料ノ概要左ノ如シ

1. 敵ガ黑龍江省方面ニ使用シ得ル兵力ハ概ネ十師團内外ト判斷セラル其ノ空中勢力ハ我ヨリ優勢ナリ
2. 敵ガ開戰當初使用シ得ベキ鐵道ハ北黑線、齊北線及北鐵西部線ニシテ其ノ輸送力ハ何レモ概ネ五分ノ一師團内外トス
3. 青軍ノ使用シ得ル鐵道ノ輸送力ハ概ネ三分ノ一師團内外トス
- 四、青軍第一軍ノ編組ノ主ナルモノ左ノ如シ

軍司令官 某大將





第一乃至第五師團

戰車三大隊

騎兵集團

獨立山砲兵一聯隊

野戰重砲兵一旅團

獨立野戰重砲兵一聯隊

野戰高射砲隊若干

野戰照空隊若干

獨立工兵二大隊

飛行隊(偵察、戰鬪、輕爆、重爆大隊各若干)

氣球一大隊

通信隊(野電七中隊、無電十小隊)

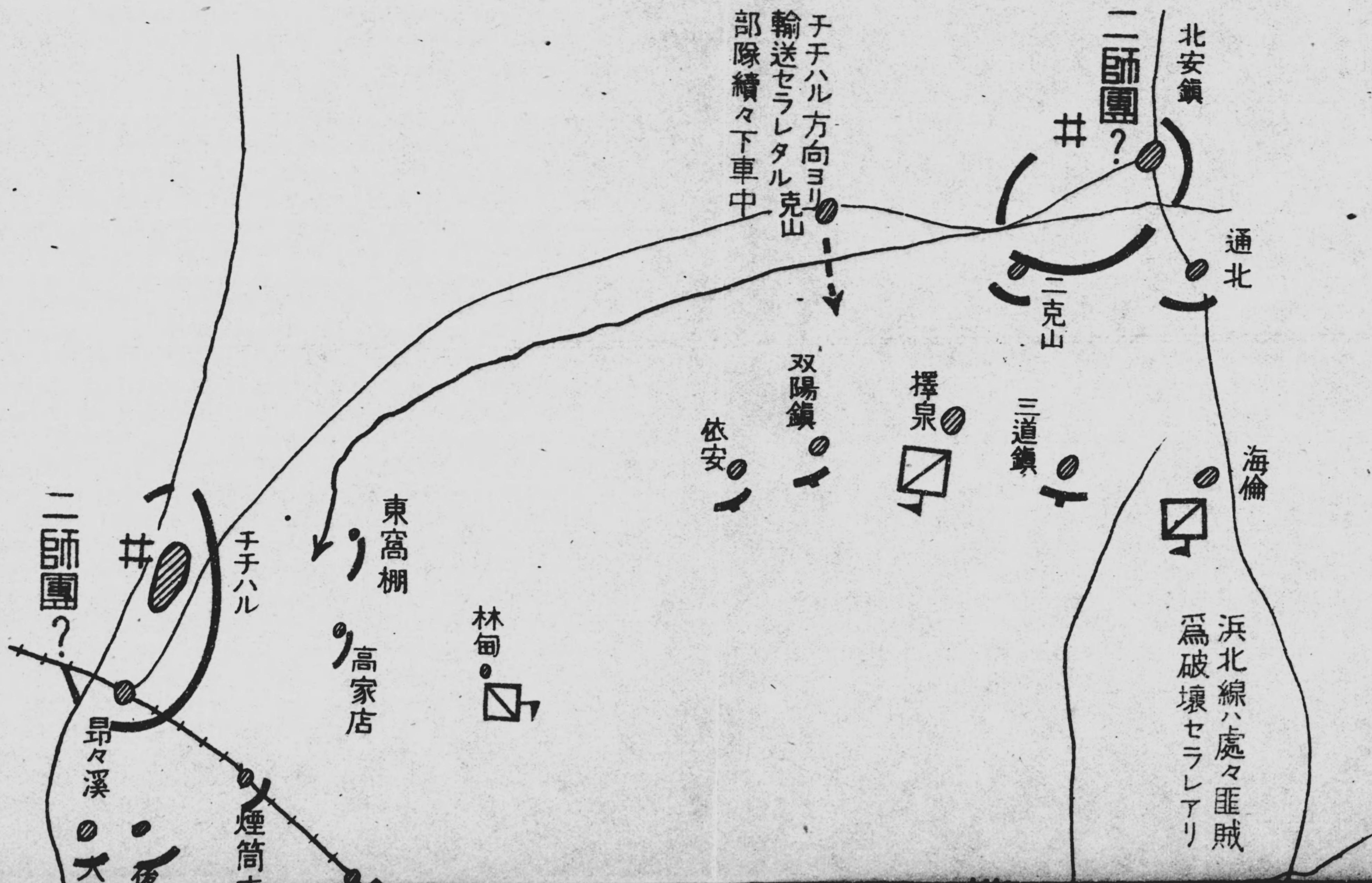
架橋材料中隊若干

其ノ他略ス



# 圖要勢態我彼

(ルケ於ニ夕日十月三)



于于ハル方向ヨリ  
輸送セラレタル  
克山  
部隊續々下車中

二師團?  
井

北安鎮

通北

二克山

双陽鎮

擇泉

三道鎮

海倫

依安

東窩棚

高家店

林甸

二師團?  
井

于于ハル

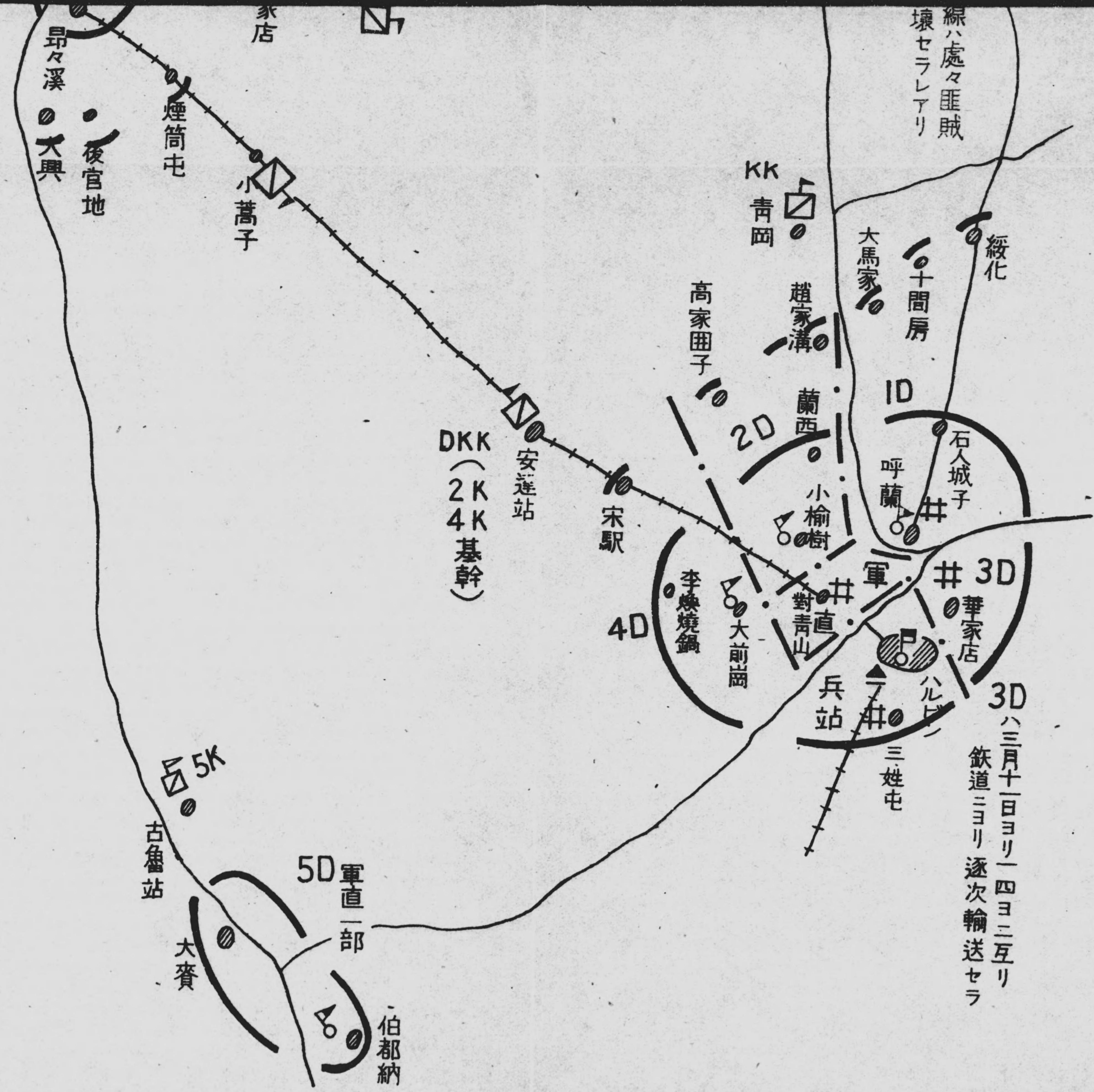
昂々溪

煙筒

浜北線ハ處々匪賊  
爲破壊セラレアリ



線ハ處々匪賊  
壞セラレアリ



3D 八三月十一日ヨリ一四ヨニ互リ  
鉄道ニヨリ逐次輸送セラ

DKK (2K 4K 基幹)

5D 軍直一部

5K

昂々溪  
後官地  
大興

煙筒屯

小蒿子

安蓮站

宋駅

古魯站

大賚

伯都納

KK 青岡

趙家溝

高家田子

蘭西

小榆樹

十間房

大馬家

呼蘭

石人城子

華家店

三姓屯

兵站

對青山

大前崗

李煥燒鍋

軍

井

3D

4D

井

直

井

3D





- 第一軍兵站部
- 兵站司令部一〇
- 兵站電信隊(四中隊)
- 兵站輜重中隊若干
- 自站自動車中隊若干
- 輸送監視隊若干
- 後備步兵大隊若干
- 其ノ他略ス

第一問題

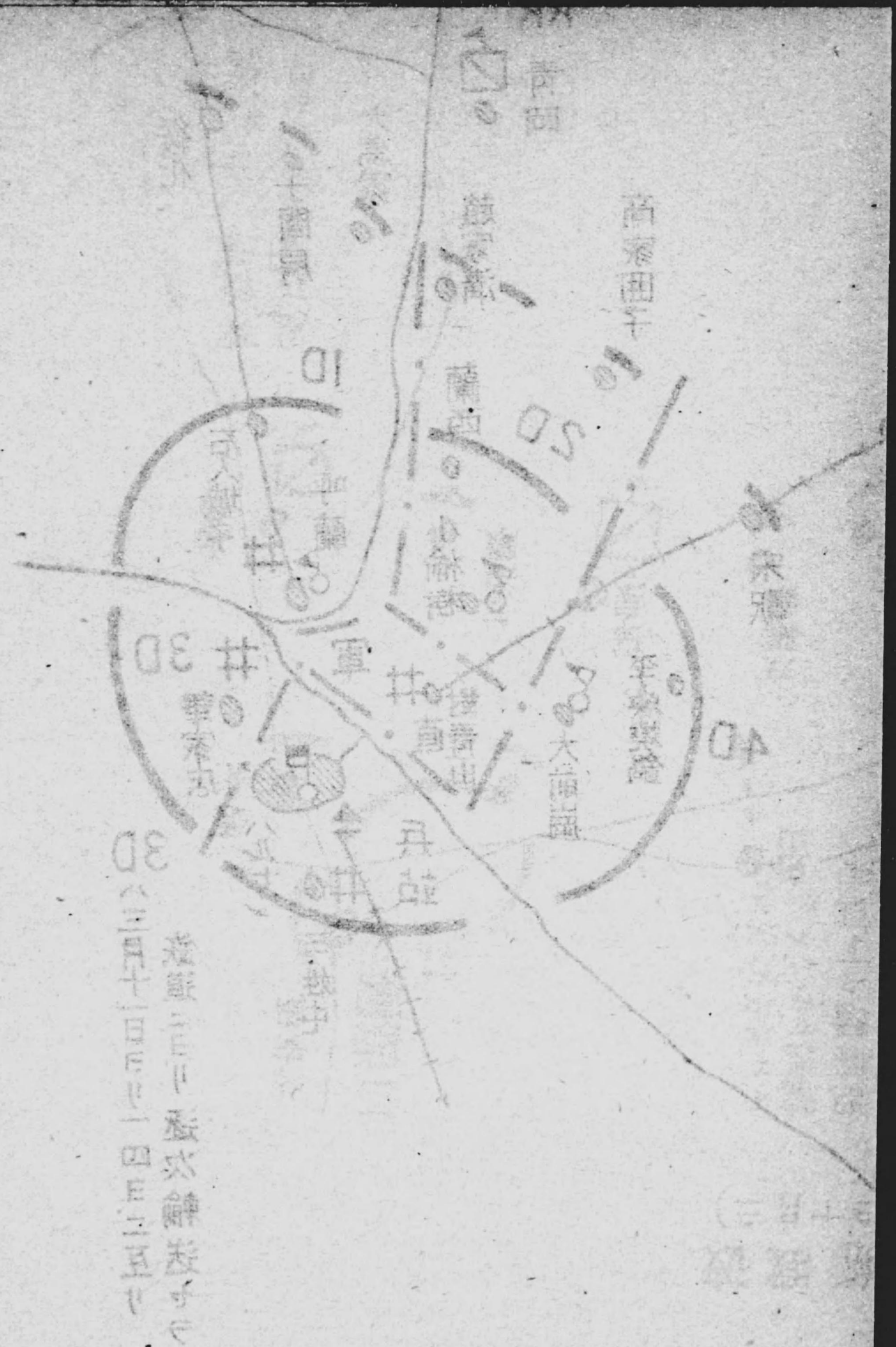
青國第一軍會戰指導ニ關スル方策

答解事項

方

針

指示要領ノミトス





## 第一問題の研究

### 一、全般に就いて

軍會戰指導に關する方策を樹立するに方つては、先づ軍統帥の本質が如何なるものであるかを十分把握してさて之が遂行に際して如何なる節度を以て之を實施して行くかを充分に考慮しなければならぬ。是だけの基礎概念を以て其の上に戰略上の考慮を廻らして會戰構想を策定するのである。

而して會戰の運命を直接決する重大なる條件は、何と云つても此の戰略的方策の適否と會戰の戰略的統帥に俟つものであることは固よりである。

然るに本問題に對する案者の作業は、遺憾ながら殆ど大部分が戰術的師團の運用の方式を其の儘軍統帥に適用して無造作に取扱つてゐるやうに見えるのは、蓋し止むを得ない所であるが、事實決して適當ではなす。

抑、軍統帥は一種の莊重性(敢へて鈍重性とは謂はない)が伴ふものである。故に一度過つた會戰に基礎づけられんか、爾後如何に努力するも其の修正の可能の範圍には限度があつて、遂には幾萬の膏血を以て購ふも挽回することの出来ないものがある。従つて之が方策樹立に方つては、熟慮深謀、先見洞察して、よく心膽を碎き、精根を盡くす様な深刻さが緊要である。

### 二、會戰指導の方策樹立の目的

案者の作業を見ると、其の方針に於て、會戰地を何處に選定するのか、或は決戰の時機を何日ときめたのか、或は主決戰方面を何方に求めたか等重要事項を具體的に明示しないものが甚だ多かつた。之は作業者が未だ會戰指導の方策を何の爲樹立するか其の目的を了解ししむないからであらう。

抑、會戰指導に關する方策を樹立する目的は之によつて爾後の會戰實施の爲に必要な準備に準備を與へると共に、其の會戰指導の適正を規制する爲の尺度とするものである。

然らば軍に於ては何故こんなものが必要であるかと云ふに、軍の統帥指揮は、前項にも述べたやうに、莊重性が必要であつて、師團以下の指揮のやうに容易に輕快には行かないものがあるからである。即ち作戰地域が廣大であり、部隊の行動に甚だしく時間を要する。故に一度方針



を決定しても之が行動の上に現れて来るには長時間が必要となる。従つて軍の統帥指揮には、思ひ著きは禁物である。組織的な周到な計畫を確立して之を著々一歩々々力強く敢行して行く外はない。固より作戦の経過中には直ちに之に乗ずる戦機は必要であるが、會戦初期の根本方針を一擲して覆すやうなことは決して實施出来るものではない。然らば如何にして會戦指導に關する方策を樹立するかと云ふと、之は先づ作戦計畫を基礎として此の根本思想を貫徹する爲に、當時の状況をよく考究して之に先見洞察の判断を加へて會戦指導の方針を策定するのであつて、換言すれば作戦計畫を具體化したものである。

此の會戦指導の方策として含まれねばならない問題は左の諸件である。

1. 會戦指導の方針
2. 會戦指導の要領
3. 右の爲に必要な兵團部署
4. 右に伴ふ諸施設

詳細な事はあまり専門的に入るから省略することにする。

### 三、何れの方向の敵を討つべきか

内線作戦に於ては何れの方向の敵を討つべきかが重大な戦略問題である。斯くの如き問題は白紙的にも原則的にも古來色々に論究されてゐる所であるが、通常最も討ち易いものから討つか、或は最も危険なものから討つのが原則である。

本想定に於て現在の見かけの敵の兵力が同等らしいので、何れに向ふも我は絶對優勢なりと樂觀して居る案者のあるのは同意し兼ねる所である。如何となれば、我が機動によつて近接する間に敵は急激に其の兵力の増強を圖ることが出来ることを看過してはならぬ。又さうでなくとも、更に兩方面の敵が互に適切に協力することもないとは言へないのである。況んや他の案者の如く、我も亦一部の兵團を他の方面に充當するときに於ては、敵としても此の問題は相當眞面目に考へるべきであらう。

又内線作戦實施に方つては、先づ最初に敵の主力を求めて討たなければならぬと限定することは理論上の錯覺である。先づ一部を討つて友軍の志氣を振興し一方の危険を剪除して鞏固なる基礎の上に信念のある作戦を實施する利益は、相當重視する價值があるものである。

次に北安鎮方向は山地帯であつて地形錯雜してゐて大軍の使用に適しないと爲す者があるが、之は甚だしい盲斷である。試みに地圖に就て其の比高を検討して見れば、誰でも判明するやう



に、最も急峻と思はれる拜泉附近でも、其の断面は傾斜1/40に過ぎない。其の他は一般に1/250程度の傾斜で殆ど問題にはならない。又北安附近に於ても極めて緩斜傾な一大波状地であつて、兵力運用の妙味こそあるが、何等障礙にはならない。地上濕地は處々にあつても、三月は未だ何れも凍つてゐるのである。寧ろ一見平坦のやうである齊々哈爾方面こそ、其の東南方地區は遭達地帯で飲料と住民地に恵れてゐない不毛地であるから、却つて大軍の運用は大いに制肘されることを豫期しなければならぬのである。

次に北安方向の敵を先づ討たんとする案に於て、一部兵團を齊々哈爾方向に指向せんとする案は、一見堅實な案のやうではあるが、僅か一師團位のもを此の廣漠たる大不毛地に放つて克く敵を拒止し得るや、又敵の行動によつては遂に遭遇しないで右往左往不毛地帯に敵影を索めて彷徨するやうな目に合ふことも決してないとは言へない。即ち極めて不徹底な案である。之に反して第五師團をも主決戦方面に招致せんとする案は、實に徹底した案ではあるが、此の案に對しては、齊々哈爾附近の敵が全く自由に行動して、我の最も苦痛とする處と時機とに乗じて來たときにも、我は微動だにせず斷乎として初志を貫徹し得るだけの準備と覺悟とが必要である。此の準備と覺悟なくして此の案を採用すれば、それは甚だしき愚案である。

#### 四、第二次會戰の計畫に就て

本作戦のやうに兩方面の敵を各個に撃破せんとする内線作戦に於ては、第一次會戰を如何なる程度に何時まで實施して、如何なる状態で終始せしめて次いで起るべき第二次會戰を何處で何時頃から、如何なる状態で始めるかを豫め計畫し、所要の準備を進めて置かなければならない。特に本作戦のやうに第一次會戰未だ十分に終了せざる以前に第二次會戰が起り得る公算が相當大であり、其の兩會戰の間隔は全く間髪を容れざる巧妙さを必要とし、或は然らずとするも連絡上會戰を實施することさへ起り得る狀況に於て尙更然りである。

内線作戦の爲唯一の味方は「時間」であり「速度」であることを承知して置く必要がある。諸君の案の大部が此の點に關し周密な研究を缺いてゐたのは固より適當ではない。

#### 五、指導要領に就て

諸作業中指導要領と稱して記述されてある内容が殆ど兵團部署と同一であるのは奇觀である。蓋し指導要領とは方針を具體化する大綱を示すことであつて、此の際會戰全般に互つて即ち機動、戰鬪、追撃及第二次會戰等に互つて如何に方針を貫くかの大綱を記述する必要がある。機動に就ても何れも其の會戰場を何處にするか明確に研究してゐない爲、機動の目標は各人各



様で、其の理由の存する所を知るに苦むものである。特に一舉齊々哈爾なり北安鎮なりに直行せんとするものがあるが、此等は適當でない。

又戦闘に於ても、生起すべきあらゆる場合を考究して如何なる状況に於ても常に自主的に我が意志を遂行し居るやうな信念的方策のなかつたのは固より適當でない。

#### 六、兵團部署に就て

兵團部署としては、之に任務を附與し、其の概略の行動及作戰地境等を示すことが必要である。併しながら、此の事には自から限度がある、即ち未だ敵と接近しないのに、既に戦闘部署をなしたもののや、或は既に戦略展開を終つたものの如く各兵團に戦闘任務を課したもののや、或は作戰地境を示さないで各兵團を慢然と併列機動せしめたもの等があつたのは杜撰の至りである。

#### 七、戦略持久任務の兵團に就て

本想定に於て作業者の大部は一部を以て他方面に支作戰を遂行せしめようと企圖してゐる。而して之に與へた任務を見ると、或は攻撃を命じ、或は集中妨害を命じ、或は又防勢を以て監視を命じたもの等がある。

古來戰史を通觀するに、戦略持久の兵團は其の任務達成の爲に猛烈果敢に攻勢を取らなければ

ならぬ機會が極めて多かつた事實がある。而も其の結果は往々にして偉大な戦果を収めて却つて敵を殲滅し得た戦例が多いのである。之を本状況に鑑みるも、地形は平坦にして敵の行動を拘束することが出来ない大平原に於て、防勢によつて靜的監視を續けてゐて、自由な意志を以て動く敵を果して抑留し得るや否や、一考して直ちに其の不可なることを了解される所であらう。況んや戦略兵團を集中妨害の如き單純な任務に服せしむる如きは固より同意出来ない。

#### 八、第二線兵團に就て

第二師團は自然第二線兵團として取扱はるべき兵團となつた。従つて軍司令官としては、此の兵團を速かに會戰場に招致して、最も有効に會戦効果を發揮するやうに其の使用の時機と方面とを決定して置かなければならない。

然るに大部の案では之を哈爾濱附近に集結せしめたまゝ、北安方向或は齊々哈爾方向何れにも使用し得る如く控置せんとする案である。之は戦略豫備的用法ではあるが、此の際第二會戦に先だつて速かに第一會戦を終了して置きたい作戰上の要求から考慮すれば、斯くの如く後方遠く控置して置いたのでは、重大なる主決戦時機に會戦參與は間に合はないこととなる。換言すれば貴重な戦力を無爲にして坐食せしめて、主決戦場裏では甚だしく兵力の不足を訴ふる結果



に陥るのである。故に此の際既に其の使用方面、時機を決定して極力追及せしめる手段を講じなくてはならぬのである。

## 第一問題原案

### 方針

- 一、軍ハ先ヅ連カニ北安鎮方向ノ敵ニ對シ海倫以北ノ地區ニ決戦ヲ強要シ之ヲ各個ニ擊破ス  
主決戦方面ハ之ヲ通肯河ニ沿フ地區トシ決戦ノ時機ハ三月十六日以後ト豫定ス
- 二、軍ハ北安鎮方向ノ敵ヲ擊破セバ速カニ齊々哈爾爾方向ノ敵ニ對シ其ノ北翼ヲ包圍シテ之ヲ退路外ニ壓迫擊滅ス  
本會戰ノ時機ハ三月二十五日以後ト豫定ス

### 指導要領

- 一、軍ハ集中完結ヲ待ツコトナク三月十一日前進ヲ開始シ一部ヲ以テ安達方向ニ前進シ先ヅ齊々哈爾爾方向ノ敵ニ對シ側背ヲ掩護セシメ軍主力ハ三月十五日迄ニ通肯河ニ沿フ地區ヲ海倫河ノ線ニ前進シ北安鎮方向ノ敵ヲ求メテ攻撃ス

此ノ際齊々哈爾爾方向ノ敵若シ拜泉、老虎店方向ニ進出セバ併セテ之ヲ攻撃ス

- 二、北安鎮方向ノ敵海倫以北ノ地區ニ於テ守勢ニ立ツ場合ニ於テハ軍ハ極力克山方向ニ進出シ敵ニ陣外決戦ヲ強要ス
- 三、何レノ場合ニ在リテモ軍ハ主力ヲ以テ敵ノ右側背ヲ索メテ攻撃シ遅クモ三月二十五日迄ニ之ガ包圍擊滅ヲ期ス
- 四、北安鎮方向ノ敵若シ退避スルカ或ハ之ヲ戰場ニ逸シタル場合ニ於テハ速カニ訥謨爾河畔ニ急追シテ之ヲ擊滅ス
- 五、軍ハ北安鎮方向ノ敵ヲ擊破セバ一部ヲ以テ黑河方向ニ對シ軍ノ背後ヲ掩護セシメ主力ヲ以テ齊々哈爾爾方向ノ敵ニ對シ速カニ反轉シテ其ノ北翼ヲ包圍攻撃ス  
之ガ爲拜泉附近ハ軍旋回ノ軸トシテ之ヲ確保ス  
敵ヲ戰場ニ逸シタルカ或ハ敵齊々哈爾爾ヨリ前進セザル場合ニ於テハ速カニ嫩江或ハ洮南要塞ニ壓迫擊滅ス

### 理由

- 一、敵情ヲ判斷スルニ敵ハ其ノ背後連絡線ノ關係ニ依リ主力ヲ以テ齊々哈爾爾附近ニ、一部ヲ以テ



北安鎮附近ニ集中スル公算大ナリ然レドモ時トシテ北安鎮方面ニ相當ノ兵團ヲ轉送スルコトナシトセズ

而シテ敵ハ所謂外線ノ利ヲ占ムル爲北安鎮及齊々哈爾西方面ヨリ哈爾濱ヲ一般目標トシテ作戰ヲ指導スベク其ノ前進開始ノ時機ハ我ト戦力ノ均衡ヲ得ル關係ヨリ論ズレバ十五、六日ノ頃ト判斷セラルルモ敵ガ全力集中ノ後前進スルモノトセバ二十一日頃トナルベシ

二、軍ハ今ヤ内線ニ在リ其ノ任務ヲ達成センガ爲ニハ敵ノ未ダ合一セザルニ先ダチ先ヅ何レカ一方ヲ各個ニ擊破スルコト肝要ナリ

而シテ北安鎮及齊々哈爾兩方面ノ敵ニ對シ何レカ擊破容易ニシテ迅速ナリヤヲ研究スルニ地形補給等ノ關係ヲ考慮セバ兩方面共ニ利害アリト雖モ北安鎮方向ノ敵ハ一部ナラント判斷シ得ル現況ニ於テハ之ガ擊破ハ迅速容易ナルベク又何レノ方向ニ向フモ側背ノ危險ハ常ニ伴フ所ナルモ北安鎮ニ向フモノハ第五師團ノ使用ニ依リ其ノ脅威ヲ輕減シ得ベク又拜泉附近一帶ノ地形ハ内線ノ爲機動容易ナル利アリ

然ルニ若シ齊々哈爾ヲ以テ戰略要點ナリトシテ先ヅ之ニ向ハントスルガ如キハ我モ亦戰略要點タル哈爾濱ヲ北安鎮ノ敵ニ對シ暴露スルモノナルヲ知ラザルベカラズ況ンヤ背後連絡線ヲ大

賚、洮南方面ニ變換シテ齊々哈爾ニ向ハントスルガ如キハ其ノ實施ニ至大ノ困難ヲ伴ヒ其ノ可能性ヲ疑ハシムルモノアリ

三、軍ガ第一會戰ヲ指導スル間ニ於テ齊々哈爾方向ノ敵ノ採リ得ベキ策案ハ十一、十二日頃ヨリ行動ヲ起シ北安鎮方向ノ敵ト拜泉附近ニ於テ合セントスルカ或ハ兵力均衡ノ時機ヲ待ツテ行動ヲ起シ拜泉方向ニ向ヒ我ガ背後ヲ攻撃セントスルカ或ハ又全力ノ集中後前述ノ案ヲ採用セントスルカ若クハ主力ヲ以テ直路哈爾濱ノ戰略要點奪取ニ突進スル案ヲ出デザルベシ

而シテ若シ海倫河以北ノ地區ニ於テ敵ト遭遇戦ヲ惹起シタル場合ニ於テハ軍ハ敵ノ兵力逐次ノ使用ニ乘ズルモノナルヲ以テ寧ロ喜ブベキ状態ナリト謂フヲ得ベシ

若シ不幸ニシテ北安鎮附近ニ於テ陣地ヲ攻撃セザルベカラザル最惡ノ場合ニ於テハ之ガ終結ノ爲ニハ五、六日ヲ要シ此ノ間齊々哈爾兵團ハ拜泉附近ニ近接シアルベシ故ニ第二會戰ハ之ヲ拜泉以西ノ地區ニ求メザルベカラズ

然レドモ亦時トシテ齊々哈爾兵團前進セザル場合ナシト斷言スルヲ得ズ是ニ於テ軍ハ何レノ場合ニモ應ジ得ル如ク主力ヲ以テ常ニ敵ノ北翼ヲ包圍スル如ク指導シ第二會戰ノ時機ハ之ヲ三月二十五日以後ト豫定シテ之ガ準備ヲ進ムルヲ要ス



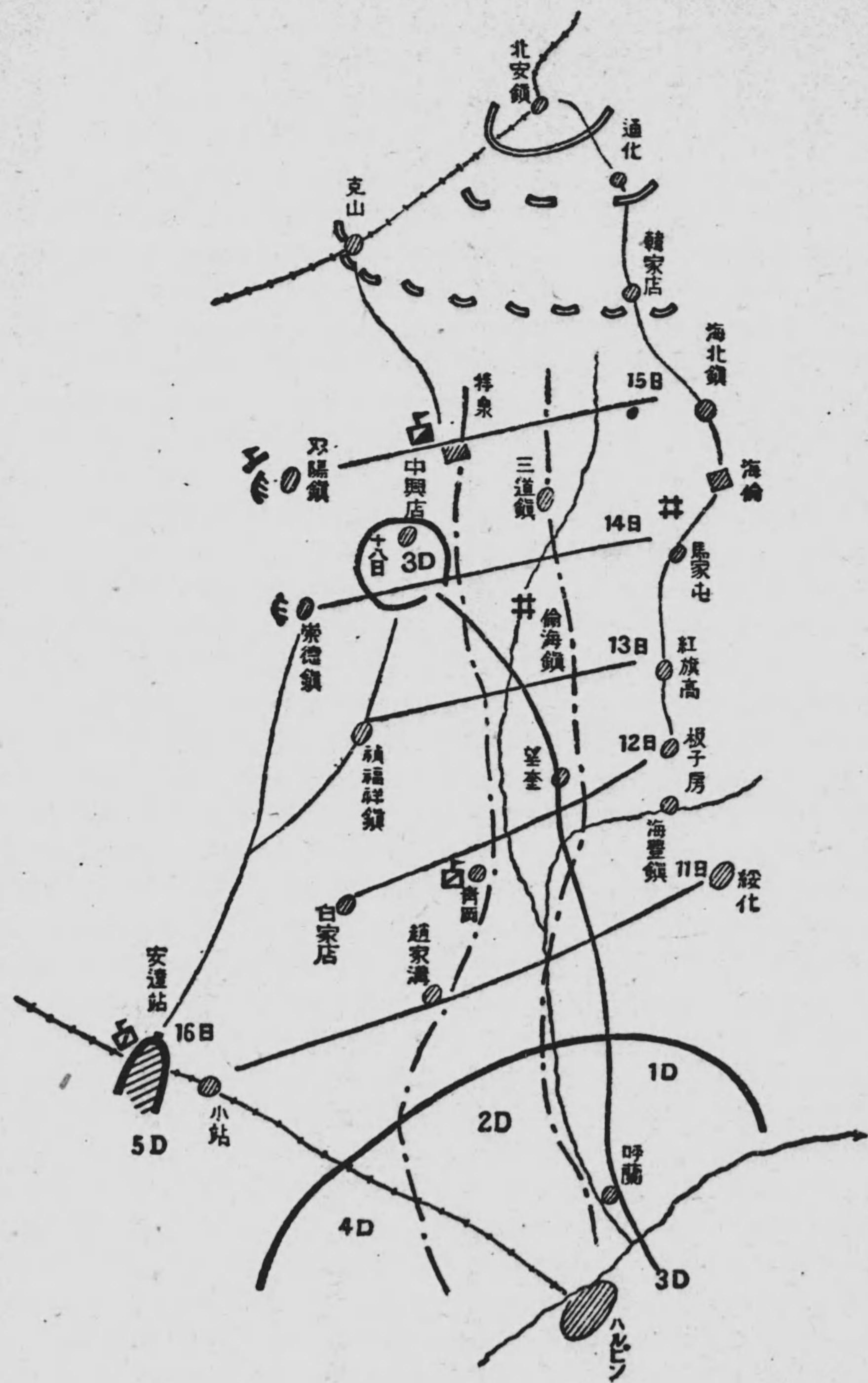
兵團部署

- 一、各師團行動並ニ作戰地境別紙要圖ノ如シ
- 二、騎兵集團ハ概ネ十三日頃ヲ期シ拜泉附近ヲ奪取シタル後主力ヲ以テ該地附近、一部ヲ以テ双陽鎮附近ニ位置シ北安鎮方向ノ敵情搜索並ニ集中妨害及齊北線ノ破壞ニ任ズ
- 第四師團進出セバ主力ヲ以テ双陽鎮附近ニ位置ス
- 配屬歩兵二大隊ハ十一日夕青岡ニ於テ其ノ指揮ニ入ル該部隊ハ敵騎擊破後双陽鎮、崇德鎮附近ニ於テ側背掩護ノ爲陣地ヲ構築セシム
- 三、飛行隊ハ一部ヲ以テ騎兵集團ニ協力シ主力ヲ以テ齊々哈爾附近ノ敵ノ重要施設ヲ爆撃シ且北安鎮、齊々齊爾附近ノ敵情ヲ搜索ス

狀況 第一

通信ニ關スル設想並ニ兵站ニ關スル狀況左ノ如シ

- 一、通信
1. 鐵道線路ニ沿ヒ各二條ノ既設線アリ









## 第二問題

軍會戰指導ノ方策ニ基ク軍並ニ兵站通信網

備考

作業力ノ検討ヲ附記スベシ

### 第二問題の研究

本問題は幾多未知の條件を包藏してゐて、先づ之を適當に解決しなければ、確信ある結論を發見することは困難な特性を有してゐる。是に於て讀者は先づ此等多くの未知事項に對して克く大局を洞察して、至當に判斷し、之を基礎として最後の結論を求めなければならない。是師團以下の部隊に於ける戰術研究のやうに、必要にして且十分な條件が常に與へられて其の交會によつて未知事項を確定せんとするやうな方法とは、大いに趣を異にしてゐる點である。

故に本問題の研究に方つても、軍の會戰指導方策樹立に併行して、之に對する通信網の研究は實施せられ、兵站計畫も亦此等と併行相前後して策定せられるものであるから、一つの結論を待

つて始めて事を爲さんとしたのでは、遂に機を失することとなる。勿論此等總ての計畫は、軍の會戰指導の大方針に根源するを要することは言を俟たないのであるが、事の大小となく悉く軍の計畫及兵站の計畫のみに依存して其の完成後に著手せんとするは誤であることを言ひたいのである。

従つて通信網の研究に方つても亦、軍統帥の大乗的戰略眼に立脚して深く將來を洞察して準備し計畫し、要すれば軍及兵站の計畫に有益なる參考を提供する概がなくてはならない。

以下若干重要事項に就て研究を進める。

#### 一、集中間の通信網に就て

集中に關する計畫は、通常平時から策定準備せられてゐて、會戰の範圍外の事柄ではあるが、集中末期は即ち會戰發起であつて、實に會戰の爲の基礎配置とも見るべきものであるから、如何なるスタートによつて活動すべきやの根本を究むることも徒爾ではなからう。

然るに提出された一部の作業が之に關し全く無關心であつたのは初步の研究であるからとはいへ固より適當ではない。此の通信網構成の要領は、原則に示す如く各師團と軍司令部の間には電信、電話の二回線が必要である。又此の際第五師團とは、特に克く意志の疏通を圖らなければ



ばならないから、縦ひ遠隔地と雖も通信連絡の完備を期せなければならぬ。又各部隊は焦躁なる動員と集中輸送とによつて幾多の缺陷を感じ、之が補綴に忙殺せられる時機であるから、特に後方との通信容量も極めて激増するものである。

案者中には後方回線を僅か一、二條の單信回線で足りりと爲してゐるものあつたのは、適當でなう。

### 二、軍司令部の躍進に就て

軍司令部の躍進に就ては、軍司令官の企圖によつて異なるであらうから、勿論軍司令官に連絡を取るべきである。併しながら、軍の統帥は連絡施設完備せざれば甚だしき缺陷を生ずるのであるから、通信設備の完否が軍司令部の行動を律する一つの準據となることも止むを得ない所である。故に軍通信線として其の通信施設擔任の見地から一つの判断を持たねばならぬ。併し此の技術的判断に於ても其の基礎は戰術戰略上の要求を基礎として技術が之を許容し得るや否やを検討することが緊要である。作業者の案は此の點極めて區々であつて、軍司令部が毎日軍隊と共に行軍せんとするものから、敵と觸接を豫期する十五日夕頃に漸く哈爾濱を出發せんとするもの等各種各様である。

抑、軍の統帥は、焦躁なるを戒むると同時に、又緩慢に過ぐるは軍の生氣を失ふものであつて、何れも不可である。

特に本狀況に於ては彼我對進するものとせば、十四日頃には敵と觸接する虞があるから、其の前夜十三日夕には軍司令部は第一線近く進出して適宜部署する必要があることを豫期しなければならぬ。故に此の時機には適當の地點に躍進する必要がある。

### 三、兵站施設に就て

一般に兵站の研究は深刻味を缺くものがあるやうである。軍の戰術を研究する者は、事兵站に關しては、常に之に關する常識的概念を念頭から脱退することは許されないのである。若し然らざれば、軍の運用は極めて頼りない空論に墮落してしまふものである。

案者中、兵站地の距離を十二、三里から四、五里に互つて無造作に△を書き並べて、何等疑はないものが相當あつたのは、研究不十分といふよりも寧ろ研究しなかつたものであらうと思はれる。

兵站地の距離は、其の輸送機關の能力によつて一日の行程を限度にして決定すべきものであることは原則の示す通りである。特に主兵站線方面に於ては、輸送量の増大を考慮すれば自ら明



かになることと思ふ。

又兵站主地を輕々しく推進し、甚だしきは十五日頃には既に海倫に主地を推進したものであるのは、何等かの誤解であらう。兵站主地は戦地に於ける兵站の策源地であつて、相當大な施設をしてあることを忘れてはならない。

其の他兵站支部相互間に局地回線を構成してない作業も多かつたが、斯くては、如何にして縦列發受の事務の打合せをするか、了解に苦む次第である。

#### 四、機動間の通信に就て

機動間に於ける毎日の通信網の變化を具體的に研究することは、極めて肝要である。然るに前後の關係を無視した超躍的計畫の多かつたのは、遺憾である。

又今まで中央に保持した通信連絡の幹線を、一朝にして忽ち呼海線に沿ふ方面に轉移する如き計畫は、實行不可能であつて、單なる紙上計畫の遊戲に類するものである。

又電話機の性能を過信して二百里離隔した距離を其のまゝ使用せんとするが如きは夢である。之には、必ず所要の技術的技巧を加へなければ實施は不可能である。軍用線路が概して電氣的、技術的には極めて不備なものであることを一應了解して置く必要がある。

又機動間全く單信のみによつたのも、前項の理由によつて一案とは認めるけれども、第一線兵團は相互に電話による意思の疏通の効果を強く要望するものであることを無視する譯には行かないのである。

#### 五、第五師團との連絡に就て

第五師團と軍司令部との連絡は、集中間多くは既設線によつて之を行ひ、無線の使用は之を戒むる趣旨には同意であるが、機動間に於ても尙有線架設によつて之が連絡を確保せんと企圖したものは直ちに同意は出來ないのである。一部の案者は之は將來北鐵西部線と大賚線とを結ぶ重要な通信線となるから決して無駄とはならぬ、と稱するかも知れぬが、軍が今から連續二會戦を實施しようと、重大なる決心を以て全力を之に注ぐとき、大賚線の如き直接會戦に關係のない鐵道に戀々たるべきものではない。第五師團の爾後の補給は安達站から行へば足れりとするのである。

故に第五師團は宜しく大賚線の如き將來性なき補給路を速かに放棄斷念して、今まで集積し得た物資は悉く安達站方面へ轉送するか若くは自から携行して安達站に到るを有利とする。敵に對する考慮の比較的薄い此の方面の師團としては之を許すのである。



故に第五師團の機動の爲に有線架設を特設せんとするが如きは、愚案と謂はねばならぬ。若し此の長遠な回線中に故障が発生したら、其の利用價值以上に禍の増大することを考へて置かねばならぬ。従つて機動間は無線連絡を可とする。殊に状況上通信内容も通信量も極めて簡單であり、短小であらうことは豫想し得る所である。

#### 六、騎兵集團及集成騎兵隊との通信に就て

此等の部隊は、集中間に於ては、最寄集中掩護部隊を經由して軍司令部に對し有線連絡することを以て満足しなければならぬが、機動間に於ては、其の特性上、無線及飛行機に依らなければならぬことは明かである。

而して作業者の案中には、想定に於て與へて置いた集成騎兵隊の無線を、認むべき理由なくして取除いたり、又本來之を有する騎兵集團に別に無線一、二小隊を配屬した案もあつたが、之は部隊の實情を十分討究しなかつた爲であらう。

#### 七、無線通信網に就て

集中間及機動の初期に於ける無線の使用を制限せんとする著意の多かつたのは、同意する所である。

然れども、作業者の中には新京へ無線小隊を派遣したもの、或は軍飛行隊司令部へ配屬したものの或は飛行場へ二小隊も派遣したもの等があつたが、全體として無線の数が少い現況に於て此等は一考を要するものである。航空通信の重要性に鑑みて之に無線を利用せんとした著眼は、必ずしも不可とはしないが、之が爲に有線施設を廢止したのは適當でない。蓋し航空通信に電話を希望する理由は、直接協同する部隊と相互に意思の疏通を圖る爲である。此の際空軍運用上廣地域に分散せる飛行部隊の戦闘指揮に電話を用ふるか電信を用ふるかは、相互の距離や通信施設の可能の限度によつて異なるものであるが、之は本狀況とは無關係として今暫く保留して置く。

若し亦、航空部隊と各部隊との間に無線連絡を必要とした場合に於ても、飛行隊自隊の無線機によつて十分に目的を達するのであつて、わざわざ之を配屬する必要はない。況んや作戦場を離れて遠く後方新京へ後退せしめる案には不同意である。新京にはもつと完備した無線設備がある。

#### 八、航空通信に就て

航空通信網を單に電話回線一條のみに止めて、第一線兵團との連絡手段を講じてゐない案や、



或は全く有線連絡を缺いで一、二機の無線によつて全飛行隊と兵團との相互間の連絡を爲さんとしたもの、又は全然航空通信を考へなかつたもの等のあつたのは不可である。航空隊内の自體運用の爲には、固有の航空通信隊に依るであらうが、各兵團との連絡は軍通信に於て考慮しなければならぬであらう。

#### 九、軍後方通信に就て

軍の後方通信に就ては、其の重要性と之に對する通信の種類並に通信容量に就て的確な認識を缺いてゐるものが少くないやうである。

之が爲大本營及内地等に對する連絡を全く忘れたものや、或は單信一回線を以て此等の全要求を充足し得ると思つてゐるものや、或は直通回線の必要性を知らないものや、或は甚だしい者になると、大本營直轄管區とも見るべき哈爾濱(含まず)以南新京方面に向つて軍の通信網を架設せんとしたもののあつた如きは、一般の状況の認識に缺けて居る爲であらうけれども、もつと眞剣に研究しなければ所期の目的を達成出来ないのであらうことを注意して置く。作業者以外に於ても此の研究方針の堅持を希望して止まない。

## 第二問題原案

### 軍會戰指導ノ方策ニ基ク軍並ニ兵站通信網

#### 第一方 針

- 一、軍ハ通信連絡ノ重點ヲ哈爾濱—望奎—倫河鐵道上ニ保持シ有線ヲ以テ主通信トナシ軍ノ活潑ナル機動ニ追隨ス
- 之ガ爲機ニ先ンジ連絡幹線ノ推進ニ努ムルト共ニ野電及兵電ノ密接ナル協力ニヨリ作業力ノ經濟的使用ヲ期ス
- 二、無線通信ハ初期極力之ガ使用ヲ節シ戰團並ニ追擊間ニ於テ其ノ能力ヲ最高度ニ發揮セシム但シ遠隔兵團ニ對シテハ祕匿性ヲ保持シツツ其ノ機動ニ遺憾ナカラシム

#### 第二要 領

#### 一、集中間

- 1、集中間作業隊ハ極力機動準備ノ態勢ヲ以テ作業頭ヲ推進シ置クモノトス
- 之ガ爲宿營地ノ前端爲シ得レバ集中掩護陣地ノ線マデ架設セシム既設線ノ補修利用ニ於テ特



ニ然リトス

2、無線通信ハ搜索機關ノ一部ヲ除キ之ヲ封止ス

## 二、機動間

1、通信連絡ノ幹線ヲ哈爾濱—望奎—倫河鎮道上ニ保持シ勉メテ第一線ニ近ク機ニ先ダチテ之ヲ推進ス

2、有線中隊ハ兵電中隊ト協力一體トナリテ作業力ノ發揮ニ努メシム

3、軍後方回線ハ勉メテ輕易ニ之ヲ構成シ要スレバ隨時補修セシム

4、第五師團ト軍司令部間トノ連絡ハ祕匿性ヲ保持シツツ無線通信竝ニ飛行機ニヨリ之ヲ確保ス

5、敵ニ近接スルニ從ヒ軍司令部ト各兵團間トノ連絡路ヲ短縮シ爾後ノ戰鬪ニ遺憾ナカラシム

## 三、戰鬪間

1、通信中樞ヲ拜泉附近ニ移シ軍主力ノ企圖作戰ニ遺憾ナカラシム

此ノ際北安鎮方向ノ敵ノ通肯河方向ニ對スル突破竝ニ齊々哈爾濱方向ノ敵ノ我ガ側背攻撃ニ對スル通信網ノ確保及神速ナル轉移ヲ豫期ス

2、無線通信ハ有線通信ノ缺ヲ補ヒ其ノ特性ヲ發揮スル如ク使用ス

## 四、追撃間

1、無線通信ハ其ノ特性ヲ最高度ニ發揮シ以テ軍ノ神速ナル追撃ニ追隨ス

此ノ際特ニ第五師團ト軍司令部間トノ連絡確保ニ遺憾ナカラシム

2、追撃ノ進捗ニ伴ヒ軍後方回線ハ逐次之ヲ整理シ海倫ヲ基點トスル通信網構成ヲ豫期ス

## 五、第二次會戰

1、第一次會戰漸次終末ニ近ヅクヤ機ヲ失セズニ克山ヲ起點トシ第二次會戰ノ爲ノ通信網ヲ構成ス

2、爾後連絡ノ重點ヲ齊北線ニ沿フ地區ニ保持ス

3、兵站施設 安達站ヲ起點トスルニ至レバ速カニ通信網ノ起點ヲ該方面ニ轉移ス此ノ際有ユル高速機關ヲ利用スル外轉移ノ爲作戰用通信ヲ中絶スルコトナカラシム

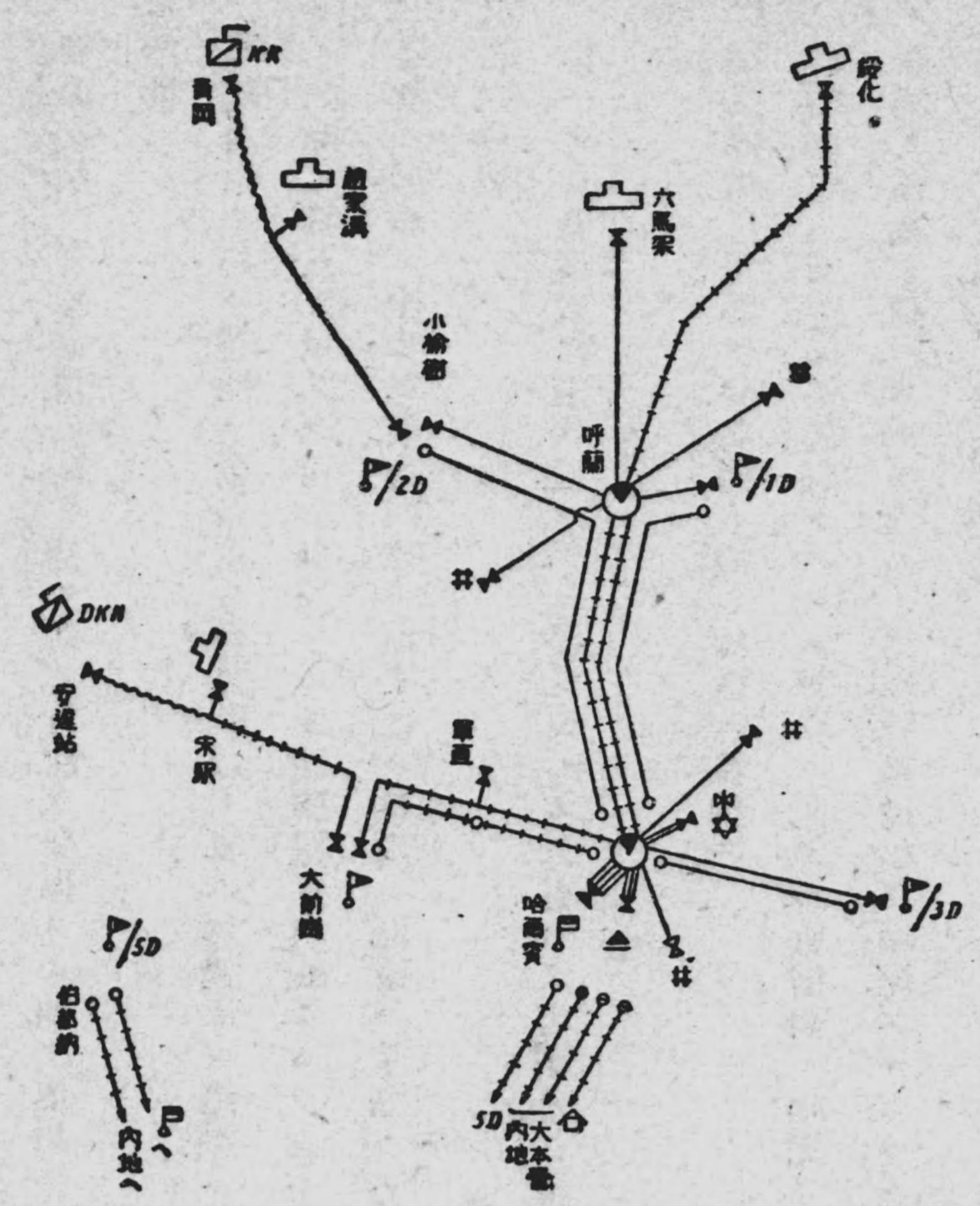
## 第三 細部計畫

通信施設ニ對スル細部ノ計畫竝ニ作業力ノ檢討左ノ如シ

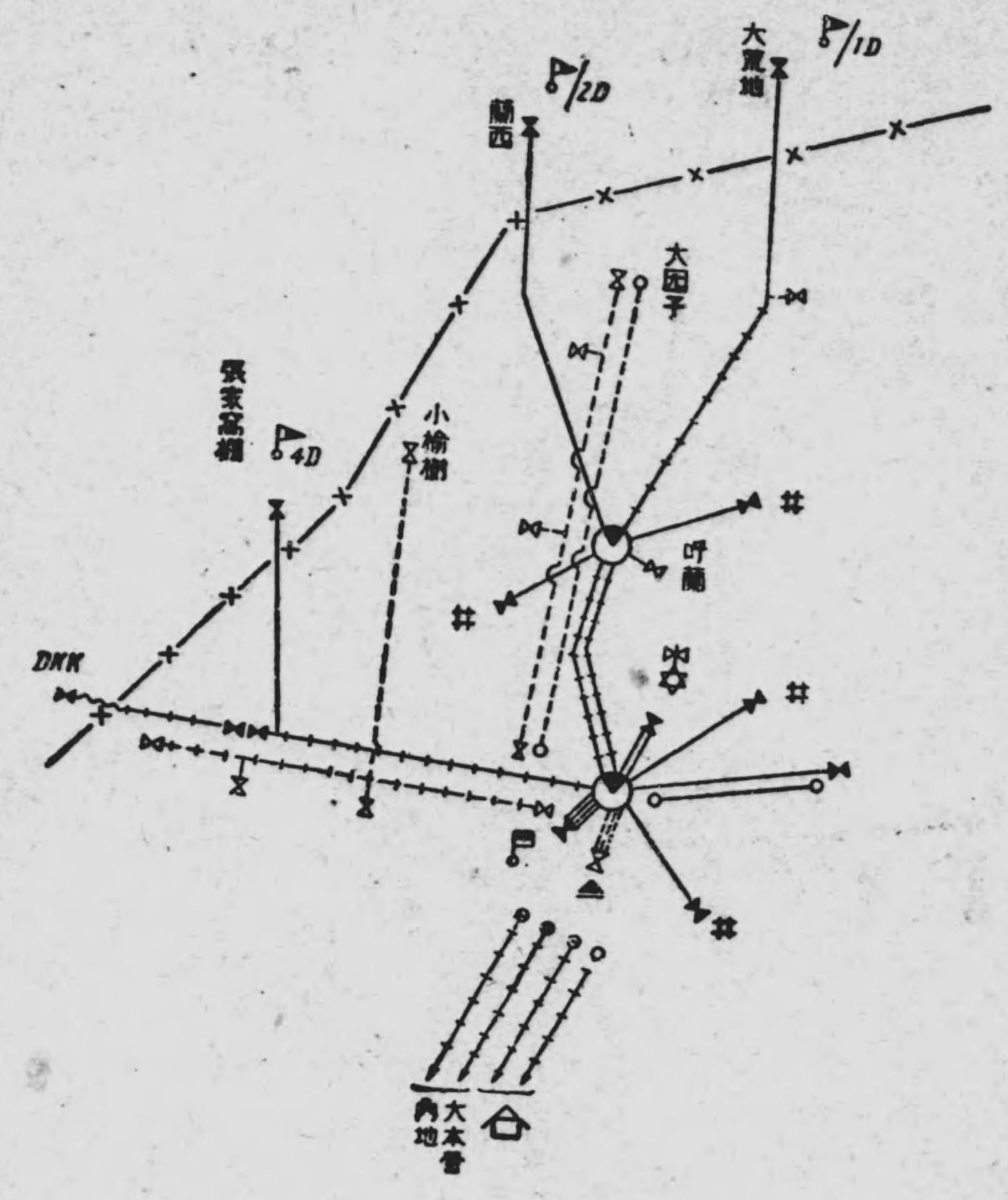
備考 要圖中 實線ハ主トシテ作戰用ヲ示ス(△)



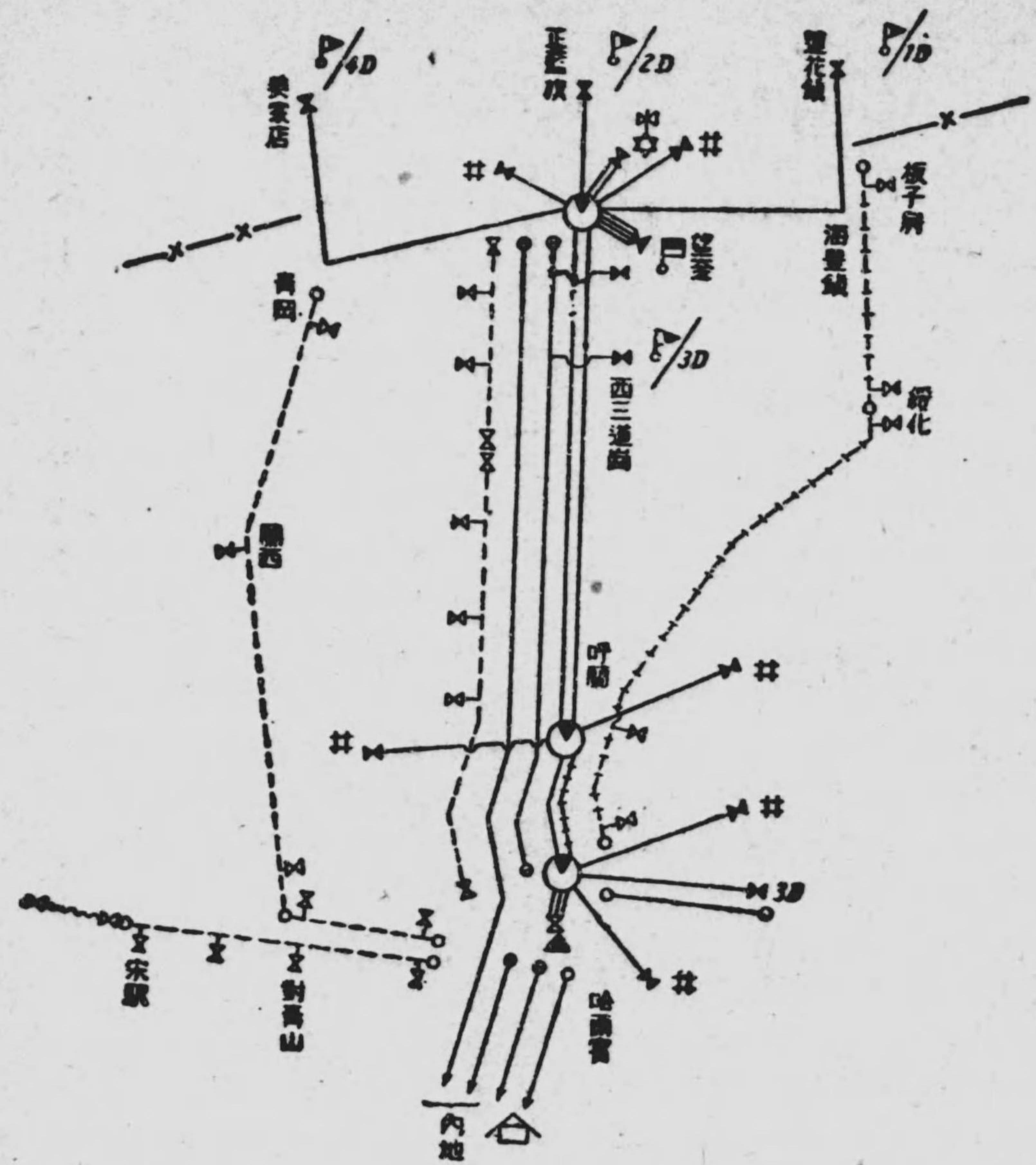
一、軍集中間ニ於ケル有線通信網  
 波線ハ主トシテ兵站用ヲ示ス(⌘)  
 —×—ハ兵電管區ヲ示ス



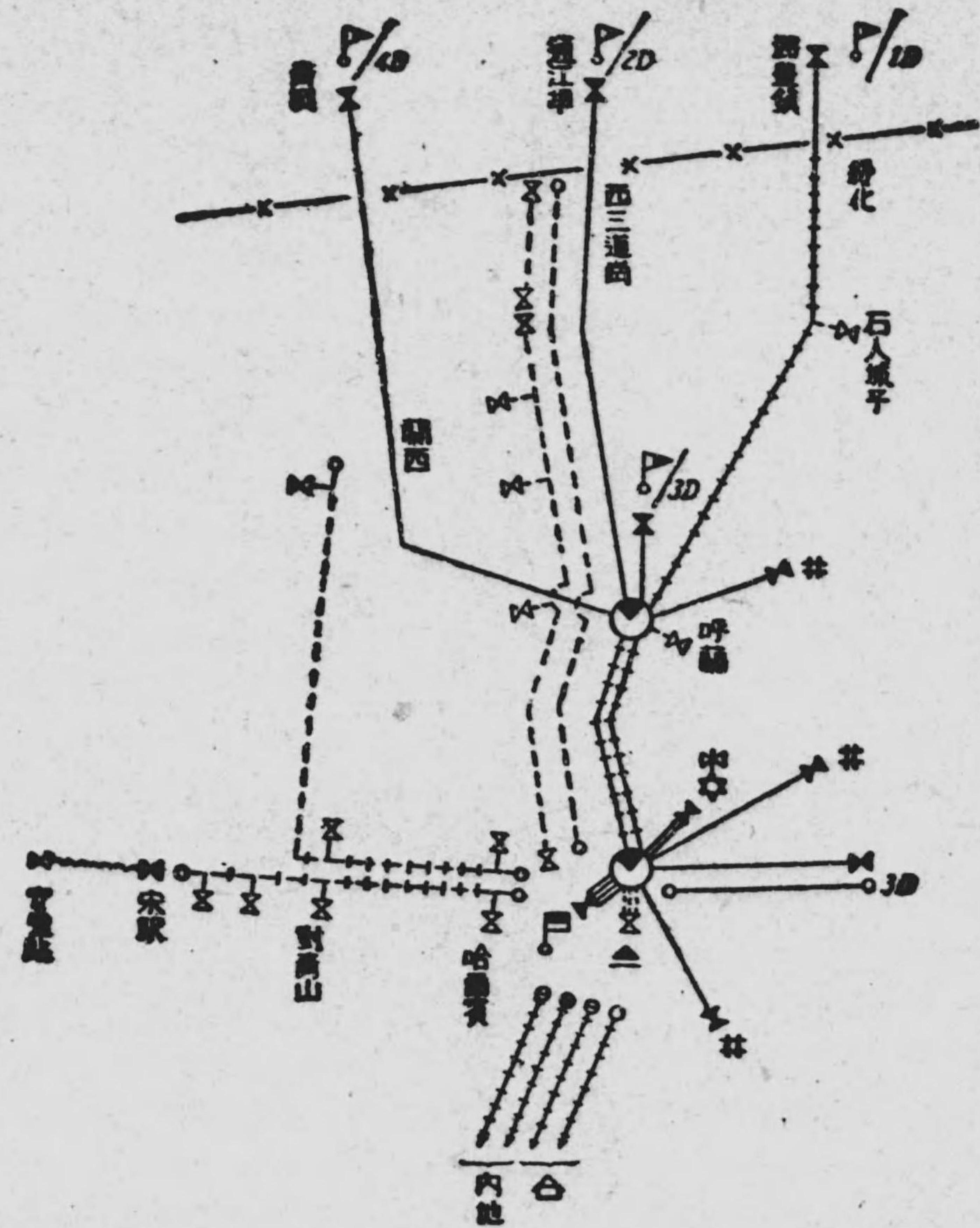
二、軍機動間ニ於ケル有線通信網  
 其ノ一 三月十一日夕ニ於ケル





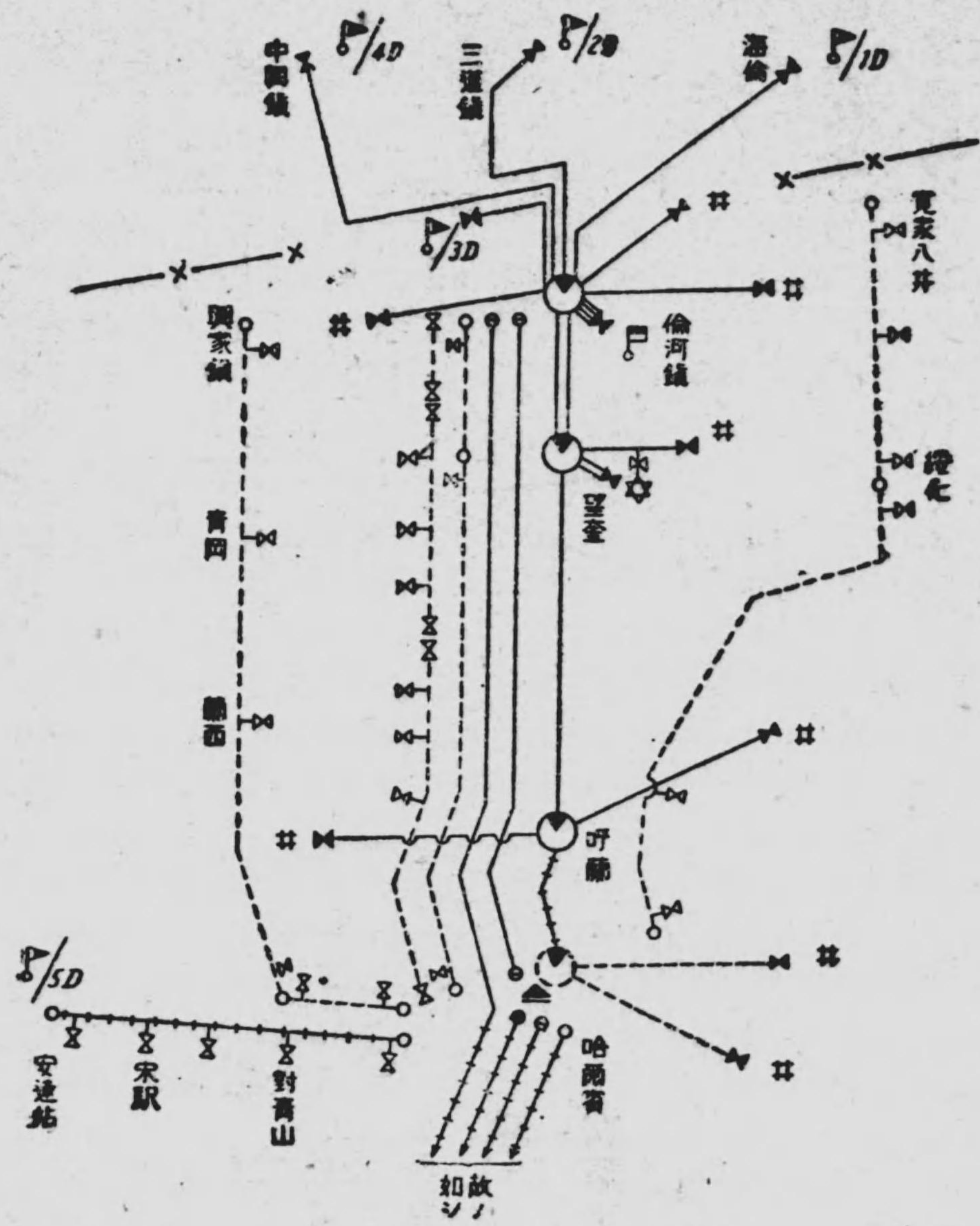


其ノ三 三月十三日夕ニ於ケル

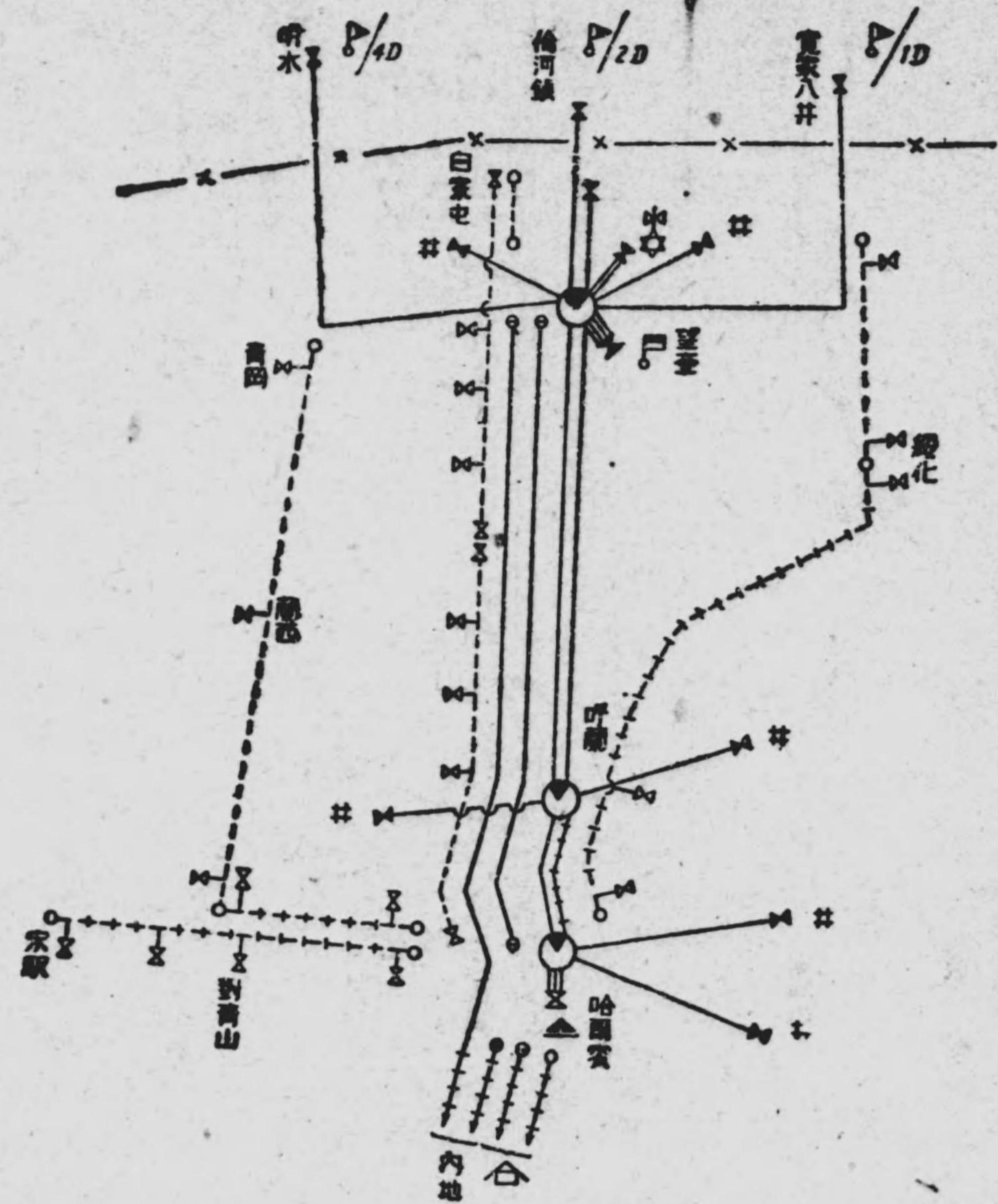


其ノ二 三月十二日夕ニ於ケル





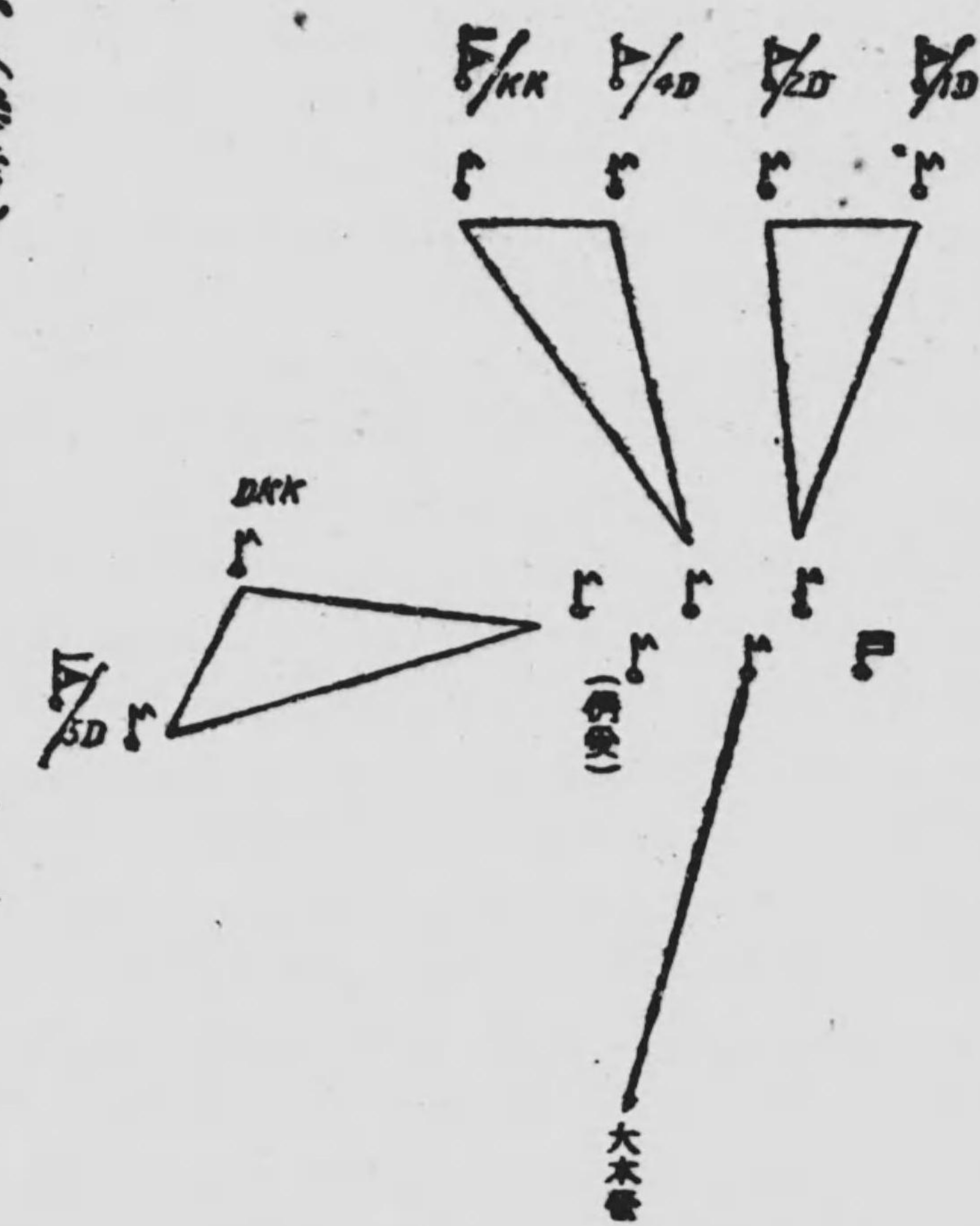
其ノ五 三月十五日夕ニ於ケル



其ノ四 三月十四日夕ニ於ケル



三、軍機動間ニ於ケル無線通信網  
概ネ左ノ如キ交信系ヲ保持シツツ躍進ス



備考

初期無線ヲ封止ス但シ搜索隊ニ屬スルモノ及5Dト軍司令部トノ連絡ハ祕匿性既ナル通信實施ニヨリ短時間ノ連絡ヲ實施ス

四、(参考)

軍機動間ニ於ケル作業ノ検討  
判決

酷寒期ニアラザル場合ニ於テハ野電及兵電中隊ヲ合シ辛ウジテ此ノ種軍ノ機動ニ追隨シテ所

望ノ通信網ヲ構成スルコトヲ得ベシ

備考

- 一、寒地ニ於ケル架設作業ヲ一小隊ヲ以テ毎時一・五軒ト概定ス
- 二、本算定ニ於テハ作業部隊部署ノ形式ニ拘束セララルコトナク作業單位タル小队ヲ以テ算定ノ基礎トス

故ニ狀況ニヨリ兵力移動ノ爲一部ノ快速機關ヲ利用スルコトヲ要スル場合アルヲ豫期ス  
特ニ二十四日、十五日頃ニ於テ然リトス

軍集中間竝ニ機動間ニ於ケル作業力ノ検討表

中 集			區 分
使用兵力	作業實施量	架設すべき量	
七	80	80	1D
一〇	120	120	2D
九	110		後方 幹線
三	30	30	4D
四	40	40	3D
			5D
四	50	50	其
			甲
五	60		乙
			丙
			丁
四二	490		計



備	十五日				十四日				日	
	所要時間	使用兵力	作業實施量	架設スベキ量	所要時間	使用兵力	作業實施量	架設スベキ量	所要時間	使用兵力
一、本表ハ寒地作業ニ於テ一小隊毎時一・五軒ノ作業ヲ實施シ得ルモノトシテ算定ス 但シ撤收ハ毎時二軒トス		五	50	60		三	32	22		五
		四	40	50		四	35	25		一
		三	32	66		四	34			三
		五	46	56		五	43	33		六
		三	30	40		二 (二)	20 (40)	10 (40)		
				30		三	30			二
		二	16	32		二	16			二
		三	32	32		四	34	34		三
		二	20	40		二	20			(三)
		二七	268			二九 (二)	264 (40)			二二 (三)
		六				二				九

三十		二十日				十一日				間
作業實施量	架設スベキ量	所要時間	使用兵力	作業實施量	架設スベキ量	所要時間	使用兵力	作業實施量	架設スベキ量	所要時間
53	53		二	22	22		二	13	13	
10	10		二	20	20		(二)	(30)	(30)	
30	240		四	40			六	60		
60	60		四 (一)	34 (8)	34 (8)		一	8	8	
20	20									
13	13									
30	60		四	40	70		六	60	60	
(45)	(45)		二	18	18		二	22	22	
216 (45)			一八 (一)	174 (8)			一七 (二)	163 (30)		
			一四							



考

- 二、一小隊毎日ノ實効作業ヲ八時間トス
- 三、作業量ハ軒ヲ以テ、兵力ハ小隊數ヲ以テ單位トス
- 四、括弧ヲ附シタルハ撤收ヲ示スモノトス
- 五、表中甲、乙、丙等ハ兵站線路ヲ示ス

1577	材使用
(123)	料
1454	

此ノ數除ノ此ノ豫備小

五、戰鬪間

有線材料ノ概算左ノ如シ

1D 後方	八〇
2D 後方	八〇
3D 後方	八〇
4D 後方	一一〇
5D 後方	一〇〇
航空用	一四〇
兵站用	二四〇
計八三〇軒	

六、追撃間

有線材料ノ概算左ノ如シ

1D 後方	八〇
2D 後方	四〇
3D 站用	四〇
4D 後方	四〇
5D 後方	五〇
航空用	五〇
兵後方	一〇〇
計四〇〇軒	

七、第二次會戰

但シ海倫ヲ起點トスル兵站線整理ニヨリ從來ノ後方回線ヲ整理轉用ニ努ム

拜泉附近ヨリ齊々哈爾ニ向フ作戰ノ爲 約 二、〇〇〇軒

爾後ノ作戰ノ爲 約 一、〇〇〇軒

計 約 三、〇〇〇軒

但シ第二次會戰ノ爲ノ材料ハ其ノ大部ヲ第一次會戰ニ於ケル後方整理ニ伴ヒ之ヲ轉用スルコトヲ得ルモノトス



八、本作戦間全局ニ互リ整備スベキ有線材料

第一次會戦ノ爲

集中及機動間

一、四五四

戰鬪間

八三〇

計二、六八四軒

追撃間

四〇〇

第二次會戦ノ爲

約三、〇〇〇軒

故ニ集中初期ヨリ整備スベキ材料トシテハ第一次會戦分全部ト第二次會戦分半數ト概算

シ全所要有線材料ハ

約四、〇〇〇軒

而シテ右數量ノ中ニハ各中隊ガ編成上所有セル量ト補給廠ニテ準備セル量トアルヲ以テ此

等ヲ除キタル殘餘ハ本作戦ノ爲特ニ整備ヲ要スル量ナリ

九、其他ノ材料及無線材料ニ就キテハ省略ス

## 第二問題原案の説明

一、軍通信幹線を何れに設置すべきや

軍は其の會戦指導の方策に於て、北安鎮方向の敵に對しては、其の右翼を包圍して之を東方の小興岑の密林地帯に壓迫する企圖を以てゐるのであるから、軍の重點は自から西方通肯河右岸地區に保持せられるであらう。併し機動の初期に於ては企圖の秘匿も必要であるから、恐らく通肯河左岸の地區を北上して重點を右とも左とも判断し得ないやうな状態で進むであらう。従つて通信も亦、其の重點を初期は通肯河左岸に沿うて施設する必要がある。

二、軍司令部の躍進に就て

軍司令部には各種の機關が附屬してゐるから、相當複雑であつて、頻繁に之を移動することは幾多の不便が伴ふものである。

故に通常敵と未だ遠隔してゐる時機に於ては、其の通信網構成の狀況を考慮して適宜に躍進の時機と方法をきめなければならぬ。

本狀況に於て考へて見ると、敵が若し同時に我に對して南下して來るやうなことがあれば、十三日夕以後に於ては其の第一線は彼我相當に近接するであらうから、翌十四日の爲には、軍として第一線の狀況に即應して適宜處置しなければならぬことが生起するものと豫期しなければならぬ。



故に軍司令部は十二日迄は現在のまゝ、哈爾濱に在つた方がよいが、十三日夕には一舉望奎に向つて躍進するを適當とし、爾後は、状況によつて變更するけれども、第一線が海倫河以北に進出し得るやうになれば、更に倫河鎮に向つて躍進して、第一線兵團との連絡路を短縮して状況の急變に即應し得ることが緊要である。此の時機は概ね十五日夕頃以後と豫定される。

### 三、兵站施設に就て

軍の有線は爾後兵站の電信線構成に便利なやうに選定することが有利であることは原則の示す通りである。況んや軍後方回線の如きは、爾後兵站到繼承せしめて之が維持に當らしむるものである。

故に軍通信網構成に方つては、軍兵站線路の概要を承知してゐることが必要であつて、軍命令に於ても亦軍通信隊には特に之を指示するものである。而して本状況に於ける兵站線路は、其の給養兵額の増大に伴つて概ね各師團の後方に一條は必要であつて、之に關しては、状況第一に於て明示された所である。

状況第一の要圖につき若干研究して見ると、哈爾濱—望奎—倫河鎮道は、軍主力補給の便と軍將來の企圖秘匿の爲に之を主兵站線として主要施設を實施し、又一方からは、齊々哈爾方向の

敵に對する掩護の便利をも顧慮したものである。

之に反して青岡—拜泉道は、自動車兵站として機動性を附與し、必要に際しては隨時重點の形成や輕快な轉移に便ならしめて置く必要がある。外翼に位置する兵站線であるので、一層其の必要が大である。又綏化—海倫道は遠く軍主力から側方に偏在してゐるから、勉めて兵站施設を節約して、兵站能力の彈力性維持の必要がある。若し之で輸送力を減殺する虞があるなら、副路の利用とか或は路外行動等の實施で發送縱列數の増大を圖る必要がある。

而して本會戰地域は四月中旬頃になると解氷期に入ることから、此の時から以後は鐵道利用によつて一切の現兵站施設の轉移整理の必要がある。従つて此等の諸施設は極めて輕易なもので満足しなければならぬものである。そこで兵站通信網も亦此の見地によつて構成する必要がある。三月十六日以後には呼海線を利用し得る見込の立つてゐる現状に於て一層然りである。

### 四、集中間に於ける通信網に就て

會戰指導の方策に基く軍通信網の研究に方つて、集中間の通信網は、之が基礎配置を爲すものであるから、一應考究する價值があると思ふ。集中間の通信網は、其の原則の示すやうに、集中其のものの爲にする通信と爾後の會戰準備の爲の通信との二様の意義を有するものであ



る。従つて後者の爲には互に意志の圓滿なる疏通を圖る爲是非電話回線を必要とし、前者の爲には特に後方遠く内地又は上陸地等との連絡が相當あるから電信回線を必要とする。

而して他面爾後の推進力保持を考慮すれば、勉めて資材を節約することが必要であつて、勢ひ既設線の最大限の利用となり、又將來間もなく不用になるやうな一時的の線は勉めて省略し、又新設する場合は將來の利用性を考へて之に應じ得る如く準線の選定を適當にし、又軍の機動に遅れないやうに、爲し得れば積極的に推進し得るやうに、豫め可能の範圍に於て最大限將來の爲の準備作業を実施して置く等の處置が肝要となるのである。

之が爲作業に任ずる兵力は、軍通信隊のものと兵站關係のものと一體となつて統一運用して其の能率増進を圖る著意が必要である。

##### 五、鐵道通信の利用に就て

狀況第一に「各鐵道ニ沿ヒ二條ノ既設線アリ」と示されてあるが、之は鐵道に沿ふ通信線のうち強ひて作戰の爲に使用せんとすれば二條位使へるとの意味に解すべきである。蓋し鐵道の運用に方つては、通信は必須であつて、鐵道通信を一切擧げて作戰に使用すれば、鐵道の運用は停止してしまふのである。故に鐵道を少しでも利用しようと企圖すれば、之が爲に通信線を使用

せしめる自由を與へなければならぬ。従つて狀況に示す「利用シ得ルモノ二條」とは、鐵道通信を壓縮して之を作戰用に使用せんとすれば二條は何とか使用し得る意味である。

此の際呼海線に沿ふ鐵道通信網は勿論匪賊や敵によつて破壊されてゐるであらうが、之が利用は重要な着眼である。従つて作戰の爲大部を補修して使用するは固より緊要なことであるが、呼海線を鐵道部隊によつて十六日迄に復舊しようとする大きな作業の實施を考へると、此の通信も亦多く作戰用に期待することは出来ないことも考慮しなければならぬ。殊に本狀況に於ては呼海線の位置が、軍主力の作戰軸と甚しく離隔してゐるので、其の利用價值も甚だ渺いのは残念であるが、致し方ないのである。

##### 六、軍機動間の通信に就て

機動は戰鬪の爲の準備行動であるから、機動間に於ける通信は、戰鬪に際して其の全能力を發揮し得るやうに弾力性を保有してゐなければならぬ。而して此の弾力性と云ふのは消極的な兵力や器材の愛惜と云ふ意味ではなくして、可能の最大限に其の通信兵力なり、器材なりを勉めて第一線に近く多くを推進して、軍の作戰構想を拘束しないやうに、積極的に之を支持し得るやうな弾力性を保持する必要のあることを強調したのである。従つて機動間の通信は情報



の交換に可能の範圍で節約しなければならない。

又本狀況に於ては、前項で述べたやうに解氷期の關係もあつて、兵站通信網と雖も、長時間の使用に供するものではないのであるから、極めて輕易な材料と作業法とによつて迅速に目的を達することを第一の着眼として實施しなければならない。従つて兵電、野電共に相協力して一體となつて、經濟的作業能率を擧げることが緊要である。

#### 七、第五師團との連絡に就て

第五師團と軍との連絡は、集中間は全く無線を使用することを避けて有線のみ依るを適當とする。尤も企圖秘匿の爲にする特別の無線使用は此の限ではないが、通信連絡の目的による無線使用を避けることが必要である。併しながら機動に移つたなら有線に依るは不利である。此の際こそ無線の特性を十分利用して之によつて連絡維持に努めることを適當とする。

蓋し第五師團は其の後方連絡を十五日以後は安達站に轉換せらるゝ筈であり、大賚や伯都訥からする連絡は當然之を廢止せられるであらう、之が爲十一日から十五日に至る間の補給量に應ずる縦列は其の儘師團と共に安達站迄同行しつゝ補給する程度で十分である。従つて第五師團は安達站に出るまでは後方連絡を維持する必要はなく、通信も亦單に師團と軍司令部との連絡

のみであつて、十五日以後は安達站から直接連絡し得るのである。従つて遠隔兵團との連絡には無線によるべき原則によつて無線又は要すれば飛行機による連絡を以て満足することとしたのである。而して其の通信内容も亦、出發や到着に關する單簡な時刻や地點の程度に止めて、情報や其の他の事項に關して是非必要とするやうなことは飛行機によることが大切である。是第五師團の如く敵と甚だしく隔離してゐるものにあつては、斯くの如き通信を以て満足し得るし、無線の使用法によつて敵に秘匿しつゝ此の種の短通信を實施し得るからである。

#### 八、騎兵集團との連絡に就て

騎兵集團や集成騎兵隊等と軍司令部との連絡は、集中間は主として有線連絡に依ることが出来るけれども、一度機動を開始すると爾後は無線や飛行機によらなければならないのは特性上致し方がないのである。

#### 九、軍後方幹線に就て

軍後方回線として、原則に示すやうに、軍司令部と大本營との直通回線と、軍司令部と兵站との直通回線との二條は常に必要である。而して通信機の種類は、其の通信量によつて決定すべきで、回線増設を許さない作戰間に於ては、勢ひ多重通信の使用となるのは止むを得ない所で



ある。

十、兵站通信網に就て

兵站通信網は、兵站部の業務回線と、軍後方回線とに區分して研究することが必要である。兵站部の業務回線としては、兵站主地と各兵站地區司令部とを連絡する電信回線（距離長遠となることを豫期して）と、兵站地區司令部と其の同支部とを連絡する電話回線と、更に各兵站地を連絡する電話回線とを必要とする。併し三者の中中者と後者とは、通常同一回線間に合せ得るから、兵站通信網としては、電信電話の二様の回線を設けなければならない。之が爲主兵站線には之に沿うて二條を、其の他の兵站線には電信電話の双信法を採用して一條に節約するを適當と考へる。

又兵站と後方との回線も重要にして、兵站監と大本營及内地師團司令部との連絡の爲には、通信量の關係上自動機回線一條を必要とし、更に集積主地諸廠との連絡の爲には二重機回線一條が必要である。

此等の兵站の爲の後方回線と前項に述べた軍の後方回線とを含めて、後方に向つて整備しなければならぬのである。本狀況に於ては北鐵南部線及拉賓線等によつて此等の要求は充足し得

るのである。

十一、無線通信に就て

無線通信は互に密接に協同連繫を要する兵團毎に一系内に纏めることが適當である。従つて第五師團、騎兵集團と第四師團、第一師團と第二師團等とを一群づゝに區分して軍司令部と組合せることが必要である。

又後方連絡の爲には固定線が必要であるが、幸ひ青軍の首府は奉天にあつて近いので、軍通信を以ても容易に輕快に連絡し得ることは恵れてゐると見るべきである。

十二、航空通信に就て

航空通信は、原則の示すやうに、根據飛行場と前進飛行場及軍司令部間には少くも専用二條の電話線を要し、之を交換機に加入せしめて各兵團と飛行隊間の連絡確保に任ずる必要がある。此の際一言すべきは、空軍用法による航空通信網と兵團配屬部隊の航空通信網とは自から別個に考ふべきことである。前者の爲には電信回線によつて廣地域の連絡確保が必要であり、後者の爲には各兵團との連絡の緊密を圖る爲電話連絡を可とする。本狀況に於ては後者の場合についてであることを先づ承知する要がある。



扱軍の機動に伴つて各飛行場も逐次推進されることとなる、そして其の限度は、飛行隊の活動半徑と通信連絡の確實性とによつて決定されるであらうし又敵と近接して状況切迫すれば勢ひ推進する必要が生ずるであらう。此の見地に基いて研究すれば、先づ原案のやうに通信網を施設する必要があらう。

附 言

x

x

x

x

第二問題の研究に方つて通信に關する原則的説明を加へる豫定であつたが、其の内容中には若干公開を憚るものが少くないので、本誌に掲載することを割愛した。他日特別取扱の單行本として發行される場合があつたなら、是非畫龍點睛の意味で原則的説明を加へたいと思つてゐる。讀者幸に之を諒とせられよ。

尙爾後狀況を進めて第一會戰迄に及び其の間實際に軍通信網の推移が如何に具體化し、實現されて行くかを研究する筈であつたが、諸種の關係上之も亦中止して第二想定以下に於て戰闘、追撃等の作戰に即應した研究をすることにした。

第二想定

所要地圖

二十萬分一 福島、白河、水戸、新潟、日光、宇都宮  
五萬分一 棚倉、塙、白河、太田原、喜連川、烏山、眞岡、那須岳、鹽原、矢板、  
宇都宮、壬生、日光、鹿沼

- 一、京阪地方ニ根據ヲ有シ關東地方ニ進入スル敵ヲ擊滅シ速カニ同地方ヲ領有スベキ任務ヲ有スル青國第一軍ハ三月中旬以來主力ヲ以テ郡山附近、一部ヲ以テ平附近ニ集中中ナリ
- 二、敵情ヲ搜索シ且敵ノ前進ヲ遲滯セシムベキ任務ヲ有スル騎兵第一集團ハ三月十八日夕黒磯附近ニ達シ宿營ス
- 三、此ノ時迄ニ集團長ノ知り得タル狀況左ノ如シ

1. 優勢ナル敵ハ利根川ヲ越エテ北上中エシテ其ノ一部ハ既ニ箒川河畔ニ進出セリ其ノ概況左ノ如シ

箒川河畔 優勢ナル敵ノ騎兵團箒川右岸高地線ヲ占領シアリテ我が斥候ノ潛入ヲ許サズ  
氏家附近 敵騎兵ノ密集部隊アルモノノ如シ



宇都宮附近 二、三師團ノ敵ハ川越方向ヨリ北進シ宇都宮附近ニ集中中ナルモノノ如ク

栃木―館林道及小山―古河道ハ何レモ敵部隊ニテ充滿シアルガ如シ

久喜附近 東海道線ニヨリ輸送セラレタル三、四師團ノ敵ハ續々東京附近ニテ下車シ久喜附近ニ集中中ニシテ近ク前進ノ風評アリ

成田附近 一、二師團ノ敵ハ九十九里沿岸ニ上陸シ成田附近ニ集中中ナルガ如シ

高崎附近 二、三師團ノ敵ハ松本方向ヨリ輸送セラレ高崎ニ下車中ナリシガ既ニ其ノ大部ノ輸送ヲ完了セルガ如シ

## 2 軍ノ状況左ノ如シ

白河附近 1D及軍直部隊ノ一部

第一師團ハ軍ノ集中ヲ掩護スベキ任務ヲ以テ仙臺附近ヨリ輸送セラレ三月十日

五日以來白河附近ニ集中中ナリシガ三月十八日夕其ノ全部ノ集結ヲ完了ス

平附近 5D及軍直部隊ノ一部

第五師團ハ水戸方向ヨリ軍主力ノ作戰ヲ容易ナラシムベキ任務ヲ以テ常磐線ニヨリ輸送セラレ三月十五日夕以來平附近ニ集中中ニシテ十九日夕頃ニハ其

ノ集結ヲ終ル筈

郡山附近

軍主力ハ東北及奥羽本線ニヨリ輸送セラレ郡山附近ニ續々下車中ニシテ近ク

第一線兵團ノ輸送ヲ完了スル筈ナリ其ノ日程左ノ如シ

十八日 軍司令部、第二師團、軍直一部

十九日 第三師團、軍直一部

二十日 第四師團、軍直一部

二十一日 兵站部隊ノ殘部

若松附近 右側支隊 (III/8i 9/2A)

會津西街道方面ヨリ敵ノ側背ヲ脅威シ軍ノ作戰ヲ容易ナラシムベキ任務ヲ以テ三月十八日夕若松ニ輸送セラレ

四、集團ノ編組左ノ如シ



長 中將某

騎兵第一集團

配屬部隊

步兵第四聯隊第三大隊

野砲兵第一聯隊第九中隊

第一師團野戰高射砲隊

無線通信第六小隊

五、青國第一軍ノ編組並ニ作戰資料ノ概要別紙第一、第二ノ如シ

(別紙第一)

青國第一軍ノ編組

軍司令官 大將某

第一軍司令部

第一乃至第五師團(第三師團ハ駄馬)

戰車第一乃至第五大隊

騎兵第一集團

獨立野砲兵第一、第二聯隊

獨立山砲兵第一、第二聯隊

野戰重砲兵第一旅團

獨立野戰重砲兵第一聯隊

砲兵情報班

野戰高射砲隊三〇隊(内一〇隊移動式)

照空隊八隊

獨立工兵四大隊

第一軍飛行隊(二大隊(偵))

氣球一大隊

第一軍通信隊(本部、野電七中隊、無電九小隊)

其ノ他略ス



第一軍兵站部(略ス)

(別紙第二)

作戰資料ノ概要

- 一、戰場ハ滿洲附近ト同様ト看做ス
  - 二、敵ハ〇軍トシ主都ヲ大阪トス
  - 三、青軍ノ主都ハ青森トス
  - 四、新潟縣ノ地區ハ嚴正中立トス
  - 五、住民地ノ市街ハ概シテ不燒性物料ヨリ成ルモ村落ニハ木造ノモノ多シ
  - 六、二十萬分一及五萬分一地形圖ノ二條實線路ハ野戰重車輛ノ通過ニ支障ナク二十萬分一圖上實線路及五萬分一地形圖實線路及點線路ハ野砲ヲ通ズルモノ多シ
- 近時改修ニヨリ重車輛ヲ通ズルモノ左ノ如シ
- 白河—高清水—甲子溫泉道
- 外面—熊倉—鶴生—追原—黒森—廣谷地道

外狩—大島—小結—觀象臺道

乙字瀧—三城ノ目—中畑—北平山—田島道

釜ノ子—金山道

七、鐵道ハ戰場附近ニ於テハ兩軍トモ使用シ得ズ

八、通信ハ主要ナル鐵道又ハ陸羽街道竝ニ陸前濱街道ニ沿ヒ四乃至六條ノ電信線アリ但シ白河及平以南ハ使用シ得ズ

青森、仙臺、東京、名古屋、大阪ニ主要ナル固定無線局アル外仙臺、東京ニ大放送局アリ

九、飛行場 略ス

一〇、海上ハ九十九里沿岸ノ外上陸ニ適スル處ナク且優勢ナル敵海軍ノ爲制セラレ當分用兵ノ見込ナシ

第一問題

騎兵第一集團長ハ如何ニシテ任務ヲ達成セントスルヤ



## 第一問題の研究

一、諸官の案を大別すると概ね左の三案に別れる。

### 1、主力轉進案

イ、主力を以て茂木方面に轉進して宇都宮平地に向つて集中中の敵情を搜索し且敵の前進を妨害せんとするもの

ロ、主力を以て鬼怒川上流方面に轉進して敵の左翼方面から搜索を續行せんとするもの

### 2、攻撃案

イ、主力を以て矢板附近の敵を撃攘し以て宇都宮方向の敵を搜索せんとするもの

ロ、主力を以て馬頭方面より敵を攻撃し宇都宮方向の敵情を搜索せんとするもの

### 3、現状維持案

現態勢を以て依然搜索を續行せんとするもの

二、轉進案中の第一案は騎兵の機動力を發揮して敵兵團配置の薄弱部である筑波山系方面から深く敵中に楔入して行動の自由を獲得し、以て敵情を搜索し併せて側背脅威の効果を収めて、敵

の前進を妨害せんとするものであつて、一應首肯し得る案であると思ふ。

併しながら本案は、軍集中の初期に於て未だ先著兵團が軍主力の爲集中掩護陣地の占領を完了してゐないのに、其の正面を過早に開放する危険を暴露すると共に、當面の敵情に一指も染めずして徒らに之を過大視して直ちに行動不便な山地方面に機動戦力を投入するの不利がある。深く敵後方に楔入することは、固より希望する所ではあるが、集中初期に於ける軍正面の敵情は、爾後の軍集中指導に直接影響する許りでなく、先著師團との協力上から云つても緊急なことであるから、先づ之を明かにすることが必要である。

此の際宇都宮以南の敵情の如きは一部の潜入搜索を以て満足する外は飛行隊の活動に期待し得る所であらう。

況んや、優勢な敵騎兵團に對し動もすれば終始受動に陥る虞なしとしない青軍騎兵集團は、勉めて機先を制して敢て敵に一撃を加へ、以て緒戦の効果を收むることが、爾後の作戦指導上有利である。

又側背脅威を以て敵の前進を遲滞せんとするも、敵の大兵團なるに思を致したならば、果して軍主力正面に推進せらるべき敵を、茂木附近に遠く偏在して幾何の牽制効果を擧げ得るやは疑



問である。

要するに大兵團の統帥は爾く薄弱なる基礎の上に律せらるべきものではない。軍内の集團長としては、常に軍司令官の構想を以て自己を律せなければならぬものであることを銘肝せねばならない。

三、轉進案中の第二案である敵の左翼方面に潜入せんとするものは、前項に述べたやうな趣旨の不利がある許りでなく、高原山一帯の山系を敵の妨害なくして容易に濾過し得ると思考するやうであるが、今一步を譲つて、假りに無事鬼怒川河谷に轉進し得たとするも、爾後の行動は今市、鹿沼附近の地障に妨害せられ、更に足尾街道方面からする敵に牽制せられて、行動を束縛せられる虞がある。

尙轉進案中に水戸平地方面に機動せんとするものがあつたが、之は全く軍主力方面の敵情搜索を放棄したもので、徒らに任務を脱逸したものである。

四、攻撃案の理由とする所は、依然現態勢を以て搜索を續行せんとしても、箒川右岸の敵情は威力を行使するのぞければ搜索効果を収むることは出来ない、といふのであつて、之は勉めて機動によつて目的を達せんとする趣旨から見れば、不利なやうであるが、速急に軍正面の敵情

を搜索することが特に緊要な現狀に於ては、寧ろ敵に先だつて之に震撼的一撃を加へて、緒戦の効果を収めて一石二鳥の利を得んとする本案に對し原案者も同意するものである。

殊に作戦初動から徒らに敵を回避せんとするやうな思想は、吾人の同意し得ない所である。況んや當面の敵情は敵の騎兵部隊であつて、未だ歩兵の主力部隊を見ない狀況に於ては特に然りと謂はねばならぬ。

此の際攻撃方向を馬頭方面から敵の右翼方面に指向せんとする趣旨は、必ずしも一理なしとしないのであるが、要は敵に餘裕を與ふることなく其の態勢(敢て陣地と稱せず)上の弱點に乗ずる如く矢板附近に指向するを適當と認める。

五、現狀維持案の如く、現在の搜索部署を以て依然任務を達成し得べしとなすものは、箒川右岸高地の敵情に對する認識を缺いたもので、適當と認め難い。

六、本問題は集團長の直後の決心を求めたものではなくして、任務達成の爲爾後如何に集團を運用すべきやを研究するにある。

故に本想定に於ける集團の如き戦略持久任務の兵團にあつては、爾後の使用は、軍作戦の推移に應ずる某期間に於ける行動を豫察して、其の使用を考究することが必要である。



然るに諸君の案中には此の點に關し考慮せるもの少く、單に直後の決心の範圍のみに局限せるもの多かつたのは、適當でない。

### 第一問題原案

#### 方針

集團ハ一部ヲ以テ大子町ヲ經テ茂木方面ヨリ宇都宮方向ノ敵情ヲ搜索セシムルト共ニ主力ヲ以テ明早朝出發矢板附近ノ敵ヲ攻撃ス  
止ムヲ得ザル場合ニアリテモ西那須野及那珂川河畔ニ於テ敵ノ前進ヲ遲滯セシム

#### 指導ノ大要

- 一、K三中、KA一中ヲ基幹トセルモノヲ大子町ヲ經テ茂木方向ニ派遣シ宇都宮方向ノ敵情ヲ搜索セシム
- 止ムヲ得ザル場合ニアリテモ大子町ハ之ヲ確保シテ軍主力ノ側背ヲ掩護セシム
- 二、先遣隊(i一中、K二中)ヲ即時出發西那須野ニ急進セシメ集團主力ノ進出ヲ掩護セシム
- 三、主力ハ攻撃ノ目的ヲ以テ二縱隊トナリ明未明出發重點ヲ高林―觀家臺道方面ニ保持シ箒川ノ

#### 線ニ向ヒ前進ス

四、參謀ヲ派遣シテ西那須野附近及那珂川河畔ニ於テ防禦ノ爲地形判斷ヲ爲サシム

### 第一問題原案の説明

一、開戦劈頭速かに機先を制して敵に打撃を加へ、以て爾後の作戰指導上主動の地位を獲得する著眼を必要とする。

戦例としては、一八一四年八月東普スタルペーネンの戦闘が如何にグンピンネン會戦に影響を及し、更に此の戦闘がタンネンベルヒ會戦に貢献したかを想起すれば、緒戦の效果の重大なる影響を知ることが出来るであらう。青軍騎兵の如く終始優勢な敵騎兵の大兵團と對戦しなければならぬ運命にあるものに於て特に然りである。

機動力發揮を單なる位置の轉移とのみ狹義に見るのは誤であつて、動もすれば其の蔭に戰闘回避の口實に陥る弊害を伴ひ易いものであることを戒心する要がある。

二、併しながら、全力を以て正面の敵を力攻せんとするは無策である。有力なる一部を以て宇都宮、水戸兩平地の中間地區より敵兵團配置の間隙に楔入せしめて、敵軍主力の側方から搜索せ



しむるのは當然努むべき所である。

三、集團は軍主力の戦略展開に至る迄は、其の任務は本質的に持久であるから、萬止むを得ざる場合に於ては、地形を利用して敵の前進を遲滞して軍主力の作戦を容易ならしむる等の、最悪の場合に於ける腹案をも考究して置くことが必要である。

四、集中間に於ける騎兵集團の用法の原則に就て一言すれば、集中間に於ける騎兵集團の用法の原則は、先づ主として軍主力の集中を容易ならしめることを第一とし、次いで敵の集中妨害及所要の搜索を行はしめるのである。

而して本状況に於ては、敵軍の集中を妨害することは時機既に遅くして、大なる期待を置くことは出来ない。蓋し徹底せる集中妨害は、鐵道破壊が最も効果的であり、特に橋梁、隧道等復舊困難なものを目標とすることが有利である。而も其の位置が集中地から遠く離隔してゐて、爾後陸路長距離行軍を要する所が最も望ましい地點である。

此の見地から五十萬分一の地圖を大觀して見ると、函嶺山系内や上信諸山系以西の隘路を目標とすることが必要であり、利根川河畔の如きは、大なる効果を期待することは出来ないと思ふべきである。

従つて此の際集團として著意すべきことは、軍主力の集中を容易ならしむる手段と、所要の敵情搜索とに重點を置いて對策を講ずる必要があることである。

### 状 況 第一

一、騎兵集團ハ一部ヲ茂木方面ニ派遣スルト共ニ主力ヲ以テ三月十九日未明黒磯ヲ發シ高林―觀家臺道ニ沿ヒ森林地帯ニ遮蔽シツツ前進ヲ續行シ正午頃箒川右岸ニ移リ小泉附近ノ敵ノ警戒線ヲ急襲ス

此ノ頃陸羽街道ヲ前進セル集團ノ一部亦野崎附近ヨリ敵ノ警戒幕ヲ攻撃ス

二、此ノ日細雨蕭條トシテ展望ヲ妨ゲ我が集團ノ攻撃幸ニ奇功ヲ奏シテ敵兵動搖ノ色アリ然レドモ漸次後方ヨリ部隊ノ救援スルニ及ビ次第ニ頹勢ヲ挽回シタルモノノ如ク十九日夕刻頃ニハ却ツテ積極的反撃ノ氣勢アリ

三、是ニ於テ集團長ハ本夜暗ヲ利用シテ西那須野附近ニ後退シ陣地ヲ占領シテ敵ノ前進ヲ妨害スルニ決シテ處置スル所アリ

### 第二問題



## 第二問題の研究

一、方針については大別して

- 1、某線を占領して軍主力の進出を待たんとするもの
  - 2、某線に於て火力により決戦防禦を爲さんとするもの
  - 3、機動防禦を爲さんとするもの
- の三案を豫想し得る。

二、陣地線については、細部に互つて研討すれば多種多様となるが、大體區分によれば左の通りとならう。

線としては

- 1、西那須野、太田原各南端を連ぬる概ね東西に互る線
- 2、藤荷田山、權現山を連ぬる概ね東西の線

更に前方箒川河畔に陣地を占めんとするものもあるかも知れぬが、之は状況上成立至難な案で

あるから研究外とする。

次に陣地の翼を何れに依托し又は何れに限定すべきやの問題であるが、之には左の數案がある。

- 1、西那須野、太田原の線を採用する案に於ては、
  - イ、右翼を高阿津附近に、左翼を法師峠又は御亭山迄伸ばす
  - ロ、兩翼を赤田山、太田原で制限する
- 2、藤荷田山より權現山に互る線を採用する案に於ては、
  - イ、右翼を關谷附近に、其の左翼を里田附近、又は御亭山附近まで伸ばす
  - ロ、兩翼を藤荷田山及太田原北側高地に制限する

三、抑、防禦方針として某線に於て軍主力の進出まで持久しようとする案者の理由とする所は、軍主力の會戦は那須以南で指導せらるゝから、西那須野附近は同平地に於ける重要な要點である、故に軍會戦の爲には是非之を確保して置かねばならないから、騎兵集團は萬難を排して之を占領して、軍主力の進出するまで之を維持することが必要だとするものである。

併しながら、本案は軍の會戦地を那須平地以南に求むべしとの獨斷論が基礎となつてゐる所に



重大な過失がある。

抑、會戰地は、常に我が方の行動の自由を獲得すると共に、其の企圖する作戰構想の要求に適  
應せしむることが緊要である。此の際徒らに地形に囚はれて戦機を逸したり或は甚だしきは作  
戦構想を破壊するやうなことがあつてはならないのである。

而して右の如き原則を達成する希望に對する可能の限度は、彼我の集中状態を精細に検討して  
見なければ判明し得ない所であり、本狀況に於ける集團長としては、獨斷決定し得る所ではな  
からう。

今集團長の判斷に委して、集團が全力を擧げて某地線に固著したとしたり如何なる結果となる  
か。之は恐らく遂には軍の會戰指導を拘束制肘したり或は過早に各個撃破を受くる結果に陥る  
虞がある。

尙茲に一言注意することは、本來騎兵集團は戰略持久任務を有するものではあるが、其の戰團  
實施の手段は攻防其の宜しきに從ふことが必要であることである。

古來戰略持久兵團が、攻勢によつて殲滅戰を指導して偉大なる戰勝を獲得した戰史の多い事實  
を銘心する要がある。

四、某線に於て火力防禦をしようとする案者は、近代戰の火力の効果に信頼を寄せたものであら  
うけれども、作戰要務令第二部第二百六十八に、

機動力ヲ利用シ其ノ特性ヲ發揮シ爲シ得ル限リ主動的ニ戰團ヲ指導スルコト緊要ナリ

と要求されてゐるのは、騎兵が機動戰力として、卓越せる能力を有するものであるから、此の  
特性を十分發揮し得る如く、地形や火力に其の觀念を固著せしめないやうに、教へてゐるので  
ある。

五、陣地線として、藤荷田山及權現山の線は、堅固な要線であるけれども、烏ヶ森の高地や西那  
須野を敵手に渡してしまつては、爾後の戰團指導は著しく困難となる不利がある。

初學者は多くは平凡な一線陣地、直線陣地を採用し勝ちであるけれども、一度烏ヶ森高地上に  
立つて、那須平地を大觀すれば、直ちにわかるやうに、此の廣漠たる平原に、一線を劃する許  
りて、果して幾何の効果があるか。試みに其の右翼を赤田山又は藤荷田山に止め、左翼を太田  
原附近に限定しようとしても、敵の包圍、迂回に對し如何にするか。或は又其右翼を箒川右岸  
高地に托し、左翼を那珂川河畔或は御亭山等に延伸するときは、左右に據るべき據點を持つて  
安心し得るやうであるが、蜿蜒實に二十數軒に互り守つて到る處薄弱なるを感ずるであらう。



そこで我々は作戦要務令第二部の大なる騎兵部隊の戦闘の部を反省する必要がある。即ち第二  
百六十九には、

陣地占領ノ要領ハ防禦ノ目的、敵情、擔任正面ノ大小、地形等ニ依リ大ナル差異アリ而シテ  
機動ノ餘地大ナル地形ニ在リテハ第一線部隊ヲシテ適當獨立性アル若干ノ據點ヲ占領セシメ  
其ノ兵力ノ節約ヲ圖リ爾餘ノ兵力ヲ後方ニ配置シ以テ機動及反撃ノ自由ヲ確保シ適時適所ニ  
敵ヲ破推スルヲ可トス

筆者は此の作戦要務令の原則を忠實に實行せんとするものである。

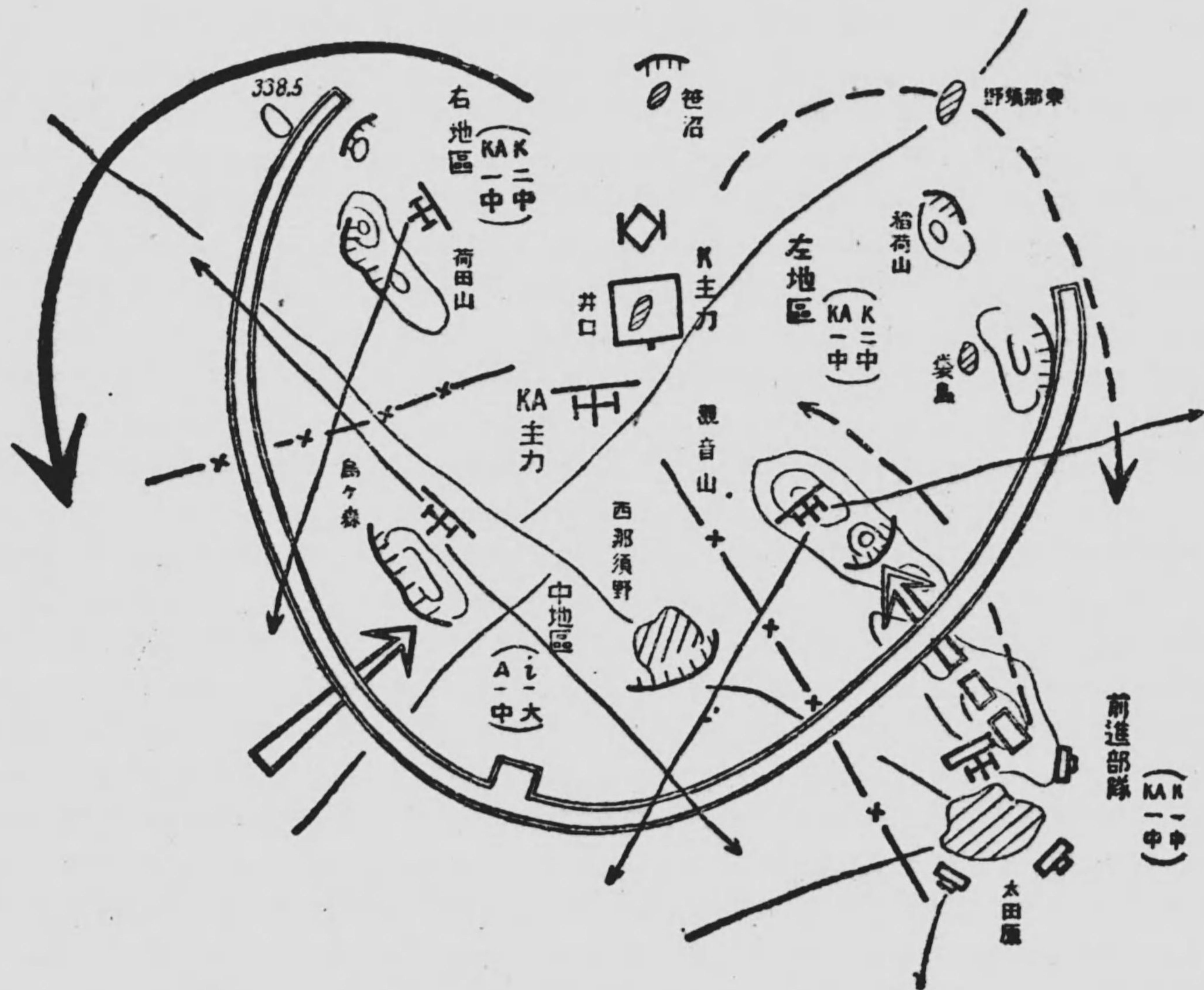
## 第二問題原案

### 判決

集團ハ一部ヲ以テ據點式ニ陣地ヲ占領セシメ主力ヲ以テ隨時機動シ敵ノ側背ヲ求メテ攻撃スルヲ  
要ス

### 處置ノ大要

次ノ要圖ノ如シ





## 第二問題原案の要旨説明

- 一、地形を利用して敵を不利な態勢に陥らしめて、騎兵の機動力を發揮して其の弱點に乗ずるを趣旨とす。
- 二、到る處包圍、迂回を許す廣漠地に於ける陣地占領は、何れの方角に對しても對應し得る如く、圓形に陣地を占領する必要があり、而も隨時所望の方面に攻勢を取り得る如く行動の自由を保有する爲には、相當の地域を抱擁するを要するから、據點式の陣地占領とする。
- 三、第一線の兵力を減じ、専ら陣地の要點を占領するに止め、成るべく多くの機動的豫備を控置する。
- 四、支援隊たる歩兵の用法は、陣地の骨幹に配置する爲、鳥ヶ森、西那須野の線を確保する如くする。
- 五、太田原北側高地方面は、地形錯雜して敵の陰蔽接近容易であるから、一部を前進部隊として配置し、地形上の弱點を兵力を以て補ふ要がある。

( 80 )

## 第三問題

騎兵集團ハ軍司令部ト如何ニシテ連絡ヲ確保セントスルヤ

## 第三問題原案

### 方針

無線連絡ヲ主トスル外視號通信ヲ併用シ且其ノ他有ユル傳達機關ヲ利用ス

### 要領

- 一、無線連絡確保ニ勉ム之ガ爲軍無線ノ外集團無線ヲ併セ使用ス
- 二、回光通信ニヨリ那須岳ヲ經由シテ白河及郡山ト連絡ス
- 三、快速傳達機關ヲ利用ス

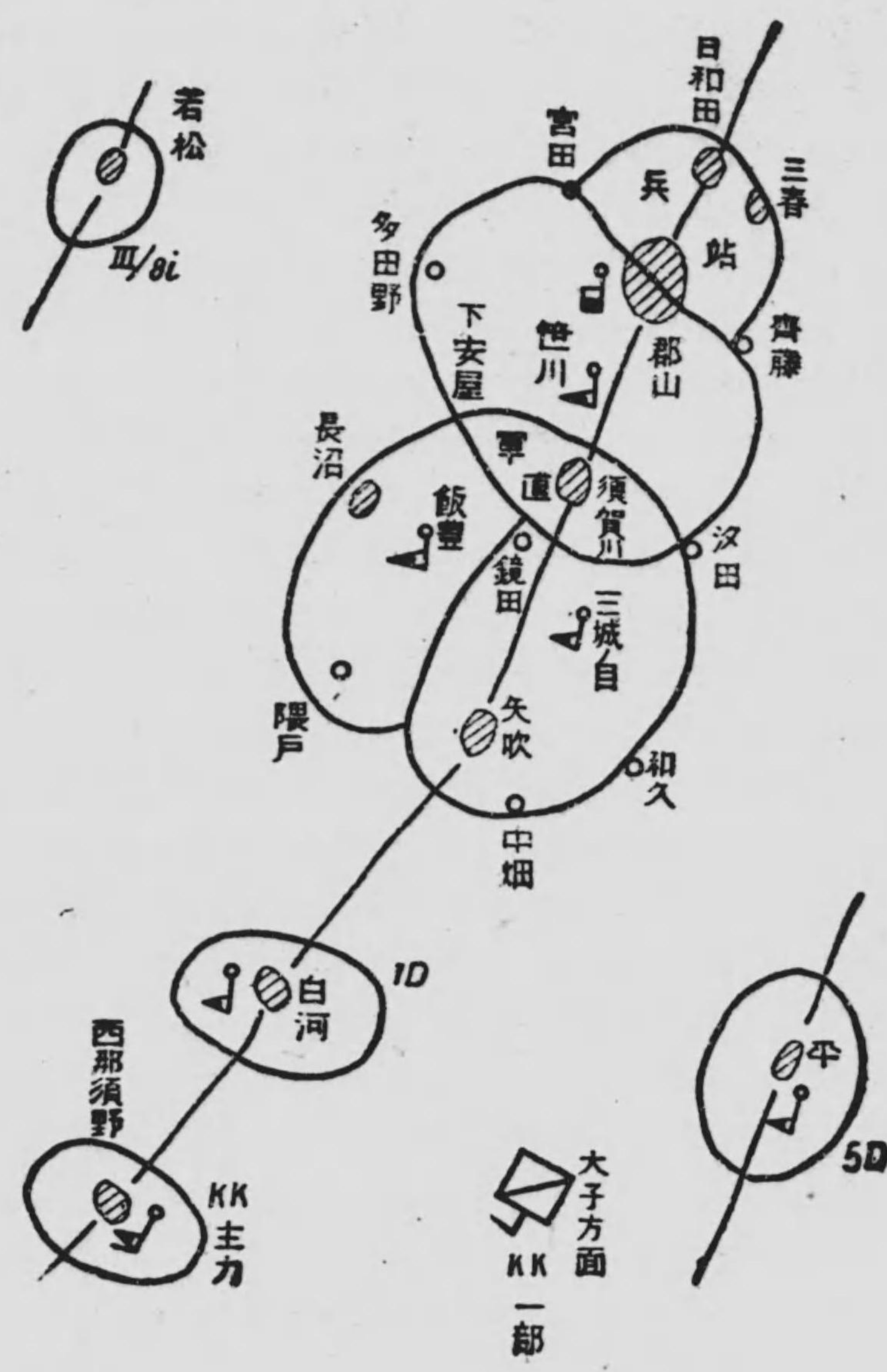
( 81 )

## 狀況 第二

軍ノ集中ハ敵ノ優勢ナル飛行團ノ爲屢、妨害セラレタルモ各部隊ノ適切ナル應急處置ニヨリ大ナル支障ナク概ネ豫定ノ如ク進捗シツアリ

軍集中地ノ豫定大要左ノ如シ





集中間ニ於ケル第一軍通信網要圖

### 第四問題の研究

一、集中間に於ける通信網は作戰發起に方り各部隊長間に完全なる意志の疏通を必要とし、特に軍の如き大兵團の組成は、各方面より轉配屬せらるゝ部隊多きを以て、此の期間に於て十分なる了解を圖ることが必要である。故に此の時期の通信網は爲し得る限り完備させる要がある。

二、併し他面に於て爾後の機動及會戰を考慮すると、集中間には爲し得る限り資材なり兵力なりを愛惜して爾後の推進力の弾力性を十分に保持して置かなければならない。

三、以上二項の矛盾せる條件を考慮して調和を保つことが必要であるが、本狀況下では幸に既設線が利用出来るから、之を最大限度に利用する著意を可とする。

四、各兵團間には是非電話連絡が必要である。之は直接責任者が相互に肉聲を以て疏通し得るか、集中間の連絡としては是非望ましいことである。而も之は回線數を節約する爲軍司令部通信所を基點として交換設備を爲すを有利とする。

又各兵團は後方との連絡が相當必要であるので、之が爲には電信回線を更に必要とする。

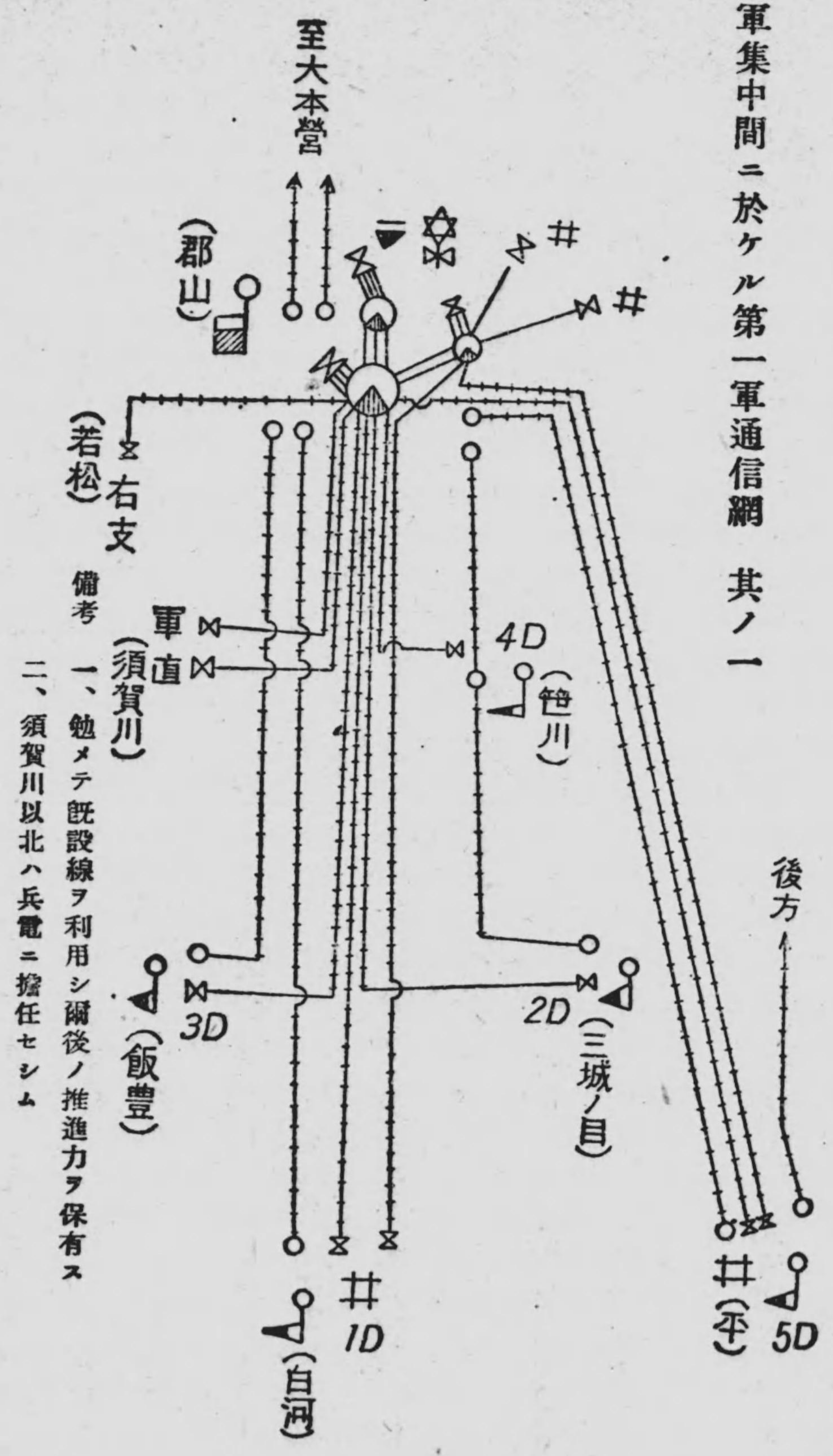
五、航空回線を一般回線又は兵站回線と共用としたものがあるが、航空部隊の敏活なる活動を拘束しない爲には勉めて別個の回線とすることが必要であり、特に1D及5D等集中初期に重要任務に服する兵團間には是非直通回線を必要とする。



六、兵站回線も爲し得る限り完備せしめて、軍の戦力推進に遺憾なき萬全の用意が必要である。

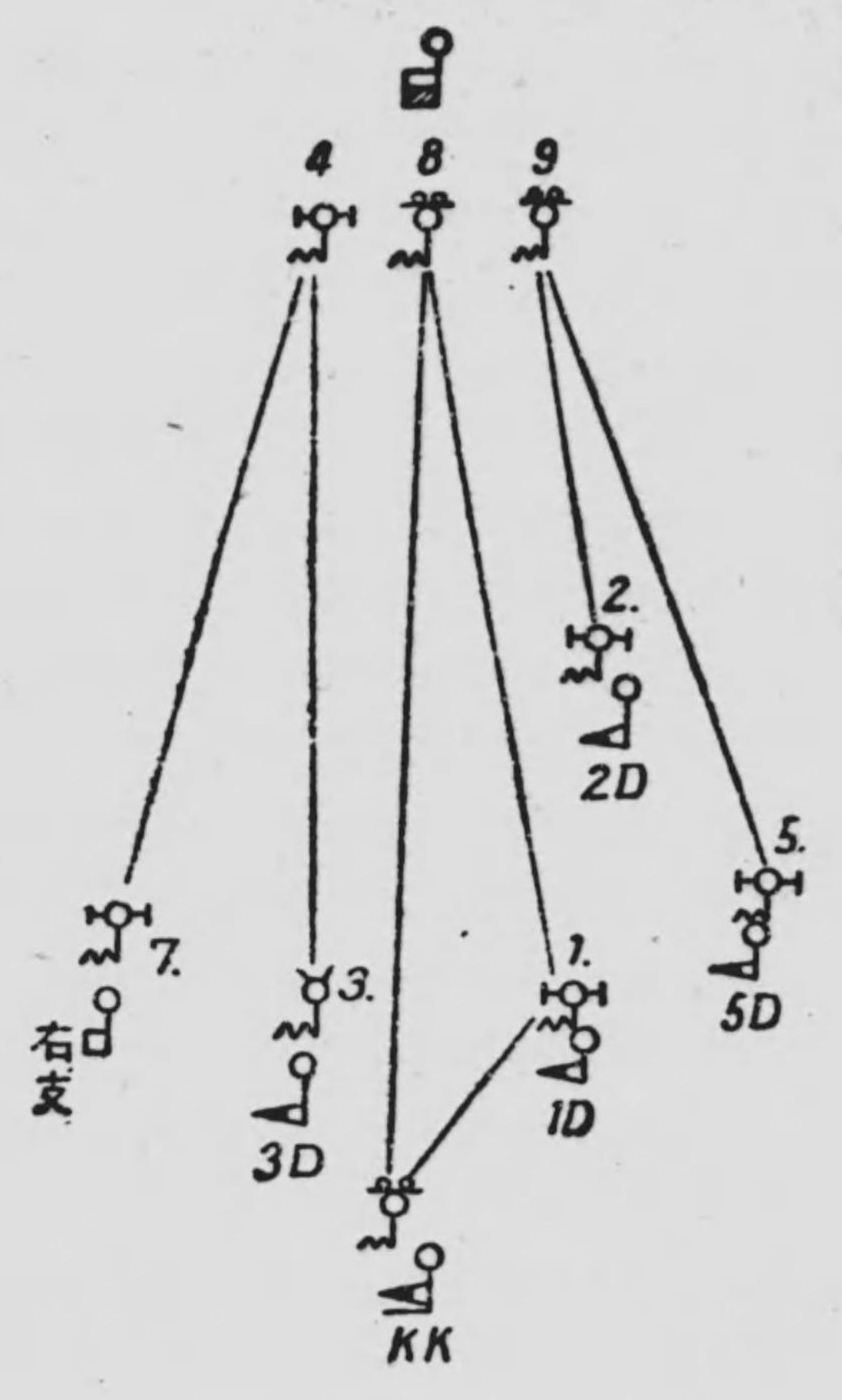
第四問題原案

軍集中間ニ於ケル第一軍通信網 其ノ一



備考 一、勉メテ既設線ヲ利用シ爾後ノ推進力ヲ保有ス  
二、須賀川以北ハ兵電ニ擔任セシム

軍集中間ニ於ケル第一軍通信網 其ノ二



備考  
一、無線通信ハ一般ニ之ヲ封止ス  
二、KKト軍司令部及1D間ノ連絡ハ緊急信ニ限り硬  
度ノ秘密通信ニヨリ急變的ニ實施ス之ガ爲KKト  
軍司令部間ニハ三號機甲ニヨル一系ヲ軍直轄ト  
シテ併用ス

狀況 第三

- 一、軍ノ集中ヲ掩護スベキ任務ヲ有スル第一師團ハ仙臺方向ヨリ急遽輸送セラレ三月十五日以來  
逐次白河附近ニ到着シ三月十八日夕概ネ其ノ集結ヲ完了ス
- 二、之ヨリ先師團長ハ三月十六日夕幕僚竝ニ砲工兵隊長ト共ニ白河ニ到着シ爾後師團任務達成ノ  
爲所要ノ偵察竝ニ準備ヲ實施中ナリシガ三月十八日夕迄ニ想定ニ基ク彼我ノ態勢及  
騎兵第一集團那珂川左岸ニ後退スルニ至ラバ之ヲ第一師團長ノ指揮ニ屬ス



ル旨ノ軍命令ヲ知り諸隊ヲ部署シテ直チニ所望ノ配備ニ就カシム  
三、師團ノ編組左ノ如シ

第一師團(KK配屬部隊欠)

配屬部隊

獨立山砲兵一大隊

野戰重砲兵一大隊

野戰高射砲一隊

獨立工兵一大隊

飛行一中隊(偵)

其ノ他若干(略ス)

## 第五問題

第一師團任務達成ノ爲陣地占領要圖

## 第五問題の研究

一、防禦方針として、決戦防禦の思想を有する案者の多かりしは、集中掩護陣地の本質に鑑み一考を要する。

二、陣地線に就いて諸官の案は各人各様であるが、今之を大別すれば左の數案となる。

- 1、黒磯對岸那珂川左岸に沿うて占領せるもの
- 2、黒田原北方地區の傾斜變換線に沿ひ占領せるもの
- 3、大深堀より柏沼を経て寄居、大久保に互る線を占領せるもの
- 4、黒川左岸臺上を占領せるもの
- 5、原中より南湖東西の高地線を占領せるもの
- 6、白河西側高地より白河東南側高地に互る線
- 7、白河北方高地より東南側高地に互る線

而して右各案の中で、第六、第七案は其の正面は概ね六、七軒に緊縮し、多くは左翼方面より攻勢に轉ずる計畫のやうである。



三、左に各案につき簡単に其の利害を研究する。

1、第一案者は那珂川の要線に據つて勉めて積極的に敵の前進を妨害せんとするもので、其の趣旨は必ずしも不可ではないが、該線は著しく敵方に近接してゐて、我が集中地から甚しく離隔するのみでなく、正面過廣となり、而も久慈川河谷方面に對し、更に有力なる兵力を支分する要がある。

2、第二案者の占領した黒田原附近の陣地線は、地形は著明な傾斜變換線をなしてゐて、遠く火力を以て敵を制し得る要線である。併し之も亦過早に敵に決戦を強要せられて、各個撃破を受くる虞が大である。

3、第三案者は概ね那須高原一帯に於ける制高の稜線を占領したもので、堅固な要線を成形してゐるやうではあるが、仔細に研究して見ると、敵の主攻を受くる虞のある粕沼方面に於ては、陣地の前方が比較的陰蔽してゐて弱點を成してゐる不利がある。

4、第四案たる黒川左岸臺上を占領したものは、地形は黒川の河谷によつて自から堅固な要線を成形してゐるのみならず、陣地の正面も亦適當であつて、克く集中地域を掩護し得る陣地と認めらる。

5、第五案者の陣地は、廣濶な射界を有して良好な陣地線をなしてゐるが、其の兩翼には限度がなく、那須嶽山腹から遠く東方石川町に亘つて四十軒に垂んとする陣地線で、僅か一師團の陣地としては適當でない。

6、第六、第七兩案は、何れも白河附近に於て獨立師團の攻勢防禦の爲の陣地としては成立し得る線ではあるけれども、矢吹から郡山に亘る廣大な地域の集中地を掩護する爲の陣地としては不適當である。

### 第五問題原案

#### 方針

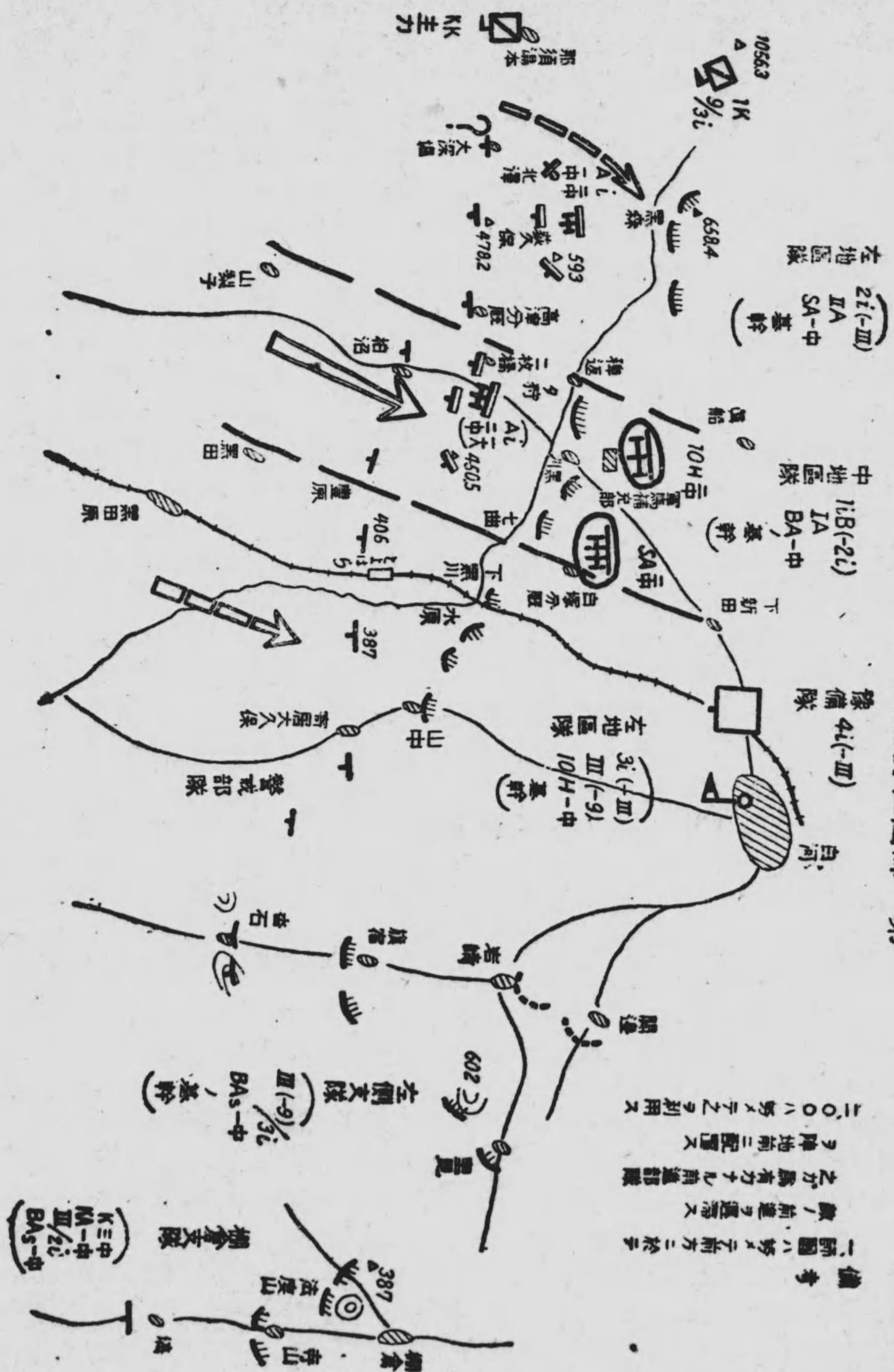
師團ハ軍ノ集中ヲ安全ナラシムルト共ニ爾後ノ作戰ノ爲有利ナル地點ハ勉メテ之ヲ確保ス之ガ爲要點ハ據點式ニ堅固ニ占領シ敵ノ攻勢ヲ拒止ス

#### 要領

要圖ノ如シ



第一師團任務達成爲陣地佔領要圖



第五問題原案に就ての説明

一、集中掩護に任ずる部隊としては、先づ集中の安全を圖り、且敵の搜索を妨害する外、爲し得れば搜索や爾後の作戦の爲緊要な地點は之を確保して置くことが必要である。  
 故に集中掩護陣地を占地せんとすれば、先づ軍主力の集中地と占領せんとする陣地との關係を大觀して、果して集中の安全を期し得らるゝや否やを検討することが必要である。  
 要するに掩護陣地は、集中地に對し概して傘を擴げて敵の妨害を阻止し得るやうな關係位置にあることを理想とする。

此の見地から見ると、諸官の案は多くは獨立師團の獨善的陣地占領の感があつて、先著兵團として、軍主力の爲責務を忠實に果してゐないものと極論されるものと思ふ。

二、以上の見地から、兵力と地形竝に彼我の關係位置から考へると、關山南方の錯雜した山地と那須嶽とに兩翼を托して兵力を節約し得る第三案若くは第四案を採用することが適當である。  
 而して第三案の柏沼東西の線を占領する案は、軍が將來那須平地に對し攻勢をとる場合に、支障となるべき要線であるから、是非確保して置きたい希望もあるが、何と云つても此の陣地は



敵軍主力の攻勢地區と豫想する柏沼附近の射界が短小で、持久には困難である。

之に反して、第四案たる黒川の線は、第三案より若干後退してゐるけれども、攻勢發揮の要線たる價値を有して、陣地も亦適當な射界を有してゐる。

故に原案は有力な前進部隊を以て、柏沼東西の線を占領して敵の前進を遲滞せしむると共に、主力を以て黒森附近、黒川附近、水原附近の三據點を堅固に占領して敵の攻勢を拒止することが必要である。

三、此の際那須嶽方面は、戰場を瞰制し得る要點であるから、彼我共に奪取を競ふこととなるであらう。之が爲有力な部隊を配置して、戰略態勢の優越を占めて置かねばならぬ。故に騎兵集團を該方面に後退せしむることが有利である。

諸官の案中には、之を東方錯雜した山地帯に投入したものが少くなかつたが、斯くては騎兵の集團した威力と機動力とを殺してしまふこととなつて適當でない。

四、陣地の左翼方面關山南方山地以東の地區は、道路網が自ら制限されてあるから、一部を以て獨立して、旗宿及棚倉附近にあつて敵を拒止させる要がある。

#### 狀 況 第四

一、敵ハ三月二十日早朝各方面一齊ニ行動ヲ開始セルモノノ如ク我が騎兵集團ハ西那須野附近ニ於テ二十日正午頃エリ戰車二、三十臺ヲ有スル優勢ナル敵騎兵團ノ攻撃ヲ受ケ屢、苦戰ニ陥リタルモ果敢ナル主力ノ機動攻勢ニ依リ敵ニ大ナル損害ヲ與ヘテ克ク之ヲ阻止ス

此ノ夜集團長ハ宇都宮附近ノ敵既ニ荒川河畔ニ達セル報ニ接シ夜暗ヲ利用シ兵力ヲ集結シテ密カニ那珂川河畔ニ後退ス敵ハ二十一日拂曉ト共ニ急遽追蹙ヲ開始ス集團ハ此ノ日黒磯及茅ノ澤附近ニ於ケル輕戰ノ後主力ヲ以テ那須嶽方面ニ轉進シ爾後第一師團長ノ指揮下ニ入り師團ノ右翼ヲ掩護ス

二、第一師團ハ三月十八日夜以來配備ニ就キ陣地ヲ構築中ナリシガ二十一日午後ニハ既ニ敵騎兵團ノ一部黒田原附近ニ現出スルアリ次デ二十二日夕ニハ敵ノ歩兵部隊モ亦近ク我が陣地前ニ出沒ス

二十三日拂曉敵ハ戰車數十輛及歩兵一、二大隊ヲ以テ各所ニ我が警戒部隊ヲ攻撃セルモ我が砲火ノ爲多大ノ損害ヲ受ケテ撃退セラレタリ



二十四日朝以來敵ハ更ニ兵力ヲ増加シテ我が前進部隊並ニ警戒部隊ニ對シ攻撃ヲ開始セリ敵ノ大部隊ハ那珂川左岸黒田原周邊ノ地區ニ充滿シアルモノノ如シ

三、先ニ騎兵集團ヨリ派遣セラレタル大子支隊(K三中、KA一中)ハ三月二十日午後大子町ニ於テ馬頭並ニ山方方向ヨリ前進セル優勢ナル敵歩、騎兵ト遭遇シ遂ニ壓迫セラレテ棚倉方向ニ後退シ二十四日朝辛ウジテ塙附近ヲ保持シアリ

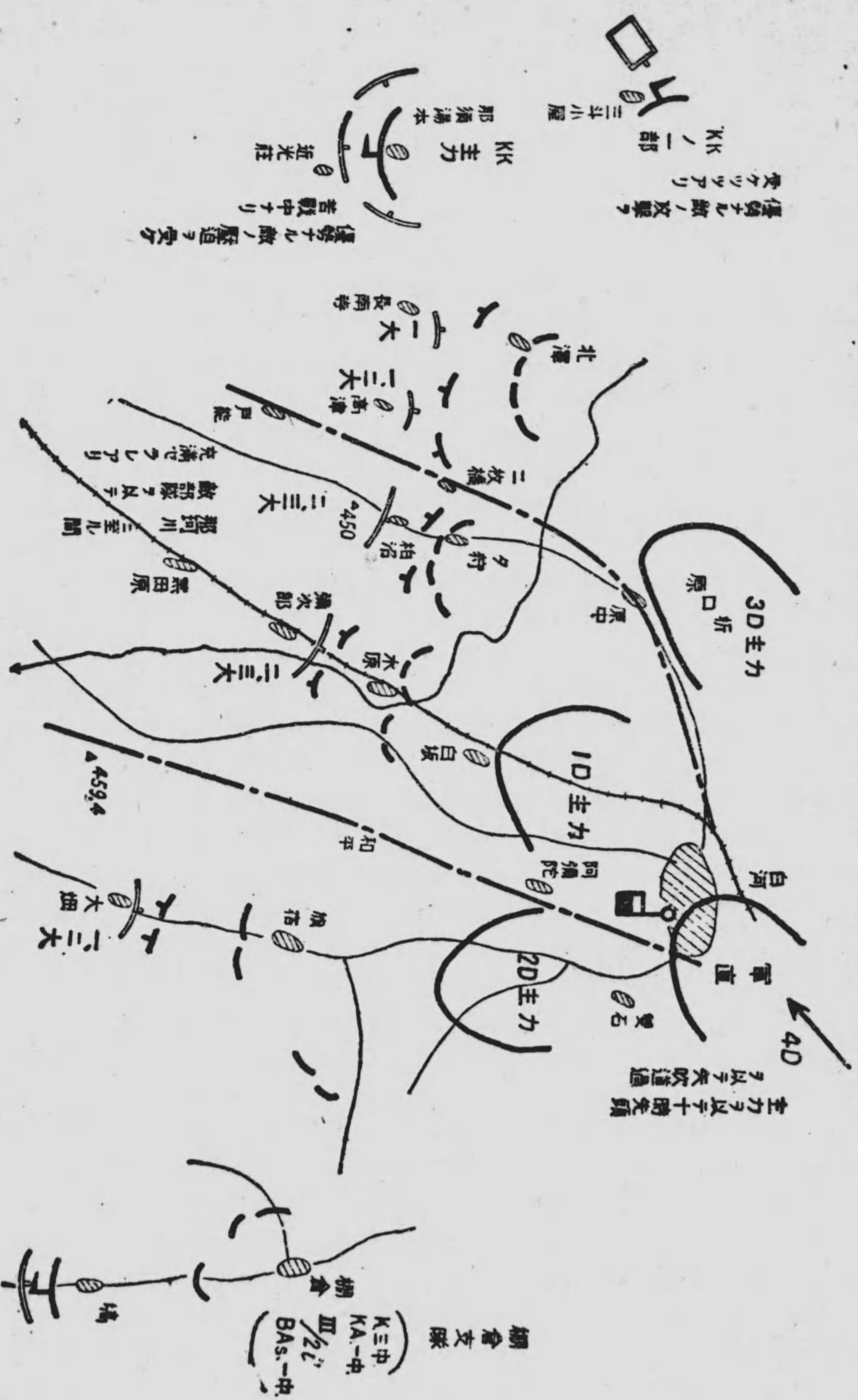
四、第五師團ハ二十一日行動ヲ開始シ水戸方向ニ南下セシガ二十三日午後以來久慈川河畔ニ於テ二、三師團ノ敵ト遭遇シ戦闘中ナリ

五、軍右側支隊ハ二十日早朝若松ヲ發シ會津西街道ヲ南下セルガ如キモ爾後ノ狀況ニ就テ何等ノ報告ニ接セズ

六、軍ノ集中ハ敵ノ飛行團並ニ匪賊等ノ爲屢、妨害ヲ被リタルモ關係各部隊ノ努力ニ依リ概ネ豫定ノ如ク進捗ス

軍司令官ハ三月二十二日夕以來白河ニ在リ既ニ確立セル會戰指導ノ方策ニ基キ集中地ニ到着セル各兵團ヲ逐次部署シ第二、第三師團ノ一部ヲ以テ集中掩護陣地ノ一部ヲ第一師團ト交代セシムルト共ニ軍主力ヲ概ネ白河東西ノ線ニ推進ス

三月二十四日正午頃迄之軍司令官得テ知ル狀況要圖





三月二十四日正午頃迄ニ軍司令官ノ知り得タル状況左ノ如シ

- 1、一般ノ状況要圖ノ如シ
- 2、各師團ハ一部ヲ以テ第一師團ト交代シテ集中掩護陣地ヲ占領シ主力ヲ白河東西ノ線ニ逐次集結ス
- 3、第一師團ハ新作戦地域以外ノ部隊ヲ該方面ノ擔任兵團ト交代シテ概ネ其ノ兵力ヲ集結シ得タリ
- 4、軍飛行隊ハ飛行場トシテ郡山、須賀川、白河等ヲ適宜使用シツツアリ

## 第六問題

第一軍司令官ハ爾後如何ニシテ戰鬪ヲ指導セントスルヤ

## 第六問題の研究

一、主決戦方面に就て

諸官の案を大別すれば概ね左の五案となる。

- 1、重點を左翼に保持して敵を西方鹽原山系に壓迫せんとするもの
  - 2、白河西南側地區から敵を西南方に壓倒せんとするもの
  - 3、重點を右翼に保持し北澤東側地區から南方に敵翼を撃破せんとするもの
  - 4、重點を北澤以西の地區に保持し敵の外翼を溢出包圍せんとするもの
  - 5、軍の重點を那須岳を含む地區から東南方に指向し敵を東方山系に壓迫せんとするもの
- 而して第一案は、白紙的に考へると、敵を退路外に遮斷して徹底的に敵を殲滅し得るやうに思はれるが、軍の主力を八溝山北方山系に投入し、之を濾過して伊王野南方地區に進出させるやうなことは、殆ど不可能と謂ふべきである。

第二案は、攻撃開始は迅速であるけれども、敵の衝力に對する正面力攻であつて、奏功は却つて遅く、策なき案と謂ふべきものである。

第三案は、敵翼を包圍せんとするものであつて、其の趣旨には固より同意であるが、兵力は我よりも優勢であらうと豫想し得る敵に對しては、其の包圍の構想は、尙未だ不徹底であつて、敵をして容易に對包圍策の彌縫處置を講ぜしむる餘裕を與へる虞がある。

第四案は、敵翼を更に溢出包圍せんとするものであつて、敵に對應の處置なからしめて、一撃



して既に敵に震撼的打撃を與へ得るものであつて、地形も亦比較的平易で、實行も可能である。  
第五案は、那須岳に對する關心を没却したものであつて、用兵の可能性なき案である。

## 二、展開線に就て

諸官の案は、大別して左の三案となる。

- 1、白河東西の線に展開せんとするもの
- 2、黒川左岸に展開せんとするもの
- 3、黒川右岸高地線に展開せんとするもの

前二案は、何れも展開は容易であり、且迅速確實なる利益はあるが、黒川右岸高地帯特に北澤附近の戰略要點を敵手に委する案であつて、消極的である。

現在の狀況に於ては、此等の戰略要線は確實に我が手中に在るから、宜しく之を利用して益、其の効果を増大發揮するやうに、黒川右岸高地線に展開するを適當とする。

## 三、戰略展開の時機に就て

諸官の大部が本夜暗を利用して戰略展開を完了し明拂曉と共に攻撃を開始せんとする案であつたのは同意する所である。

併し少數の案者が、本日午後から直ちに展開を開始せんとしたもの或は明朝以後實施せんとしたものもあつたが、此等は企圖の秘匿上適當ではない。

## 四、第四師團の用法に就て

第四師團を軍の右翼方面又は中央方面に使用して、而も之を軍の主決戦正面とした案者が比較的多かつたのは不同意である。

蓋し第四師團は本夕以後でなければ白河附近に進出することは出来ない狀況であるから、之を主決戦方面に使用せんとすれば、其の全部の展開完了は明日晝間に至ることを顧慮しなければならぬ。

## 第六問題原案

### 方針

軍ハ本夜暗ヲ利用シテ西方ニ轉移シ明拂曉重點ヲ最右翼ニ保持シテ敵ヲ東南方ニ壓迫シ那珂川河畔ニ之ヲ捕捉撃滅ス

### 要領



- 一、本二十四日晝間白河東西ノ線ニ假工事ヲ行ヒ守勢ヲ裝フ
- 二、第二師團ノ一部ヲ以テ關山以東ノ地區ニ於テ本日晝間活潑ナル陽攻ヲ行フ
- 三、各師團ハ日没ト共ニ行動ヲ起シテ新作戦地域ニ移リ要圖ノ如ク展開シ明拂曉ヨリ一齊ニ攻撃前進ヲ開始ス
- 四、最高統帥府ニ飛行集團ノ協力ヲ具申ス
- 五、軍司令官ハ明拂曉ト共ニ芝原分厩ノ戦闘司令所ニ到ル
- 六、軍隊區分左ノ如シ

第一師團

- ( ) KK支援隊 欠
- A一中
- BAs一中
- SA一大
- 2AA/1D
- Ps一中
- FM一中主力
- 〇〇一部
- 属 ( )

第二師團

- ( ) 棚倉支隊
- 8i
- 欠
- 〇〇一部
- 属 ( )

第三師團

- ( ) KK支援隊
- TK二大
- As二中
- BAs主力
- SAB(一大欠)
- 1.2AA/3D
- Ps一大
- FM一中
- 〇〇主力
- 属 ( )

第四師團

- ( ) SiB
- /8A
- 欠
- 〇〇一部
- 属 ( )

軍豫備

- ( ) 8i 及 4D
- ノ 残部 ( )

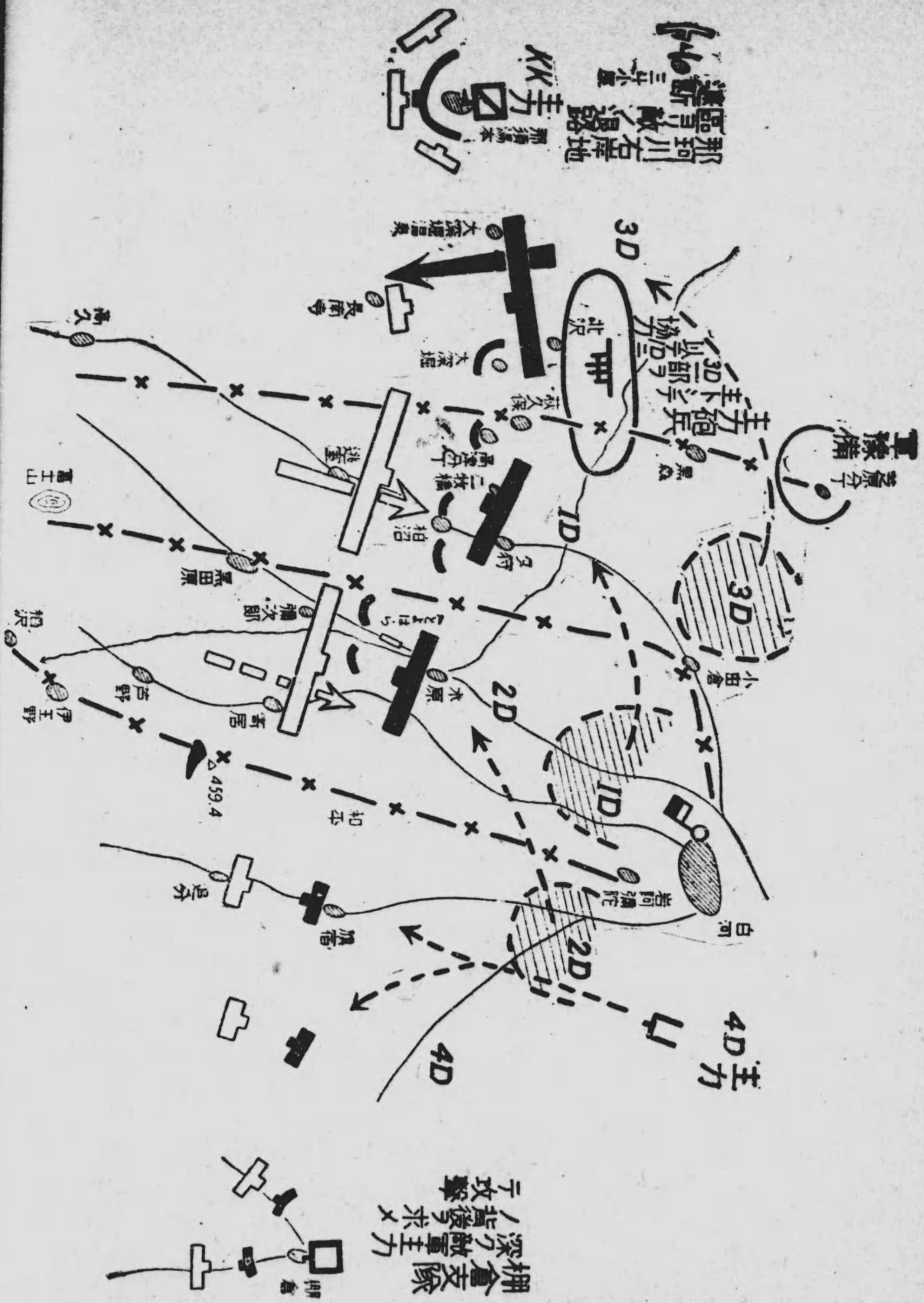
騎兵集團主力

- ( ) 支援隊欠

軍砲兵

- ( ) 残餘ノ軍直砲兵





第一軍司令官戰團持導要圖

### 第六問題原案説明の要旨

一、會戰指導の要訣は、我は常に主動の地位に立ち敵をして常に不利なる状態に立たしめ之に決戦を強要するやうに、大いに機動力を發揮し、又使用し得る限り多くの兵力を使用して所望の時機と所望の方面とに於て優勢を保持し、尙極力敵の意表に出で益、主動の地位を強調發揮して各兵團の戦力を更に振ひ立たせ、至短期日の間に震撼的戦果を占むることが必要である。

又第一會戰は爾後に於ける戦争指導上重大な關係にあることは、日露戦争に於て第一軍の鴨綠江會戰が國際的に我が立場を有利にしたのみならず爾後の作戰上に於ても極めて有利に作用したことは、日露戦役を通じて顯著な事實である。故に第一會戰には是非必勝を期するは固より其戦果も徹底的に收めて敵國や敵軍の心膽を奪つて戦争の全局を支配するやうに努める意氣が必要である

即ち本狀況に於ても軍が敵の積極果敢な攻勢前の狀況を知つてゐながら、而も隱忍して滿を持して放たず、其の大部の集中完結を待つた理由は、外でもない、有利な戰場に於て最大の威力を發揮して偉大なる効果を收めて、敵に殲滅的打撃を與へんとする企圖に出たものである。故



に一度動いたなら、疾風迅雷敵の心膽を奪つて戦争指導の全局を有利に支配する如き徹底した  
會戰指導が必要である。

二、右の趣旨に基いて、主決戦方面を戰略態勢の優越を發揮し得る如く那須岳中腹方面に求めて  
爲し得る限り大規模な包圍を敢行することが肝要である。特に正面戰鬪に於ては極めて靱強で  
あるが、機動力に於ては特種な部隊を除いて一般に鈍重な敵軍に對しては殊に然りである。

三、以上の理由によつて、主決戦方面は、北澤以西に之を保持して第三師團正面から徹底せる溢  
出包圍を敢行し、戰場の兵力を増大する爲に第二師團も亦關山北西の地區に招致すると共に、  
逐次到着する第四師團を以て關山以東の地區から敵の右側背に楔入せしめて、敵を那珂川以北  
の地區で兩翼から包圍する如く企圖したものである。

四、企圖の秘匿には常に細心注意すべきであるが、本狀況に於ては、一般地形の觀察から、我が  
重點を右方に保持することは敵も亦一應考へられる所であるから、秘匿の問題は一層切要なも  
のがある。従つて本日晝間は白河附近で守勢に立つやうな恰好を示して、攻勢開始の時機遅延  
と装ふと共に、關山以東の地區に敵の關心を喚起する爲に陽動を行ふことは、意外の効果を奏  
することがあるから、輕視してはならぬ重大な著眼の一つである。

## 狀 況 第五

一、軍通信隊長ハ集中初期郡山ニ在リテ集中中間ノ連絡確保ニ努メアリシガ軍司令部ノ躍進ニ伴ヒ  
白河ニ到リ爾後該地ヲ起點トシテ左ノ如キ通信網ノ構成ヲ部署スル所アリ

二、軍通信隊長ハ三月二十四日十三時軍攻勢ニ關スル軍司令官ノ企圖ヲ知り之ニ伴フ通信網ノ構  
成ヲ部署スル所アリ

三、第一軍通信隊ノ編組左ノ如シ

長 大佐某

第一軍通信隊本部

獨立有線第一乃至第五中隊

(車輛)

獨立有線第六、第七中隊

(自動車)

獨立無線第一、第二、第四、第五、第七小隊

(車輛)

獨立無線第六、第八、第九小隊

(自動車)

獨立無線第三小隊

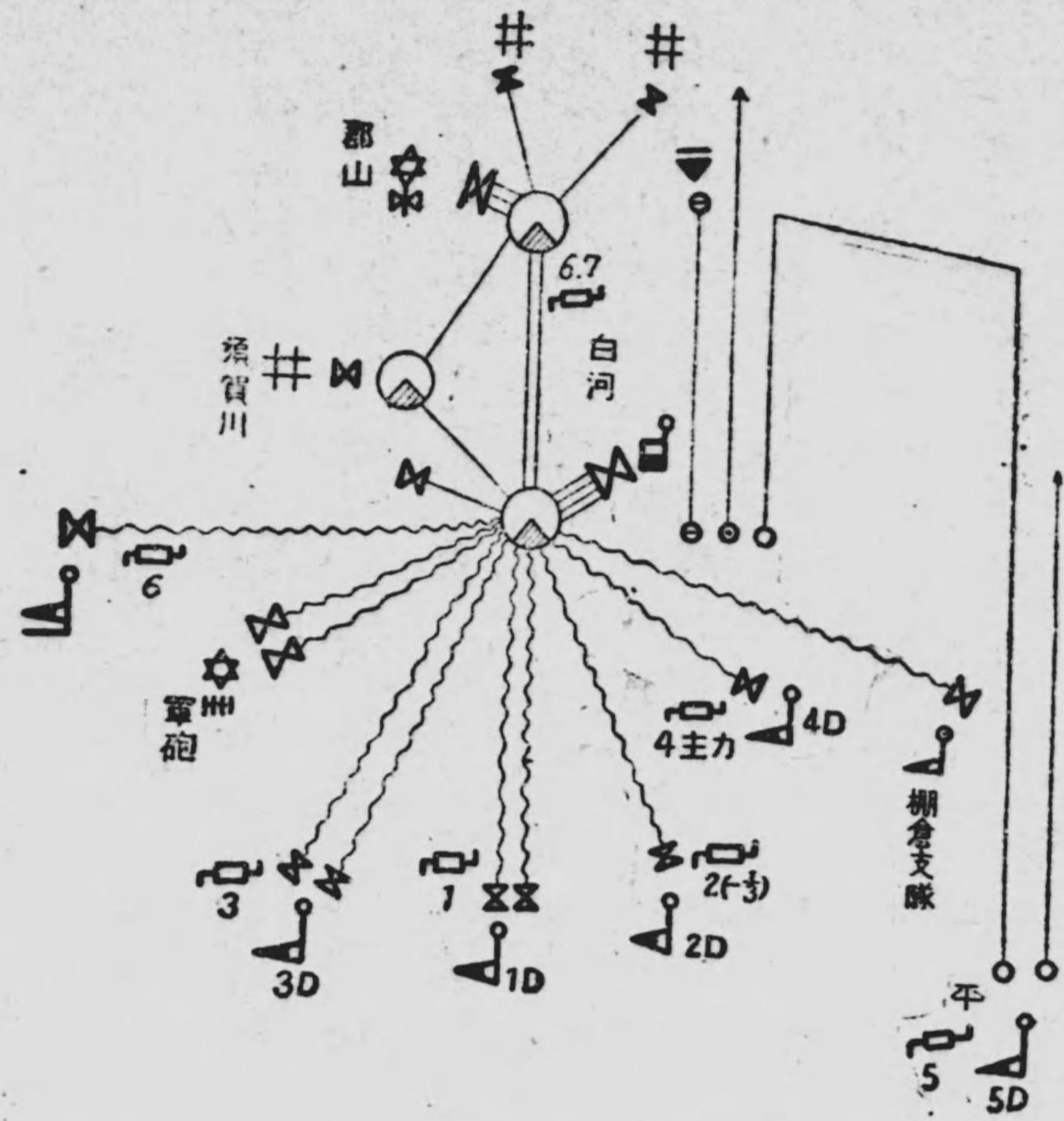
(騎馬)



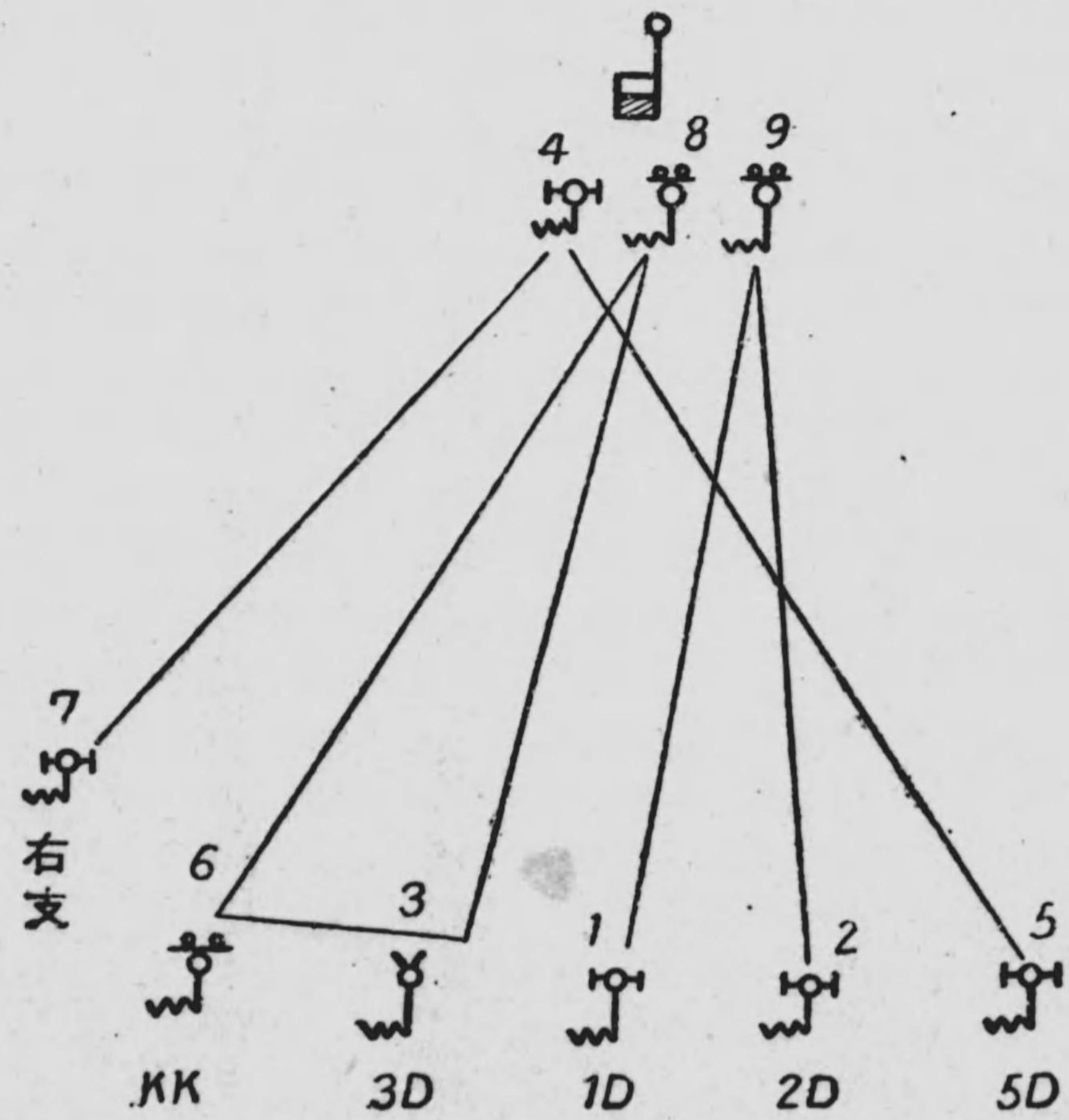
其ノ他略ス

三月二十日夕以後ニ於ケル第一軍通信網要圖

其ノ一



其ノ二



### 第七問題

三月二十四日正午ニ於ケル第一軍戦闘指導ニ伴フ軍通信隊命令

### 第七問題原案

一軍通作命第〇〇號

第一軍通信隊命令

三月二十四日十四時  
白河隊本部

一、敵情別紙情報圖ノ如シ(略ス)

軍ハ本夜暗ヲ利用シ西方ニ移轉シ明拂曉重點ヲ最右翼ニ保持シテ敵ヲ東南方ニ壓迫シ那珂川河畔ニ於テ之ヲ捕捉撃滅ス

軍戦闘司令所ハ明二十五日五時迄ニ芝原分隊ニ開設セラルル豫定

二、軍通信隊ハ別紙第一及第二ニ基キ通信網ヲ構成シ其ノ通信連絡ニ任セントス

三、第一乃第七中隊ハ依然前任務ヲ續行スルト共ニ別紙第一ニ基キ新回線ヲ構成スベシ

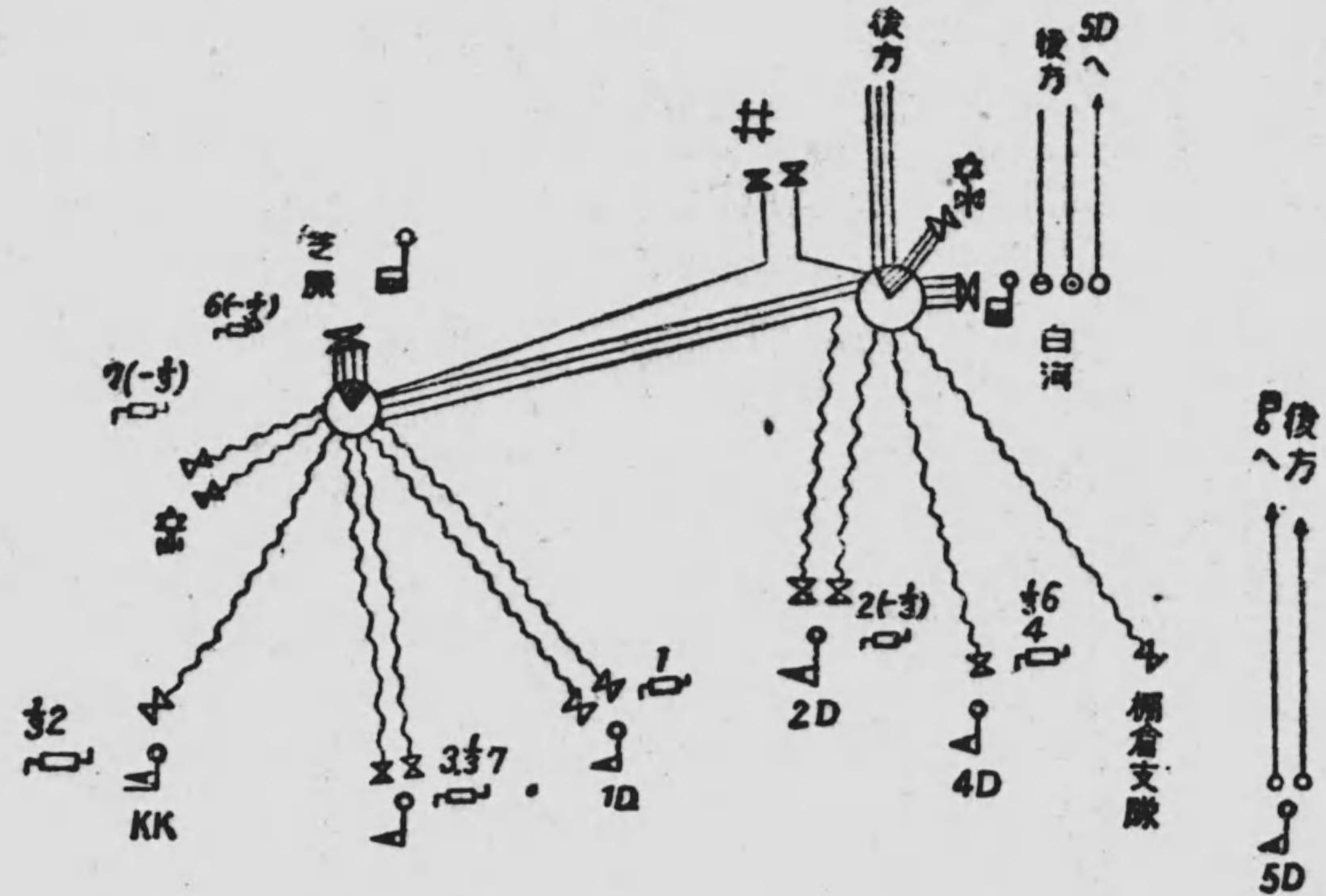
四、第六、第七中隊ハ作業完成後夫々一小隊ヲ第三、第四中隊ニ配屬ヲ準備シアルベシ其ノ時期







第一軍通信隊有線通信網  
(於三月二十五日五時)



狀況第六

一、三月二十四日日没ト共ニ各兵團ハ軍命令ニ基キ逐次機動ヲ開始シ肅々トシテ聲ヲ石ミ新作戦地境ニ入ル

斯クテ諸隊ハ一部敵ノ潜入斥候ノ妨害ト夜暗ノ錯誤トニヨリ若干ノ混乱ヲ生ジタルモ各部隊ノ努力ニヨリ克ク機宜ヲ制シ概ネ拂曉迄ニ豫定ノ線ニ進出シ攻撃準備ヲ完了ス

二、明クレバ三月二十五日曉暗漸ク薄ラグモ渺茫タル那須原野ハ未ダ曉霧ノ中ニ模糊トシテ靜カニ眠リ獨リ火ヲ吐ク那須岳ノ紫ニ紅ニ而シテ金色ニ輝キテ朝暾天ニ映ユルトキ突如轟々タル軍砲兵ノ集中射撃ト共ニ全

線ノ銃砲聲一齊ニ活動ヲ開始シ諸隊ハ勇躍攻撃前進ヲ開始ス

三、軍ノ主決戦方面タル第三師團ハ全ク敵ノ意表ニ出デ其ノ外翼ニ溢出シテ決河ノ勢ヲ以テ殺到ス敵ハ各方面ヨリ兵力ヲ抽出シテ之ヲ彌縫シ或ハ大規模ニ〇〇ヲ使用スル等防戦大イニ努メタルヲ以テ午後以後攻撃ノ進捗漸次困難トナル之ニ反シ我が第二師團正面ハ敵ノ攻撃頗ル急ニシテ苦戦ヲ極メ午後ニ及ビ遂ニ黒川右岸高地線ニ戦線ヲ後退スルノ餘儀ナキニ至レリ

此ノ日飛行集團ヨリ一部ノ協力ヲ受ケ黒田原附近ニ在リシ敵ノ密集部隊竝ニ敵砲兵團等ノ如キハ多大ノ損害ヲ蒙リタルモノノ如シ

四、三月二十五日十六時頃軍司令官ノ知り得タル狀況概ネ左ノ如シ

1、彼我ノ態勢次ノ要圖ノ如シ

2、騎兵集團

第三師團ノ戦鬪進捗ニ伴ヒ中田島附近ニ進出セルモ優勢ナル敵ノ爲拒止セラレ那珂川右岸ニ進出スルヲ得ズ

3、第三師團

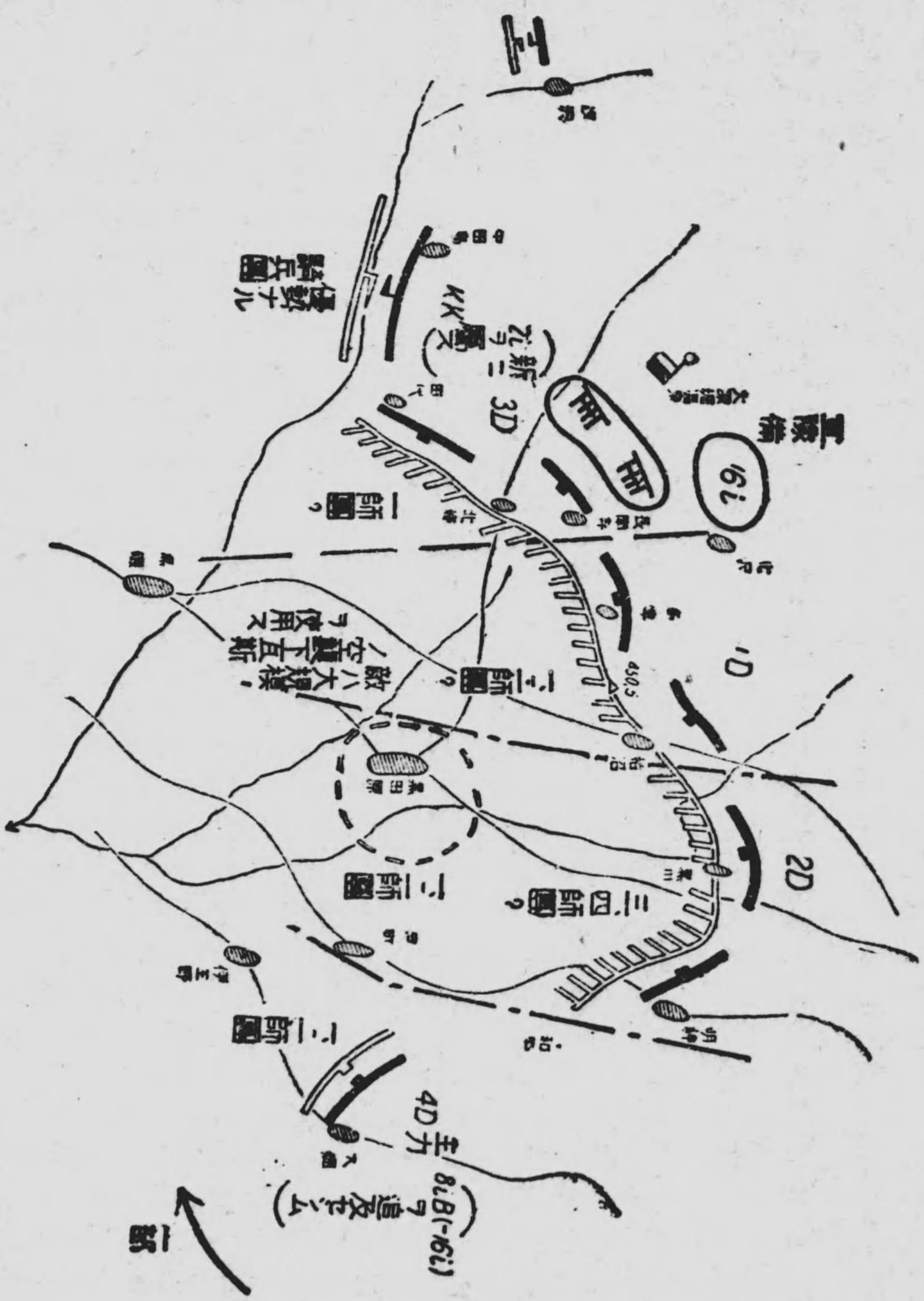
戦鬪有利ニ進展シ田代附近ニ進出センモ午後以後逐次進捗容易ナラズ



- 4、第一師團  
戰場一進一退シテ動モスレバ固著セントス
- 5、第二師團  
敵ノ重壓ヲ受ケ辛ウジテ黒川左岸高地ヲ保持シアリ
- 6、第四師團  
主力ヲ以テ大畑附近ニ進出セルモ爾後ノ進捗容易ナラズ遠ク南方ニ迂回セル一部ハ稍、有利ニ進展セルモ地形狹隘ニシテ爾後ノ奏功迅速ナラズ
- 7、棚倉方面  
敵ハ優勢ニシテ支隊ハ棚倉北側ノ高地線ニ後退スルノ止ムヲ得ザルニ至ル
- 8、久慈川方面ノ状況及左側支隊方面ノ状況ハ依然不明
- 9、本朝來第一飛行團(偵一大、戰二大、輕爆二大、重爆四大)軍ニ協力シテ戰場爆撃ニ努ム
- 10、高崎及久喜附近ニ新ニ敵部隊到着セシガ如キモ兵力明カナラズ

### 第八問題

軍ハ爾後如何ニ戰鬪ヲ指導セントスルヤ



圖要勢態ノ我彼ルケ於ニ頃時六十月五十二月三



## 第八問題の研究

一、諸君の案は追撃敢行案と戦場殲滅案との二案に分れてゐる。

追撃案の理由とする所は、敵は包圍せられて極めて不利な態勢にあるから、必ず近く戦闘を断念して退却するであらう、故に今から追撃に移らなければ敵を逸する虞があるとすゝるものである。

戦場殲滅案の理由とする所は、態勢は既に我に有利であつて、勝敗の決は既に定まつてしまつた、故に今一押しすれば、敵を殲滅することが出来るとするものである。

併しながら、諸官は共に敵情を甚だしく樂觀し、勝敗既に決せりと爲し、或は敵は必ず戦闘を断念すべしと盲断してゐるが、之は第二、第一師團正面に於て突破される虞のあることに目を掩はんとしてゐるものではあるまいか。

即ち我が第三、第四師團方面が、敵の彌縫手段によつて戦況が意の如く進展しない間に、白河方面が遂に突破せられたなら、我が後方は全く遮断せられて軍の統帥組織を破壊せられる危険の大なることを一應は眞剣に考慮して見る必要がある。

斯くの如き状況の現出を豫期しながら、而も尙断乎として攻撃を續行するとか或は追撃を断行するとかを論ずるのでなければ、全く價値のない空論である。

二、軍豫備を第三師團方面に配属した案は、其の趣旨に同意であるが、之を第二師團方面に配属して敵の突破を彌縫しようとした案者のあつたことは遺憾である。己の肉を斬らしめて敵の骨を碎く意氣が無くてはならない、「守れば足らず攻むるに餘る」眞理を吟味する必要がある。

## 第八問題原案

### 方針

軍ハ依然攻撃ヲ續行シテ戦場殲滅ニ努ムルト共ニ宇都宮ニ向フ追撃ヲ準備ス

### 指導ノ大要

- 一、軍飛行隊ハ依然前任務ヲ續行スル外特ニ第四師團ノ推進ニ協力ス
- 二、第三師團ハ依然當面ノ敵ヲ攻撃シテ戦場包圍ヲ完成スルト共ニ有力ナル一部ヲ以テ速カニ敵ノ左翼ヲ突破シ敵ニ先ダツテ矢板附近ノ要地ヲ奪取シ軍ノ追撃ヲ有利ナラシム
- 三、第一師團ハ依然攻撃ヲ續行ス



- 四、第二師團ハ極力攻撃ヲ續行ス
- 五、第四師團ハ速カニ第二師團正面ノ敵ノ右側背ヲ擊摧スル如ク攻撃スルト共ニ特ニ有力ナル一部ヲ以テ溢出シテ敵ニ先ダツテ馬頭附近ヲ奪取シ軍ノ追撃ヲ有利ナラシム
- 六、騎兵集團ハ速カニ敵ノ最左翼方面ヨリ溢出シテ敵ノ退路ヲ遮斷ス
- 七、軍砲兵ハ依然現任務ヲ續行スルト共ニ爲シ得レバ第一、第二師團正面ノ敵ノ退路ヲ遮斷ス
- 八、兵站ニ對シ所要ノ追撃準備ヲ爲サシム

### 第八問題原案の要旨

- 一、攻撃續行と追撃轉移との本質的差異  
攻撃續行は、軍司令官自ら統帥の輻を引き締めて戰鬪を主宰しながら、敵を戰場に捕捉して殲滅に努力するものである。
- 追撃とは、軍司令官が一時統帥の輻を緩めて、各兵團に獨斷の餘地を與へ、放膽なる作戰を許容するものである。

故に攻撃續行か追撃敢行かは、其の統帥思想の根柢に重大なる本質上の差異があるものである。

- 二、本狀況に於ては、第一、第二師團正面に於て稍、樂觀を許さないものがあり、第三師團正面は初期有利に進展して態勢の優越を占めることが出來たけれども、敵の彌縫策によつて爾後の攻撃は意の如く進捗しない状態にある。  
併しながら、戰勢は、混沌として勝敗の決は急に逆睹することが出來ないもので、戰勝の曙光は絶えず明滅して彼我の間に動搖して居るのは、戰場の實相である。  
故に今急に樂觀すべきではないが、さうかと云つて又何等悲觀すべきものでも勿論ない。本狀況に於ては、軍司令官は一意戰勝を確信しつゝ、戰場殲滅に努力すべきであつて、未だ戰場殲滅の希望を斷念して效を追撃に譲らなければならぬ何等の理由も認められないであらう。
- 三、併し戰勝の効果を完全に收むる爲には、一に猛然果敢な追撃が緊要である。而も追撃發起の時機は、動もすると之を逸して遂に敵を逃してしまふものであることは、戰史の立證する所である。故に高級指揮官は、勝利の曙光を認むるに至れば、機を失せず各兵團をして追撃の爲有利な態勢に移らしめることが必要であり、又遅くも此の時迄には追撃に關する所要の準備を之に與へることが肝要である。

是に於て追撃準備も亦重要な問題となる。而して此の際、如何なる程度の準備を爲ることが必



要であるか問題であつて、今過早に立ち入つた追撃準備を命ずれば、各兵團は攻撃續行の努力に於て缺陷を生ずることがある。故に原案に於ては外翼兵團に對してのみ將來追撃の爲の戰略要點を敵に先だつて奪取することを命じたのである。又後方機關に關しては、準備に多くの時間を要するから、之に機を失せず所要の準備を命ずる必要があるが、其の他の兵團には一意前任務を續行して戰場殲滅に邁進すべきを要求したのである。

## 狀 況 第七

- 一、軍ハ敵ヲ那珂川以北ノ地區ニ於テ捕捉スル爲極力攻撃ヲ續行ス  
軍司令官ハ大深堀温泉附近ノ臺上ニ在リテ諸隊ヲ督勵シテ戰場ヲ凝視ス  
第一師團正面ニ於テハ戰線依然固著シアリ第三師團方面ノ攻撃進捗亦顯著ナラズ十四時頃敵ノ大空軍ノ來襲ト大規模ノ瓦斯使用トニヨリ一時戰場ハ壓倒セラレタルガ如ク敵ノ獨壇場裏ニ委シ友軍ノ安否ヲ疑ハシムルモノアリ殊ニ白河方面ニ當リテハ砲聲次第ニ北方ニ移行スルヲ聞キ第二師團ハ撃破セラレタルニアラザルヤノ感ヲ懷カシメ軍司令部内期セズシテ憂色漂フ
- 二、次イデ十五時稍、過ギ敵空軍ノ遙カ南方ニ機影ヲ没スルヤ我が飛行團及軍飛行隊飛來シ敵ニ

代ツテ俄然空ヲ壓シテ敵ヲ爆撃シ全軍砲兵及〇〇隊亦一齊ニ活動ヲ開始シテ敵ヲ壓倒ス  
此ノ時遙カ東方伊王野東方高地ヲ南方ニ前進中ノ友軍部隊ヲ見ル  
軍司令官ハ獨リ莞爾トシテ「我既ニ勝テリ」ト密カニ私語シ且首肯ス  
此ノ頃ヨリ第三師團正面俄カニ攻撃進展シ筒地山、梨子ノ線ニ進出シ第一師團ノ正面亦急ニ戶能、小島ノ線ニ達ス  
軍司令官ハ作戰地境ヲ變換シ各兵團ノ方向ヲ黒田原南方地區ニ絞リツツ一舉戰場殲滅ニ邁進ス  
此ノ頃漸ク日没トナリ暮色蒼然トシテ戰場ヲ掩フ

- 三、軍ハ夜ニ入ルモ極力攻撃ヲ續行セシガ敵ノ抵抗頑強ニシテ更ニ進捗セズ第三師團方面殊ニ敵ノ執拗ナル反撃ヲ蒙ルコト數次ニ及ブ
- 四、三月二十五日二十時得タル騎兵集團ノ潛入部隊ノ報告ニ依レバ黒磯、西那須野、太田原附近ニハ陸續トシテ後退中ノ敵部隊アリ特ニ砲兵部隊ハ蒼皇トシテ佐久山方向ニ急進スルモノアリシト又飛行隊ノ報告ニヨレバ高崎及久喜方向ヨリ敵ノ大縱隊本早期北進ヲ開始セルモノノ如キヲ知ル

是ニ於テ軍司令官ハ一部ヲ以テ當面ノ殘敵掃蕩ニ努力セシムルト共ニ主力ヲ以テ敵ヲ宇都宮附



近ニ追撃スルニ決シ大要左ノ如キ部署ヲ爲ス

- 1、第三師團ハ一部ヲ以テ依然當面ノ敵ヲ攻撃セシムルト共ニ主力ヲ以テ敵ノ左翼ヲ突破溢  
出シ西那須野以西ノ地區ヨリ矢板南方高地線ニ進出シ退却シ來ル敵ヲ索メテ撃摧ス
- 2、第一師團ハ速カニ當面ノ敵ヲ撃摧シテ大田原方向ヨリ敵ヲ喜連川附近ニ追撃ス
- 3、第二師團ハ極力當面ノ敵ヲ撃摧黒田原南方地區ニ兵力ヲ集結シ先ヅ黒磯ニ到ラシム
- 4、第四師團ハ一部ヲ以テ殘敵掃蕩ニ努ムルト共ニ主力ヲ以テ速カニ敵翼ヲ溢出シ黒羽田方  
向ヨリ烏山西方地區ニ進出シテ退却シ來ル敵ヲ索メテ撃摧ス  
棚倉支隊ヲ其ノ指揮ニ屬ス
- 5、各兵團ノ作戰地境ヲ左ノ如ク變更延伸ス  
3D 1D 間 黒磯、權現山、豊田、越畑各東端、氏家西端ヲ連ヌル線  
1D 2D 間 富士山ヨリ那珂川ノ線ニ沿ヒ延伸ス  
2D 4D 間 寒井西端、餘瀨、法師峠、小梨、熱田各東端ヲ連ヌル線
- 6、騎兵集團ハ速カニ敵翼ヲ溢出シテ鬼怒川河畔ニ進出シ敵ノ退路ヲ遮斷ス
- 7、軍直轄部隊ハ概ネ第三師團ノ作戰地域ヲ第三師團ニ續行ス
- 8、軍司令官ハ暫ク現在地ニアリ、追撃ノ進捗ニ伴ヒ一舉西那須野ニ向ヒ躍進ス

### 第九問題

軍ノ追撃ニ伴フ第一軍通信隊命令

### 第九問題原案

一軍通作命第〇〇號

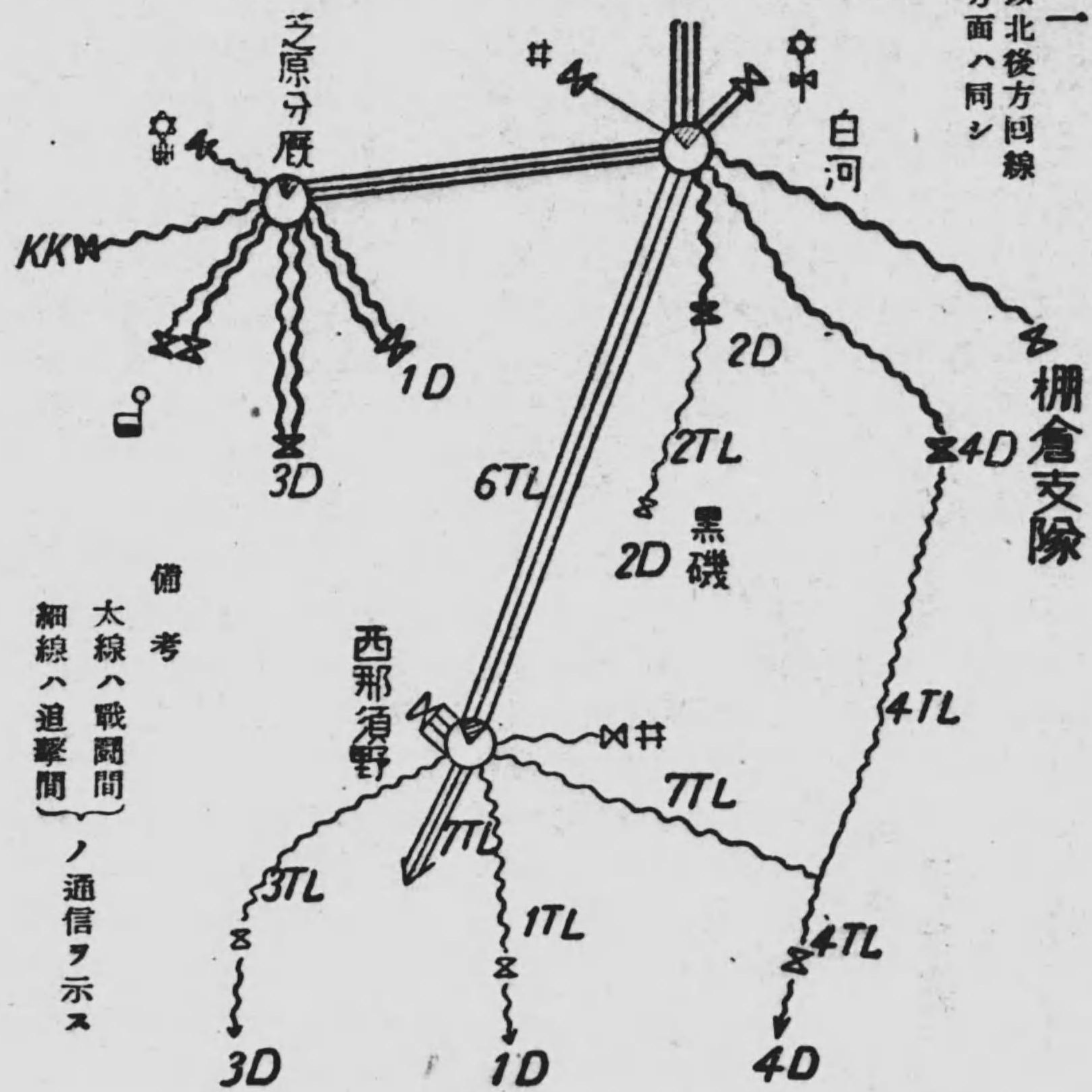
第一軍通信隊命令

三月二十五日二十一時  
深堀隊本部

- 一、敵ハ全線ヲ擧ゲテ宇都宮方向ニ退却ヲ開始ス  
軍ハ一部ヲ以テ殘敵ヲ掃蕩スルト共ニ主力ヲ以テ宇都宮附近ニ向ヒ追撃ス  
軍司令部ハ暫ク現在地ニ在リ追撃ノ進捗ニ伴ヒ一舉西那須野ニ向ヒ躍進ス
- 二、軍通信隊ハ軍ノ追撃ニ伴ヒ別紙ノ如キ通信網ヲ構成シ其ノ通信連絡ニ任ゼントス
- 三、第一、第三中隊ハ一部ヲ以テ那珂川以北ノ地區ニ於ケル連絡ヲ續行スルト共ニ主力ヲ以テ速  
カニ西那須野ニ急進シ同地ヲ起點トシテ別紙要圖ノ擔任回線ヲ構成スベシ
- 四、第二、第四、第五中隊ハ前任務ヲ續行スルト共ニ其ノ地兵團ノ行動ニ從ヒ通信線ヲ延長スベシ



第一軍通信隊有線通信網  
 (於三月二十五日十一時以降)

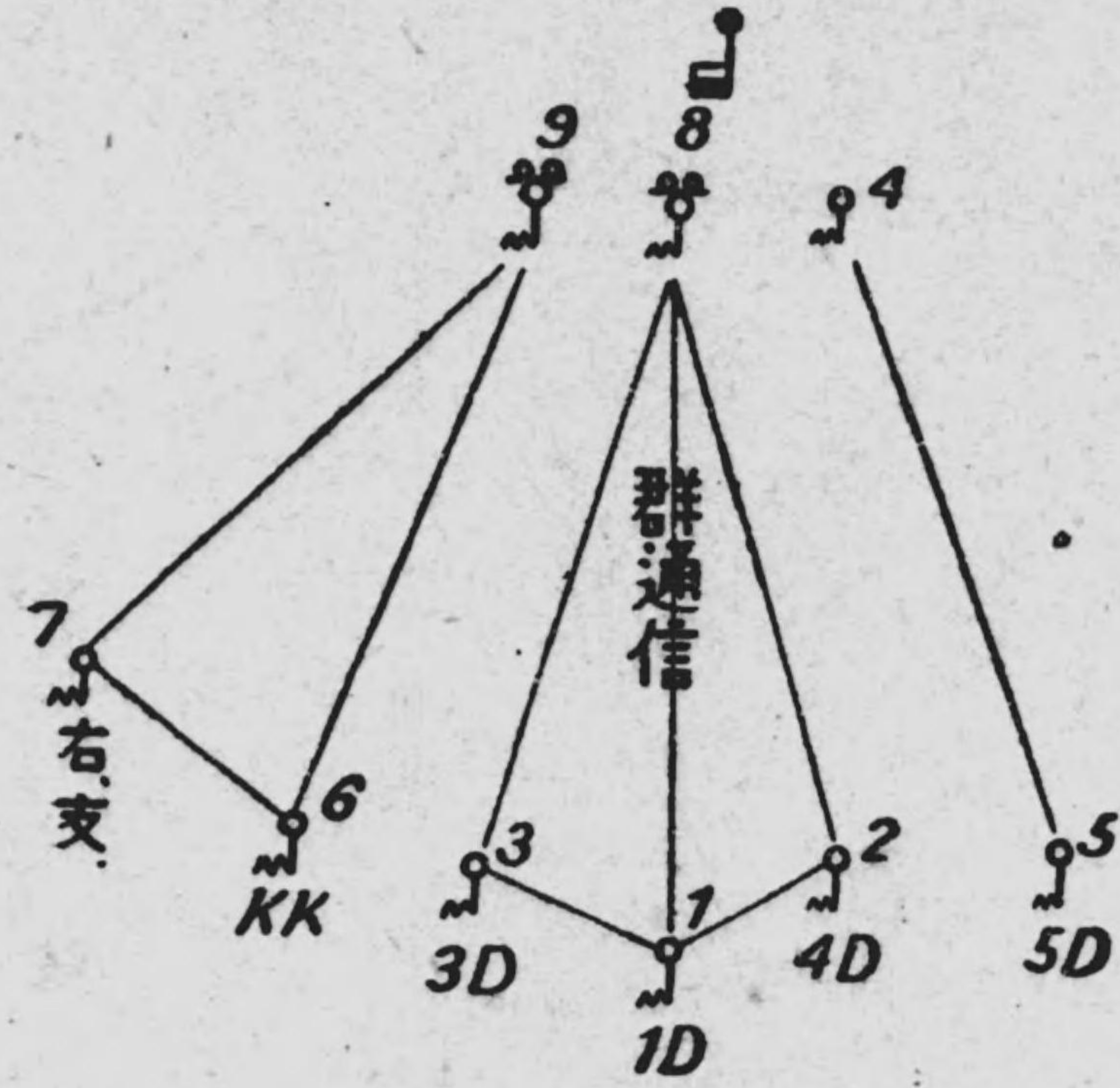


- 五、第六中隊ハ白河、西那須野間裸線各三條ヲ架設スベシ作業終了セバ西那須野ニ集結スベシ
- 六、第七中隊ハ速カニ西那須野ニ急進シ該地ヲ起點トシ矢板方向ニ向ヒ狀況ノ許ス限リ裸線三條ヲ延線スベシ
- 尙一部ヲ以テ西那須野黒磯間裸線一條ノ架設ヲ實施シ第四中隊ノ作業頭到着ト共ニ同隊ニ線路ヲ交付スベシ
- 七、西那須野ニ於ケル通信中樞ハ第七中隊ノ擔任トシ〇〇少佐ヲシテ指導セシム
- 狀況ニ依リ黒磯ニ通信中樞設置ヲ要スル場合ハ第六中隊之ヲ擔任ス之ガ實施ニ方リテハ特別命ス
- 八、各中隊ハ那珂川以北ノ通信網不要ナルニ至レバ直チニ其ノ擔任回線ヲ撤去シ得ル如ク一部ヲ殘置スベシ
- 九、材料補給ニ關シテハ別命ス
- 一〇、無線各小隊ハ別紙第二ノ如ク通信網ヲ構成シ其ノ連絡ニ任ズベシ

軍司令部ノ西那須野ニ向フ躍進時ニ於ケル統制通信所ノ推進ニ方リテハ△△少佐ヲシテ指揮セ



第一軍通信隊無線通網  
(於三月二十五日一以時降)



備考  
連絡諸元記入ノ通り(略ス)

シム

- 一一、仙臺放送所長ハ軍宣傳掛將校ノ指示ニ從ヒ宣傳勤務ニ服スベシ
- 一二、予ハ現在地ニアリ爾後軍司令部ト共ニ西那須野ニ到ル

第一軍通信隊長 某太佐

下達法

要旨ヲ電話又ハ電報シ後印刷送付ス

狀況 第八

- 一、軍ハ依然攻撃ノ手ヲ弛ムコトナク包圍圈内ノ殘敵ヲ掃蕩スルト共ニ他方敵線ヲ突破シテ果敢ナル追撃ヲ敢行ス
  - 二、諸隊ハ夜暗ノ混亂ト窮鼠ノ如キ殘敵ノ反噬トニ禍セラレツツモ尙戰捷ニ對スル優越感ヲ以テ萬難ヲ克服シテ追撃ヲ續行ス
- 敵ハ多大ノ損害ヲ被リテ撃退セラレタルモノノ如ク隨所ニ俘虜トナリ或ハ投降スルモノ甚ダ多シ



斯クテ西那須野、大田原附近ニ於ケル敵ノ最大ノ反噬モ機先ヲ制シタル我ガ追撃隊ノ側背溢出ニ制セラレテ遂ニ其ノ企圖ヲ放棄シ箒川右岸高地線ノ既設陣地ニ遁入セリ

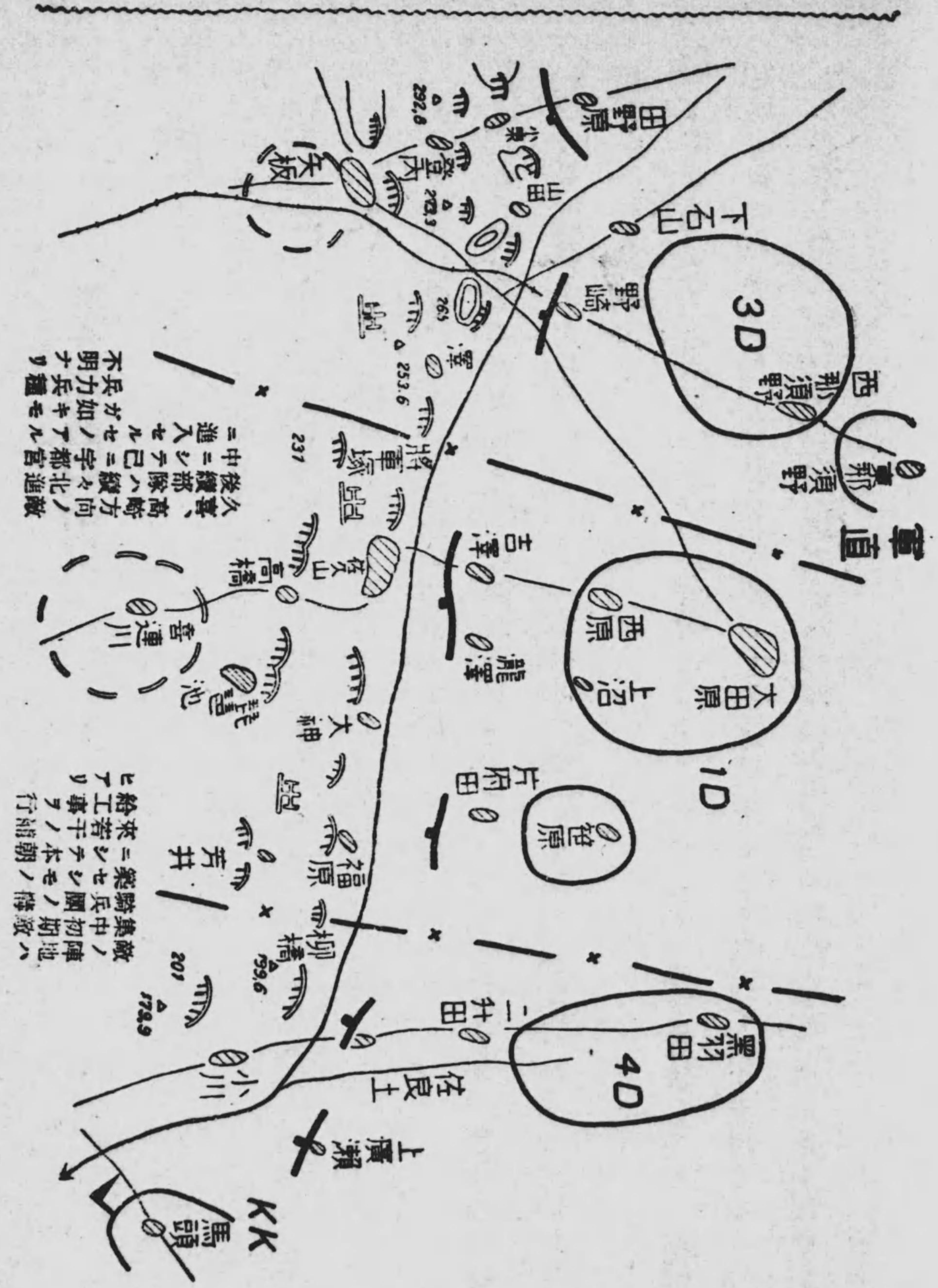
三、三月二十六日正午軍司令官ハ黒磯ニ在リテ左ノ如キ状況ヲ知ル

- 1、彼我ノ態勢別紙要圖ノ如シ
- 2、第二師團ハ概テ戰場掃除ヲ終リ黒磯附近ニ集結シツツアリ
- 3、軍右側支隊ハ鬼怒川温泉附近ニ進出セルモ優勢ナル敵ノ抵抗ヲ受ケ目下極力之ヲ攻撃中ナリ
- 4、棚倉支隊ハ第四師團長ノ指揮ニ入りシガ苦戦ノ後辛ウジテ當面ノ敵ヲ撃破シテ大子町ニ進入セリ
- 5、第五師團ノ戦闘ハ本朝來有利ニ進展シ敵ヲ水戸方向ニ壓迫シツツアリ
- 6、後方状況ハ相當混亂シアルモ尙軍ノ要求ヲ充足シ得ル状態ニ在リ

### 第十問題

軍司令官ハ三月二十六日正午以後如何ニシテ戦闘ヲ指導セントスルヤ

三月二十六日正午ニ於ケル状況要圖





## 第十問題の研究

### 一、主決戦方面に就て

諸官の案は左の三案に大別することが出来る。

- 1、重點を右翼に保持し矢板附近より敵の左翼を席卷せんとするもの
- 2、佐久山附近の敵陣地の骨幹を撃破せんとするもの
- 3、重點を左翼に保持し敵陣地の右翼を包圍せんとするもの

而して第一案者は、矢板附近は、敵陣地の翼であつて、而も左手前に我に突出してゐる弱點がある、軍が若しも之を撃破したなら、爾後敵を席卷して東南方退路外に向つて壓迫することが出来ると云ふのである。

第二案者は、佐久山附近は敵陣地の骨幹部であるから、之を一舉に撃破したら、敵陣地は自ら瓦解するであらうとし、それに我が軍としても其の有する全戦力を集中發揮することが容易である利益がある、之に反して矢板附近等川鐵道橋附近は、斷崖があつて地形上攻撃が困難であるといふのである。

第三案者は、敵の退却状態並に全般の態勢から判断して、敵の右翼は他に比して薄弱である、故に軍は機動によつて、敵陣地を包圍迂回して之を西方山地に壓迫するを有利とするといふのである。

### 二、攻撃時期に就て

諸官の案は、即時攻撃と明拂曉攻撃との二案に別れる。

拂曉攻撃案者の理由とする所は、敵は既に既設陣地に入つたから、防禦設備も某程度に實施されるであらう、故に躁急な攻撃は徒らに損害を増加して思はない失敗を招く虞がある、殊に第二師團の戦力をも使用しようとするれば自然即時攻撃は不可能であるといふのである、

之に對して即時攻撃案者の理由とする所は、既設陣地に遁入したとは云ふけれども、其の陣地は集中初期に於ける騎兵陣地であつて、堅固なものではない、軍は敗敵に追尾して追撃したものであつて、攻撃の餘勢に乘じ一舉に攻略すれば容易に奪取し得るのである、今時間の餘裕を敵に與ふればそれだけ敵をして敗殘状態にある混亂を整理して、後續隊を併せ、蘇生せしめる不利があるとするものである。

### 三、第二師團の用法に就て



戰場に一兵と雖も多く使用すべき原則により、之を使用せんと企圖したものと、其の來著如何に拘らず現存兵力を以て攻撃を強行せんとするものとの二案がある。此等は、何れも主決戦方面或は攻撃の時機等に關聯して考究せらるべき問題である。

## 第十問題原案

### 方針

軍ハ敵ニ寸暇ヲ與フルコトナク直チニ重點ヲ最右翼ニ構成シ一舉穿貫的ニ敵陣地ヲ突破シ鬼怒川河畔ニ進出ス

### 指導ノ大要

- 一、第三師團ハ軍直轄部隊ノ大部ヲ併セ指揮シテ直チニ攻撃ヲ開始シ一舉矢板附近ヲ突破シテ鬼怒川河畔ニ進出ス
- 二、第一師團ハ重點ヲ佐久山附近ニ指向シ一舉敵陣地ヲ突破シ喜連川南方地區ニ進出セシム
- 三、第四師團ハ一部ヲ以テ佐良土附近ヨリ當面ノ敵ヲ攻撃セシメ主力ハ直チニ馬頭方向ニ迂回シ

爾後敵翼ヲ溢出シテ烏山西南方地區ニ進出ス

- 四、騎兵集團ハ直チニ祖母井方向ニ轉進シ敵ノ退路ヲ遮斷ス
- 五、第五師團ハ一部ヲ以テ當面ノ敵ヲ水戸以南ニ追撃セシメ主力ヲ以テ茂木ヲ經テ益子方向ニ進出

六、軍右側支隊ハ極力當面ノ敵ヲ突破シ今市附近ニ進出セシム

七、軍飛行隊竝ニ飛行團ハ全力ヲ以テ敵砲兵ヲ爆撃シ主トシテ第三師團ニ協力ス

八、軍砲兵ハ直チニ西那須野附近ニ陣地ヲ占領シ主トシテ第三師團ニ協力ス

九、第二師團ハ西那須野附近ニ到ラシム

## 第十問題原案の説明

一、追撃の手を緩めることなく敵に尾して一舉突破することを要する。

機動により包圍迂回せんとするものは、既に敵に一步を譲つたものであり、敵に時間の餘裕を與へて、敗退の觀念から解放蘇生して恢復せしめるもので、同意出來ない。此の場合は巧遲を避けて拙速主義の方がよい。既設陣地ではあるが、之は騎兵陣地で未だ部隊に適合した火力組



織も十分には出来上つてゐないであらうと判断し得るに於て特に然りである。

二、主決戦方面は之を右方に保持して、一舉に穿貫的に敵陣地を突破するのがよい。

矢板方面は箒川河畔に若干断崖部はあるけれども、其の區域は狭小で、重點の指向方向によつては大なる障礙を呈しない。殊に此の方面は敵の陣地帯の幅員も狭く一舉鬼怒川河畔に進出することが出来るが、之に反して佐久山附近は重疊した起伏地帯が連続してゐて、奏功容易でなく、而も敵の正面を突破しようとするものである。

敵の右翼に向ふ案は、數次の抵抗を受け、且矢板方面からする敵の逆攻勢に對し危険な態勢に陥ることあるを豫期しなければならぬ。

三、之を要するに、追撃中に於ては常に積極的主動の地位に立つて、敵を致して其の企圖を挫折せしむる如く果敢な攻撃を遂行して、重點を極度に成形して穿貫的に敵組織を破壊することを著眼としなくてはならぬ。

若し本狀況に於て箒川右岸の敵陣地が敵の新來の兵團を以て準備されてゐたとすれば、問題は別であることを附言して置く。

## 狀況 第九

一、軍通信隊ハ第九問題原案ノ通信隊命令ニ基キ各隊行動ヲ起シタルモ彼我ノ紛戦ニ伴フ敵軍及友軍ノ妨害ニヨリ作業意ノ如ク進捗セズ而モ軍司令部ノ躍進ハ敵情ニ依リ一舉西那須野ニ推進スルコト能ハズ遂ニ黒磯ニ停止ス

二、軍通信隊ハ直チニ西那須野中樞設置ヲ變更シテ之ヲ黒磯ニ設置シ諸隊ノ部署ヲ變更ス  
二十六日正午ニ於ケル軍通信網次ノ要圖ノ如シ

## 第十一問題

陣地攻撃ニ伴フ第一軍通信隊命令

## 第十一問題原案

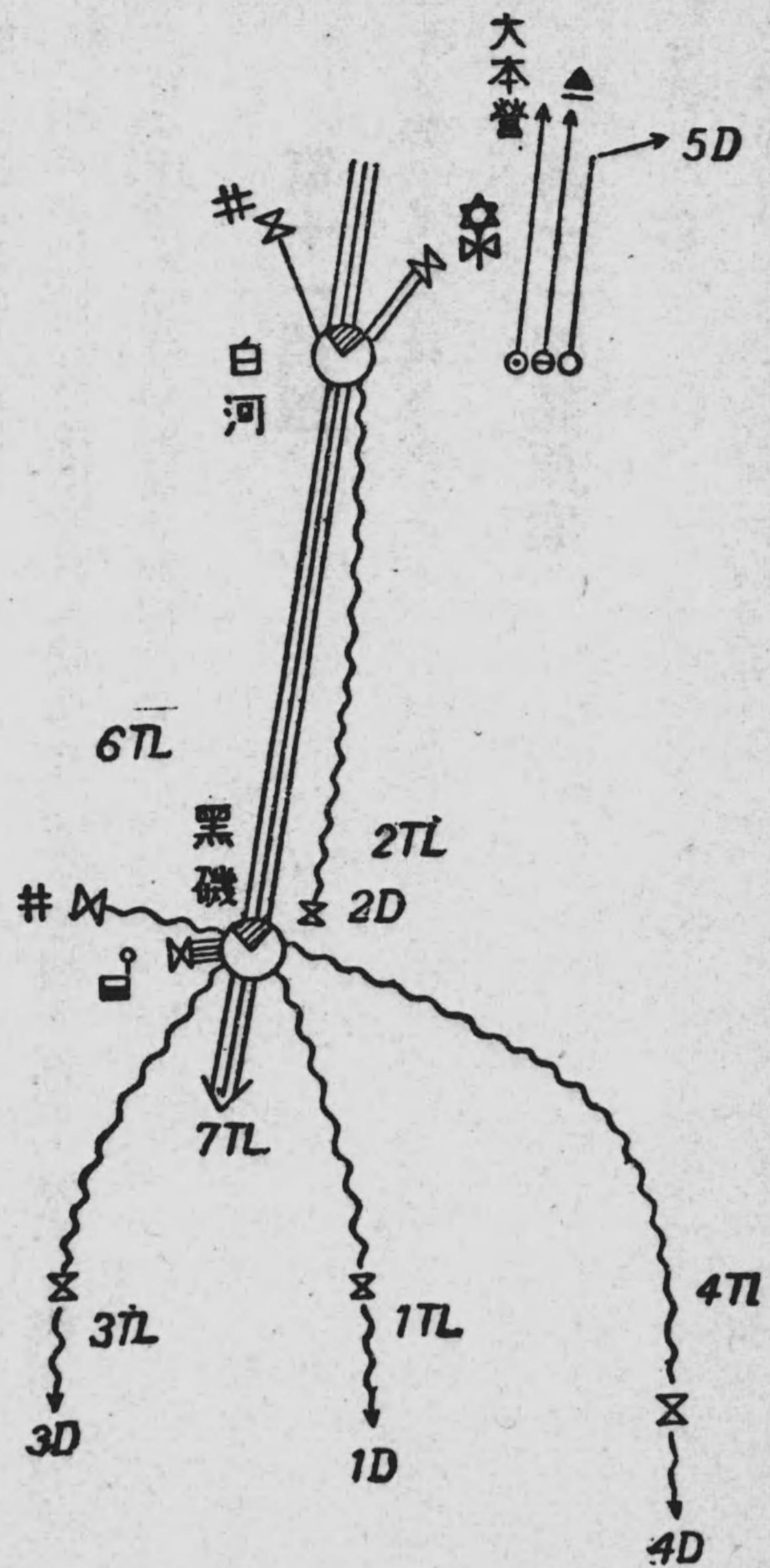
一軍通信隊命令第〇〇號

第一軍通信隊命令

三月二十六日正午  
黒磯隊本部



第一軍通信隊有線通信網要圖  
 (於三月二十六日正午)



無線通信網ハ第九問題原案ニ同シ

一、敵情別紙情報圖(略ス)ノ如シ

軍ハ敵ニ寸暇ヲ與フルコトナク直チニ重點ヲ最右翼ニ構成シ一舉穿貫的ニ敵陣地ヲ突破シ鬼怒

川河畔ニ進出ス

二、軍通信隊ハ軍ノ追撃ニ伴ヒ別紙要圖ノ通信網ヲ構成シ其ノ通信連絡ニ任セントス

三、第一、第三、第四、第五中隊ハ依然前任務ヲ續行シ其ノ地兵團ノ行動ニ伴ヒ其ノ連絡ニ任ズベシ

四、第六中隊ハ依然黒磯附近ノ中樞ヲ擔任スルト共ニ後方回線ノ整理ニ任ズベシ之ガ爲狀況之ヲ許セバ白河—黒磯間ニ更ニ一條ノ回線ヲ増設スベシ

五、第七中隊ハ西那須野附近ノ中樞設置ヲ擔任スルト共ニ爾後矢板方向ニ裸線三條ノ伸線ヲ準備シアルベシ

六、第二中隊ハ速カニ西那須野ニ集結シ待期スベシ

七、隊附〇〇大尉ハ西那須野通信所ノ開設ヲ區處スベシ

八、材料補給ニ關シテハ別命ス

九、無線各小隊ハ別紙第二ニ示ス通信網ヲ構成シ其ノ連絡ニ任ズベシ

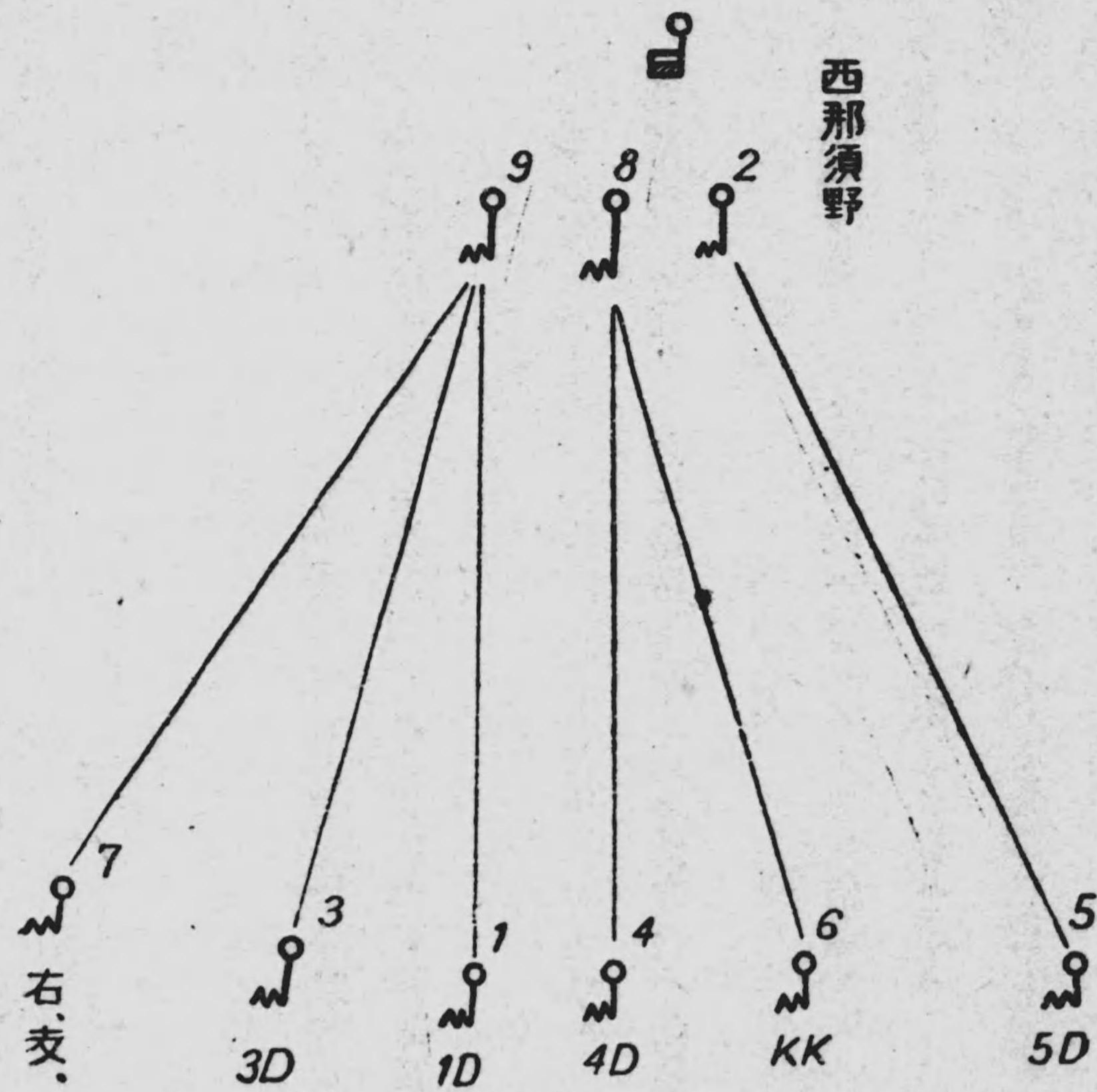
隊附〇〇少佐ヲシテ區處セシム

一〇、予ハ軍司令部ト共ニ西那須野ニ到ル

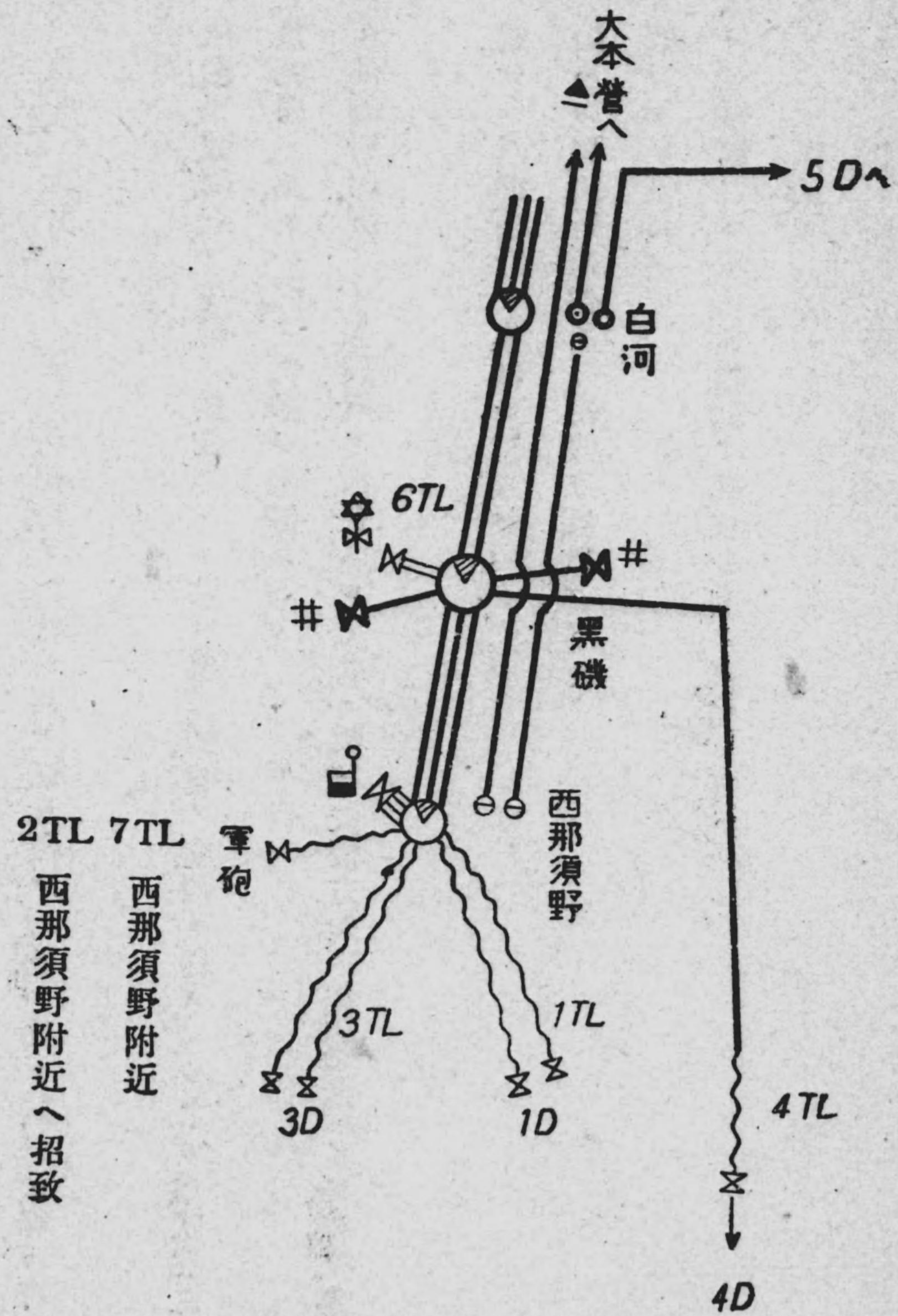


通信諸元ニ對スル規定(略ス)

(二第紙別)  
網信通線無隊信通軍一第  
(降以午正日六十二月三)



(一第紙別)  
網信通線有隊信通軍一第  
(降以後午日六十二月三)



備考 太線ハ既設、細線ハ新回線トス

2TL 7TL  
西那須野附近  
西那須野附近へ招致



第一軍通信隊長 某 大 佐  
下達法 要旨ヲ電話又ハ電報シ後印刷送付ス

### 狀況 第十

一、各兵團ハ軍司令官ノ企圖ヲ詳知スルヤ何レモ追撃ノ餘威ニ乘ジ敵ニ對應ノ處置ヲ講ズル暇ヲ與フルコトナク追撃シテ敵ニ觸接スルト共ニ徹底的ニ重點ヲ成形シテ穿貫的ニ敵線ヲ突破セントシ之ヲ強行ス

軍砲兵ハ其ノ全火力ヲ矢板北方高地ニ集中シ一瞬ニシテ山形改マルヲ見ル

第三師團ノ第一線將兵ハ勇躍最後ノ砲彈ト共ニ敵陣地ニ突入ス敵守兵ハ茫然トシテ爲ス所ヲ知ラズ

矢板附近ニ於テハ若干敵ノ逆襲ヲ被リシト雖モ既ニ緒戰ノ大捷ニ信念ヲ固メタル我が將兵ハ鎧袖一觸ノ意氣ヲ以テ之ヲ擊破シ二十六日十七時頃既ニ鬼怒川ノ線ニ達ス

二、第一師團正面ハ初期稍、頑強ナル抵抗ヲ受ケシト雖モ第三師團方面ノ進捗ニ伴ヒ敵ノ戰意過早ニ消失シタルモノノ如ク十七時稍、過喜連川南方臺上ニ達スルコトヲ得タリ

三、其ノ他ノ兵團ハ何レモ大ナル敵ノ抵抗ヲ被ルコトナク日没前概ネ所要ノ進出線ニ達スルコトヲ得タリ

四、軍司令官ハ西那須野ニ在リ

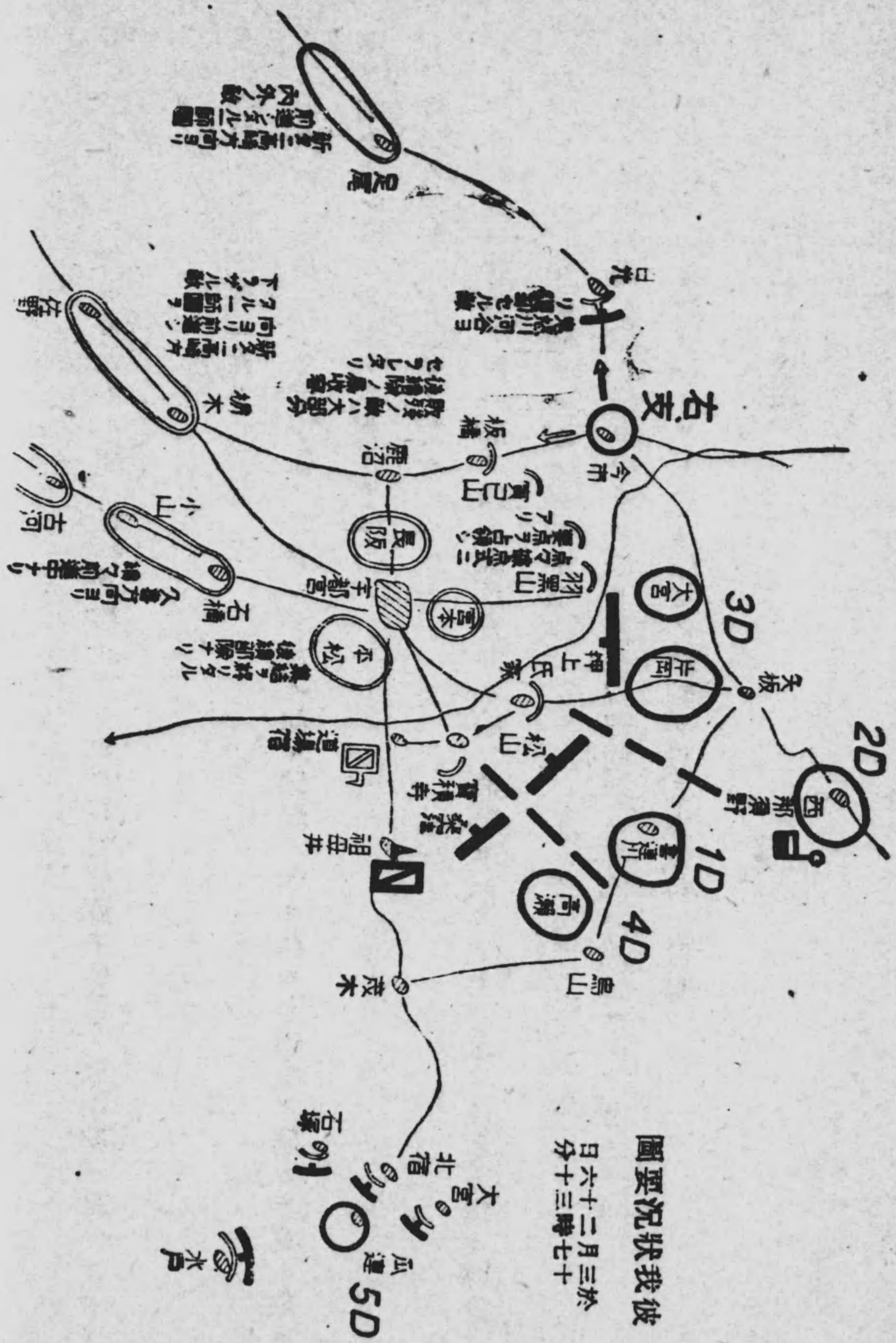
三月二十六日十七時三十分諸情報ヲ綜合シテ左ノ如キ狀況ヲ知リ速カニ機先ヲ制シテ更ニ敵ニ一撃ヲ加フルニ決シ所要ノ部署ヲ爲ス

- 1、彼我ノ態勢次ノ要圖ノ如シ
- 2、第五師團ハ有力ナル一部ヲ以テ水戸方向ノ敵ヲ追撃セシメ主力ヲ以テ茂木方向ニ轉進セシメントセシモ頑強ナル敵ノ抵抗ニ會ス
- 3、軍ノ補給機關ハ近ク推進セラレアリ糧秣、彈藥共ニ補充ニ遺憾ナキヲ期シアリ
- 4、軍將兵ハ相當疲勞シアリト雖モ戰捷ノ餘威ヲ以テ志氣益々旺盛ナリ

### 第十二問題

軍ハ爾後如何ニ戰鬪ヲ指導セントスルヤ





### 第十二問題の研究

- 一、諸官の案を大別せば概ね左の三案に分る。
  1. 主力を以て今市附近から宇都宮西側方向に攻撃し敵を退路外の鬼怒川に壓迫せんとするもの
  2. 氏家附近から宇都宮方向に向つて一舉に突破を敢行せんとするもの
  3. 寶積寺以南の地區から宇都宮南側地區に向ひ攻撃し敵を日光山系に壓迫する如く攻撃せんとするもの
- 二、第一案者の理由とする所は、敵をして全く退路外に遮断し之を殲滅する爲、戰略態勢の優越を發揮せんとするものであつて、重點を敵の左翼に指向すれば、敵を撃摧後全く山地方面の立脚点を奪つて徹底的に打撃を與へることが出来るとする案である。併しながら此の案に於ては、地形上十分な兵力を展開することが困難であるのと、爾後數段の抵抗を受けて迅速な戦果の發展を期待することは困難であらう。
- 三、中央案者の理由とする所は、軍は主力を以て氏家北方地區に進出してゐるから、敵に後續隊を併せ十分に準備を整へて攻勢に轉ずる餘裕を與へないやうに、一舉に突破して速かに宇都宮



を奪取することが必要だとするものである。

併しながら本案は、羽黒山と寶積寺附近の臺地との中間凹角を突破せんとするものであるから此の兩據點の何れかを先づ破摧しなければ、攻撃奏功の見込はないであらう。之が爲中央案者の大部の諸官が羽黒山を夜襲によつて奪取しようとして企圖してゐるのは、至當の行動と謂へるが、併し、希望は必ずしも實現するものではない、夜襲によつて羽黒山を奪取出來ると過早に結論することは不可である。而も若し夜襲が成功しなかつたなら、此の案の成立さへあやしくなる案であるから、確實な案とは謂へない。

又晝間羽黒山を火制すれば、中間突破は可能なりとするものがあるかも知れぬが、之は暴舉である。即ち羽黒山の南方斜面を、如何にして火制することが出来るかを検討すれば、自から其の不可能なることを知ることが出来るであらう。

四、寶積寺南方地區から宇都宮南方に指向する案は、敵に陣外決戦を強要する案であつて、同意する所である。

蓋し此の放膽な作戦行動によつて宇都宮附近に到着を豫期する敵の後續兵團をも併せ包圍して之を退路外に遮斷し、機動によつて決戦を強要することを得るからである。

本夜暗を利用することによつて此の兵團の移動は可能である。

五、攻撃開始の時機を即時實施せんとするもの換言すれば夜間攻撃を實施せんとするものがあるが、適當ではない。蓋し當面の敵の大部は後續部隊であつて、敗退した敵は之によつて既に收容されて居る。故に今や追撃の思想は此の際放棄して、新なる戦鬪を實施する時機に立ち至つたことを認識しなくてはならぬ。故に何の準備もなく夜間主力を以て敵に衝突することは、頗る危険である。況んや夜間攻撃の成果と其の翌日に於ける部隊の混亂から生ずる戦力低下の不利とを比較考究して見たら、徒らに實施する夜襲の不利を知ることが出来るであらう。大部の諸官が拂曉攻撃であつたのは同意する所である。

## 第十二問題原案

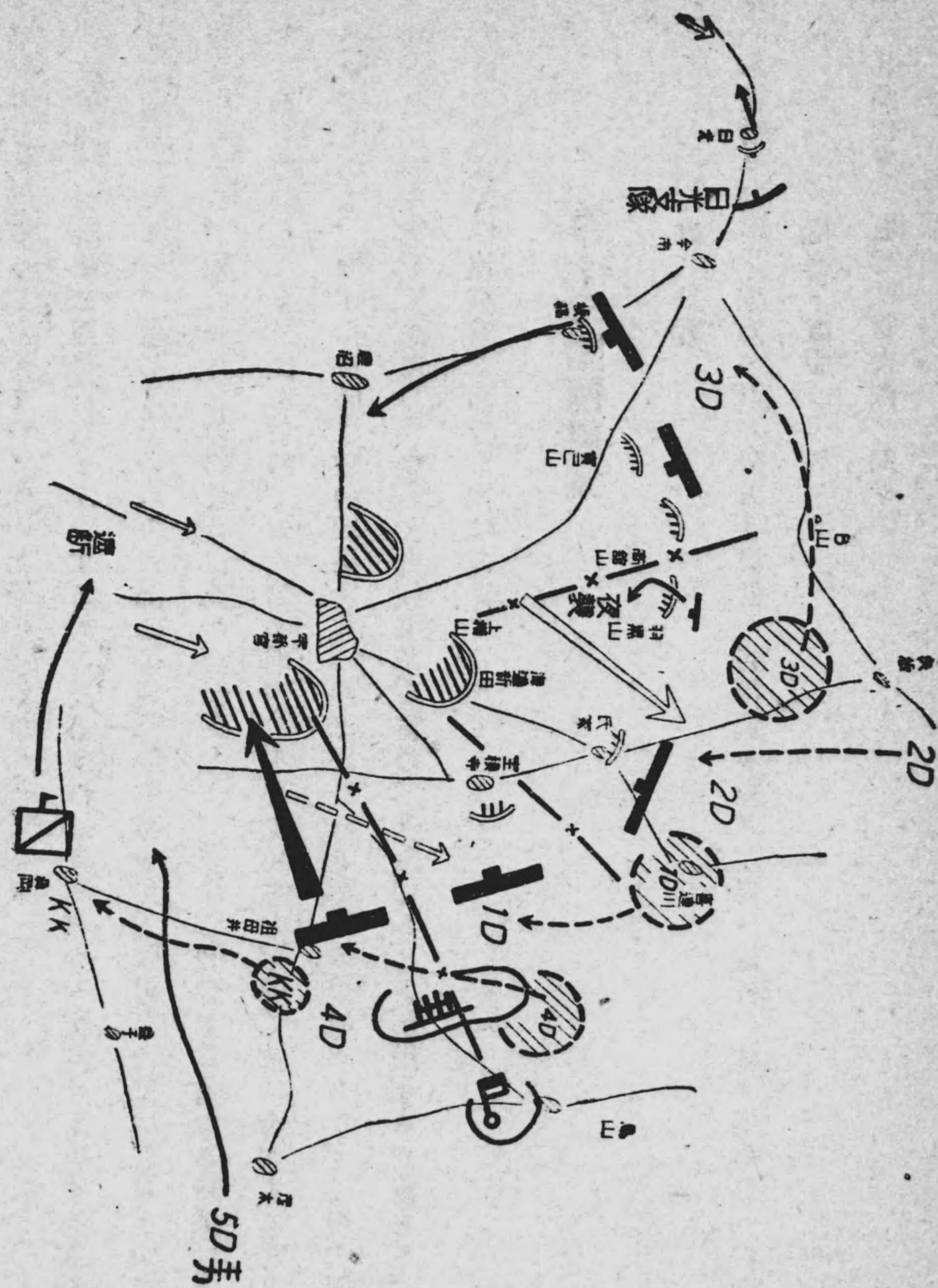
### 方針

軍ハ本夜暗ヲ利用シ主力ヲ以テ南方ニ機動シ明拂曉重點ヲ左翼ニ保持シ敵ヲ退路外ニ包圍撃滅ス

### 指導ノ概要

一、兵團部署ノ概要次頁要圖ノ如シ





- 二、第四師團(軍直部隊ノ大部属)ハ本夜暗ヲ利用シテ祖母井方面ニ轉移シ明拂曉ヨリ一舉宇都宮南側地區ニ向ヒ攻撃
- 三、第一師團(軍直部隊ノ一部属)ハ本夜暗ヲ利用シテ寶積寺東方地區ニ轉移シ明拂曉ヨリ一舉宇都宮方向ニ攻撃前進
- 四、第二師團(歩兵第八聯隊欠)ハ速カニ氏家附近ニ進出シテ第一師團ト交代シ明拂曉ヨリ宇都宮北側地區ニ向ヒ攻撃
  - 一部ヲ以テ第三師團ト交代シテ羽黒山ヲ夜襲シ之ヲ奪取セシム若シ成功セバ明拂曉以後依然該方面ヨリ南方ニ向ヒ攻撃ヲ續行セシム
- 五、第三師團(軍直ノ大部欠)ハ本夜暗ヲ利用シテ今市方面ニ轉移シ明拂曉ヨリ重點ヲ右翼ニ保持シテ攻撃シ敵ノ左翼ヲ包圍シテ軍ノ戰鬪ヲ有利ナラシム
- 六、諸隊ハ日没後全線小部隊ヲ以テ夜襲ヲ決行シ兵團ノ夜間機動ヲ祕匿ス
  - 各兵團ノ夜間機動開始ハ二十二時ト豫定ス
- 七、第五師團ハ一部ヲ以テ水戸附近ノ敵ヲ南方ニ擊破セシメ主力ヲ以テ速カニ眞岡北方地區ニ進出シ明拂曉ヨリ敵ノ側背ヲ求メテ攻撃



八、騎兵集團ハ眞岡南方地區ヨリ敵ノ退路遮斷

九、飛行部隊ハ極力戰場爆撃ニ従事ス

一〇、日光支隊(軍右側支隊)ハ主力ヲ以テ第三師團長ノ指揮ニ入り一部ヲ以テ日光支隊トナルハ  
當面ノ敵ヲ攻撃シテ主力ノ側背ヲ安全ナラシム

### 第十二問題原案の説明

一、宇都宮附近の陣地は後續隊によつて收容せられ設備せられた陣地である。故に輕舉之を攻撃することは危険であつて、先づ十分な準備をなし放膽な作戰によつて敵の意表に出で、一舉に殲滅的攻撃を加ふることが有利である。

之が爲には、宜しく陣外に決戦を強要し、敵後續兵團をも併せて攻撃する爲に、寶積寺南方から宇都宮南方地區に向つて主決戦を指導することが適當である。鬼怒川は之が爲には大なる障礙とはならないのである。

之に反して中央案は、敵の十字火網によつて又敵の右翼に向ふ案は地形上敵の逐次の抵抗を蒙つて、共に進捗容易でない。

二、戦力を徹底的に重點に集中することに努力した。之が爲に第一、第四師團を主決戦方面に使用し、第五師團をも爲し得る限り戰場に招致して戦力の増強を圖り、騎兵集團を以て更に徹底的に外翼に溢出させて、敵の後方を遮斷せしめた。

此の爲に生じた氏家附近の間隙は、第二師團を以て之に當らしめ、氏家附近から直路宇都宮方面に壓力を加へて敵の主火力を該方面に吸収させる。

又第三師團は徹底的に西方山地脚方面に行動させ軍の主決戦方面と相呼應して、兩翼包圍によつて敵の戦力を分散させる處置をとつた。

三、羽黒山は戦場の要點であるから、之に壓迫を加へると、敵の注意を該方面に牽制し得る利益がある。故に本夜暗に乘じ一部を以て夜襲せしめて敵の統帥指揮を錯亂させることが効果的である。

### 第十三問題

三月二十六日夕ニ於ケル軍司令官ノ企圖ニ基ク第一軍通信網要圖

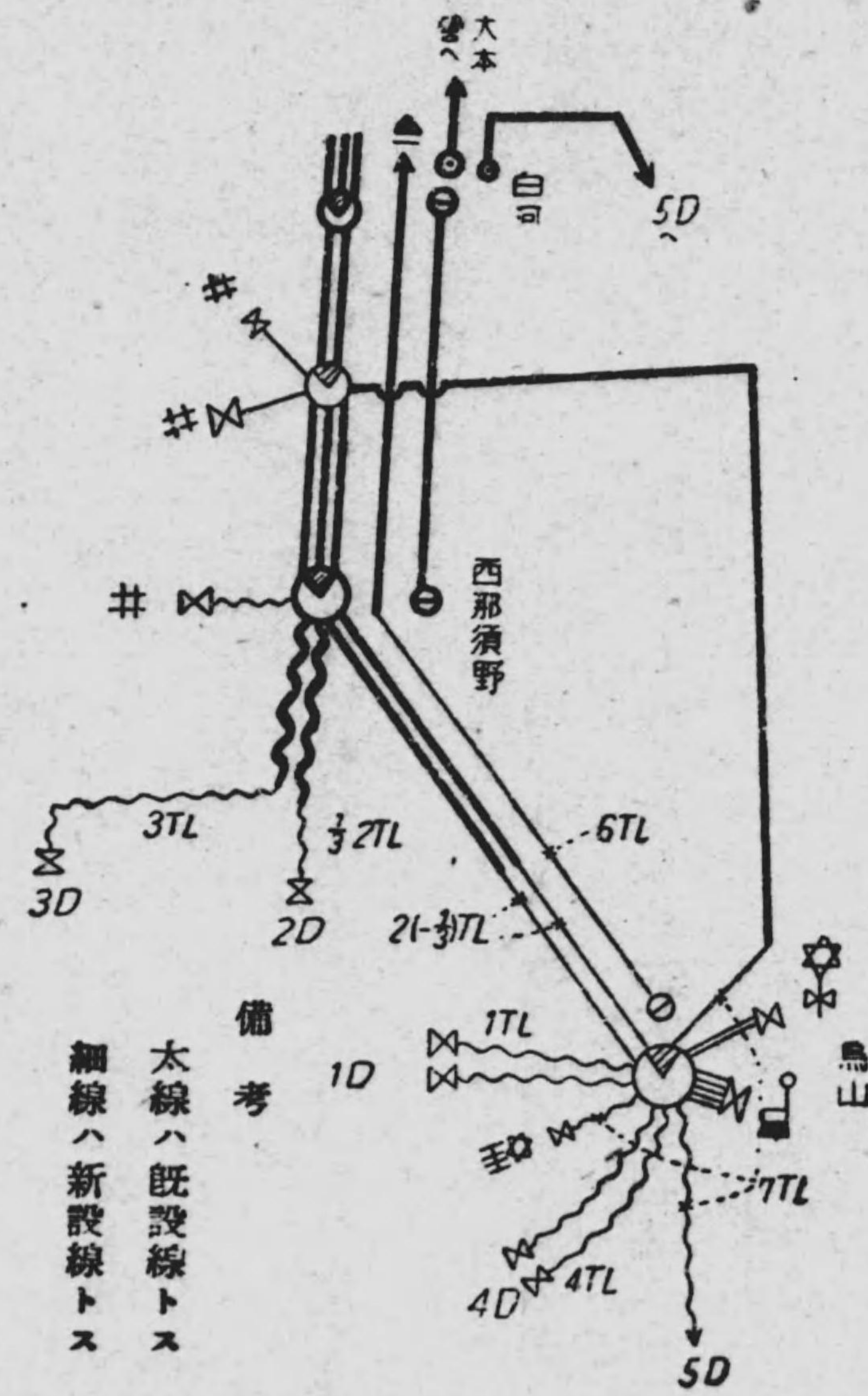


第十三問題原案

其ノ一

第一軍通信線有隊通信網要圖  
(於三月二十七日拂曉時)

主力  
2TL  
6TL  
7TL  
ハ作業完了セバ鳥山ニ集結待機

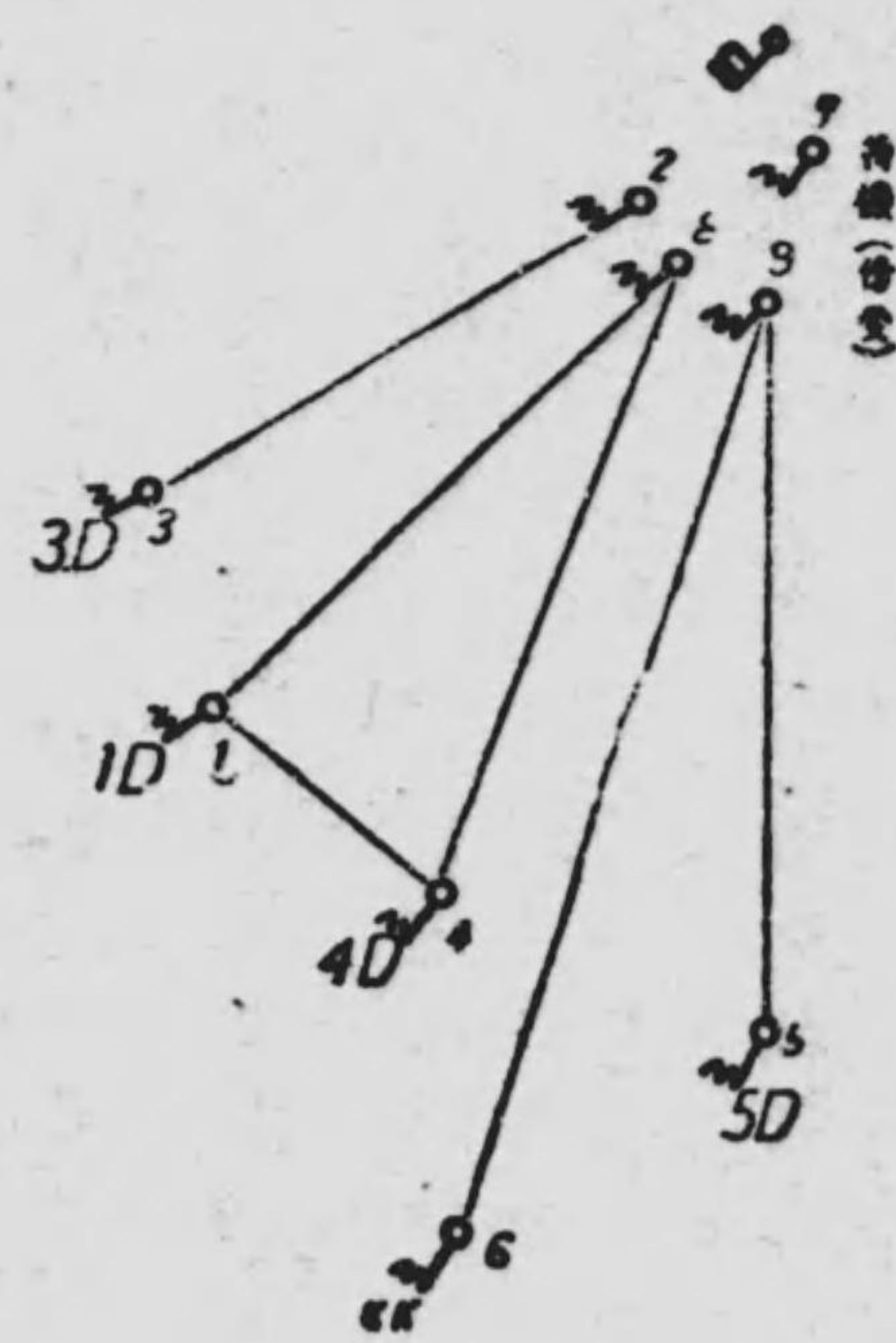


其ノ二

第一軍通信線無隊通信網要圖  
(於三月二十七日拂曉時)

通信諸元ニ對スル規定(略ス)

第二想定を終へて



以上を以て大兵團の運用の一端を研究しつゝ、此の作戰推移に伴うて軍通信が如何に運用せらるべきかを紹介したのである。通信に關し今少し踏み込んで研究したいと思つたが、專習員諸君が餘りに通信に關する基礎的智識に恵まれてゐないので、徒勞に終ることを恐れて其の一例として筆者の原案を無條件に紹介した次第である。他日之を基礎として其の方面に關與する機會ある毎



に更に深刻なる研究を重ねられんことを切望に堪へない。

次に大兵團運用に關する研究の機會は、陸軍大學に入られた方以外は極めて稀であると思ふので、本想定を通じて感じた所懐を二、三述べて諸官將來の研鑽の資に供したいと思ふ。

### 一、敵情判断に就て

敵情判断を周密にすることは、不慮の事象を未然に處置する餘裕と、敵の有ゆる術策に對し有形又は無形の準備に遺憾なからしむる爲に絶對に必要である。

併しながら、決して之によつて自己の方寸を決定すべき基礎とするものではないことをよく銘心しなければならぬ。勿論自己の方寸を實現する爲に敵に對する判断を活用することは大いに努めなければならぬが、然りと云つて主客を顛倒して敵情によつて自己の方寸を決定せんとするは誤である。此のことは誰も理窟としては知つて居るのであるが、現在の事實が果して如何となると、中々困難な問題である。

即ち大兵團の運用に方つては敵情によつて事を處せんとすると必ず敵の企圖に追隨する結果となつて自己の意志を敵に強要して敵を致して對應策なからしむることが出來ないのである。蓋し小部隊にあつては敵情による戰鬪即ち狀況作戰は可能な場合が相當あるが、大兵團では絶對

に不可能であることを知らなければならぬ。

### 二、大局の著眼、先見洞察の識量を向上することが必要である。

常に大局に立つて判断し、没我の境地に立つて靜思すれば、明鏡止水の如く忽然として悟る所があり、先見洞察の心眼を開くことが出來るものである。大兵團の運用に方つては小手先の小策陋策は既に何の役にも立たないものである。此の理が眞に體得出來れば、大兵團運用に一進境を開き得たものと謂へやう。

### 三、戦機に投合する機眼を養ふことが必要である。

戦場の實相は宛然怒濤の相搏つが如く、彼我軍隊の奮戦力闘は極度に達して、其の戦勢は甚だ渾沌たるものあり、戦勝の曙光は此の間に明滅し彼我の間に浮動して、一喜一憂の現象を百出するものである。此の時に方つて克く之を捕捉し、之を利用し、擴張し得るものは、即ち機眼を具有したものであつて、此の者に於て始めて、戦場の覇者たることが出來るのである。之は困難なことではあるが、武將たる者は平生の修養として之を體得しなくてはならぬ運命にあるのである。

諸君の奮勵を望んで止まない。



### 第三想定

所要地圖 五十萬分一

ネルチンスキーザオード  
海拉爾、滿洲里

最近の地圖には  
標高の記入なし

一、青軍第一軍ハ海拉爾地方ニ侵入スル敵ヲ擊滅スベキ任務ヲ以テ奉天ヲ發シ海拉爾附近ニ集中中ナリシガ軍司令官ハ一部ヲ以テ「ネルチンスキーザオード」方向ヨリ南下スル敵ニ對シ軍主力ノ作戰ヲ容易ナラシメ主力ヲ以テ滿洲里方向ノ敵ヲ求メテ之ヲ擊滅スルニ決シ三月一日以來逐次前進ヲ開始シ本五日十六時主力ヲ以テ概ネ赫勒皇德南北ノ線ニ達シ休止ス

二、此ノ時迄ニ知り得タル彼我ノ狀況左ノ如シ

- 1、彼我ノ態勢別紙要圖ノ如シ
- 2、第一師團ハ「ネルチンスキーザオード」方向ヨリ南下スル敵ヲ遠ク北方ニ擊攘シ軍主力ノ作戰ヲ容易ナラシムベキ任務ヲ以テ北進中昨四日午後以來優勢ナル敵ト遭遇シ本朝來戰鬪特ニ激烈ニシテ敵ニ相當ノ損害ヲ與ヘタルガ如キモ我が死傷モ既ニ二〇%ニ達ス
- 3、第二師團ハ敵ヲ勉メテ南方ニ牽制シ軍主力ノ作戰ヲ容易ナラシムベキ任務ヲ以テ達賴湖東北側「バンツアガンオボ」高地附近ニ進出シ西北方遙カニ優勢ナル敵兵蟄集シアルヲ望

見ス

- 4、軍主力ハ十六時赫勒皇德南方ノ線附近ニ達シ大休止中ニシテ志氣極メテ旺盛ナリ
  - 5、騎兵集團ハ昨四日夕世威革特山附近ニ於テ裝甲部隊ヲ有スル敵騎兵團ト遭遇セシモ逐次壓迫セラレ本日十五時頃「ダガンデル」山附近ニ在リテ敵ヲ拒止シアリ
  - 三、青軍第一軍ノ編組竝ニ作戰資料ノ概要別紙第一、第二ノ如シ
  - 四、是ニ於テ軍司令官ハ本五日夜暗ヲ利用シ主力ヲ以テ「ダガンデル」山以北ノ地區ニ轉移シ深ク敵ノ左翼ヲ求メテ之ヲ包圍攻撃スルニ決シ別紙第三ノ如キ要旨ノ軍命令ヲ下達ス
  - 五、軍通信隊ハ軍ノ機動ニ伴ヒ其ノ通信幹線ヲ概ネ北鐵西部線ニ沿フ地區ニ保持シテ軍司令部ト各兵團間トノ連絡ニ任ジアリシガ本五日十六時三十分赫勒皇德東方十二軒ノ待避驛附近ノ軍司令部ニ於テ別紙第三、第四ノ如キ軍命令ヲ受領ス
- 此ノ時ニ於ケル軍通信網ノ概要別紙第五ノ如シ

(別紙第一)

青軍第一軍ノ編組



- 第一軍司令官 大將才
- 第一師團
- 第二師團
- 第三師團(駄馬)
- 第四師團
- 第五師團
- 戰車二聯隊
- 騎兵集團(歩砲其ノ他ノ支援隊ヲ屬ス)
- 獨立山砲兵一聯隊
- 野戰重砲兵一旅團
- 獨立野戰重砲兵一聯隊
- 野戰高射砲隊 若干
- 第一軍飛行隊(各聯隊)
- 第一軍通信隊(本部、有線中隊七、無線小隊十)

以下略ス

備考

軍通信隊中有線第三中隊、無線第三、第六小隊ハ駄馬、無線第八乃至第十小隊ハ自動車、爾餘ハ車輛トス

(別紙第二)

作戰資料ノ概要

- 一、開戦初期敵ノ使用シ得ベキ總兵力ハ少クトモ十師團内外ト判断セラル特ニ敵ノ空中勢力ハ我ニ比シ優勢ナリ
- 二、海拉爾以西ノ鐵道線路ハ破壊セラレアリテ使用シ得ズ
- 三、第一軍ト後方トノ通信ハ主トシテ鐵道沿線ニ特設シタル有線電信ニ依ルノ外在海拉爾固定無線電信所ヲ使用ス

- 四、補給ニ關シテハ概ネ軍ノ會戰ニ支障ナキ如ク整備セラレアリ
  - 五、三月五日ニ於ケル戰場附近ノ日出、日没竝ニ月齡等ノ關係左ノ如シ
- 聯接電信所ハ海拉爾電信局トシ野戰郵便連接交換局ハ之ヲ海拉爾郵便局トス



日出 六時四十分  
黎明、薄暮 概ネ各二時間

日没十七時四十分  
月齡 十二

(別紙第三)

一軍作命甲〇號

第一軍命令

三月五日十六時  
赫勒皇德東方十二軒待避驛軍司令部

- 一、軍ハ本夜暗ヲ利用シテ北方ニ轉移シ明六日深ク敵ノ左翼ヲ求メテ之ヲ包圍撃滅セントス  
主決戦方面ハ第三、第四師團正面トス
- 二、軍飛行隊ハ主トシテ世威革特山、「アバガイツエフスキー」附近ニ豫想スル敵後續部隊ノ狀況ヲ、一部ヲ以テ第二師團正面ノ敵情ヲ搜索スベシ  
又勉メテ軍主力ノ行動ヲ庇掩スルト共ニ敵ノ後方兵團ヲ求メテ爆撃スベシ  
明拂曉以後「バリチギール」山東南方十軒海拉爾河河畔ニ前進飛行場ヲ推進スベシ
- 三、騎兵集團ハ極力現在地ヲ確保シテ軍主力ノ轉進ヲ掩護スルト共ニ第五師團到着セバ速カニ第二師團ノ右翼ニ轉移シ該方面ヨリ深ク敵ノ背後ニ侵入シ敵ノ側背ヲ脅威擾亂スベシ
- 四、第二師團ハ主力ヲ以テ速カニ西方達賴湖畔方面ニ轉進シ南方ヨリ深ク敵ノ右側背ヲ攻撃シ軍

(156)

主力ノ作戰ヲ容易ナラシムベシ

- 五、第五師團ハ主力ヲ以テ速カニ「ダガンチール」山西側地區ニ進出シ軍旋回ノ支撐タルト共ニ爾後「アバガイツエフスキー」方向ニ對スル攻撃ヲ準備スベシ
- 六、第三師團ハ明六日七時迄ニ阿魯布拉克湖西南三軒<sup>546</sup>ヨリ「バリチギール」山北方八軒<sup>593</sup>ニ互ル線ニ進出シ爾後「アイラーク」山方向ニ對スル攻撃ヲ準備スベシ
- 七、第四師團ハ明六日七時迄ニ「バリチギール」山西北三軒<sup>591</sup>ヨリ其ノ南方六軒<sup>711</sup>ニ互ル間ニ進出シ爾後「アイラーク」山南側地區方向ニ對スル攻撃ヲ準備スベシ
- 八、各師團ノ作戰地境ヲ左ノ如ク變更延伸ス線上ハ左師團ニ屬ス

第三、第四師團間

赫勒皇德北方九軒三叉路—其ノ北北西十四軒<sup>672</sup>—<sup>623</sup>—<sup>721</sup>—「バリチギール」山北東四軒—其ノ西西北十軒<sup>580</sup>—薩卜諾爾湖ノ線

第四、第五師團間

「ベスポドニー」待避驛—<sup>664</sup>—其ノ北方十三軒<sup>621</sup>—<sup>291</sup>—「バリチギール」山南南西六軒—「サ  
イダンノール」線ノ湖

(157)



- 九、軍砲兵隊ハ明六日七時迄ニ「バリチギール」山西南地區ニ進出シ第一線兵團ノ戰鬪ニ伴ヒ初期  
 第四、第五師團ニ隨時協力シ得ルノ準備ニアルベシ  
 前進ニ關シ第四師團長ノ區處ヲ受クルコト故ノ如シ  
 十、軍豫備隊(第五師團ノ歩兵三大隊)ハ明六日七時迄ニ「バリチギール」山東側地區ニ位置スベシ  
 十一、軍通信隊ハ明六日七時迄ニ「バリチギール」山東方六糎<sup>668</sup>高地ヲ基點トシ各師團、騎兵集團  
 並ニ軍飛行隊間ノ連絡ニ任ズベシ  
 十二、予ハ赫勒皇德東方十二糎待避驛ニ在リ明六日七時「バリチギール」山東方六糎<sup>663</sup>高地ニ到ル  
 四時以後<sup>668</sup>高地ニ情報所ヲ開設ス

第一軍司令官 大 將 某

下達法略ス

(別紙第四)

一軍作命丙第〇號(一軍作命甲第〇號)

第一軍命令

三月五日十六時  
 赫勒皇德東方十二糎軍司令官

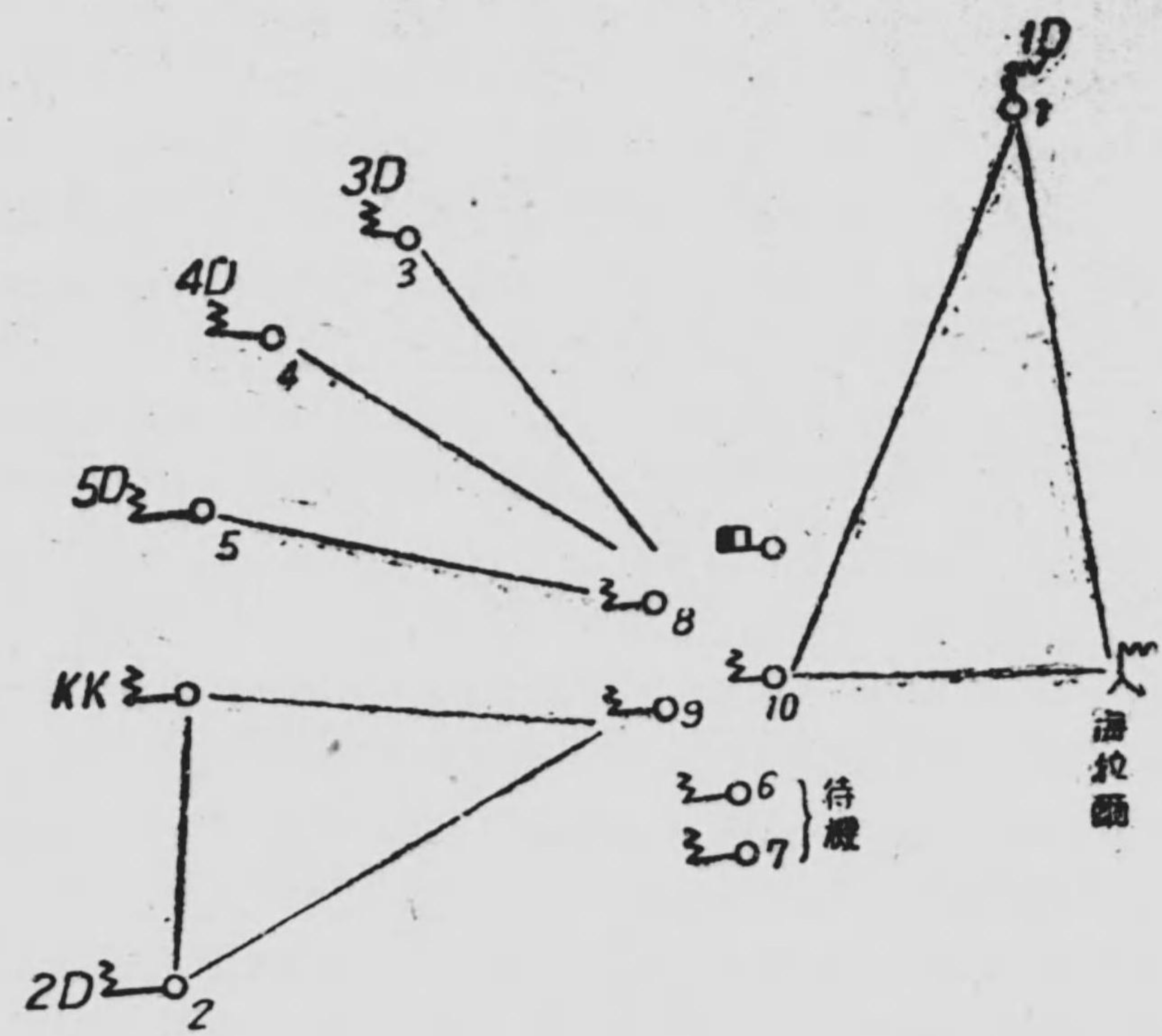
- 一、軍ハ本五日日沒時ヨリ別紙一軍作命甲第〇號ノ如ク行動ス

- 主兵站線ハ赫勒皇德東方十二糎待避驛附近ヨリ概ネ海拉爾河右岸ニ沿ヒ「バリチギール」山方向  
 ニ轉移スル豫定  
 二、軍通信隊ハ明六日七時迄ニ別紙第一、第二ノ如キ通信網ヲ概成シ其ノ通信連絡ニ任ズベシ  
 (別紙ハ爾後ノ研究上省略ス)  
 三、兵站電信隊ハ本五日夜以後赫勒皇德東方十二糎待避驛以東ノ有線通信網ヲ引繼グベシ  
 四、軍通信隊ハ明六日六時迄ニ「バリチギール」山東方十四糎十字路附近ニ於テ兵站ヨリ左ノ如ク  
 材料ヲ受領スベシ
- |       |                   |
|-------|-------------------|
| 裸線材料  | 一八〇糎分             |
| 被覆線材料 | 六〇糎分              |
| 脂油燃料類 | 「ガソリン」二〇罐分及之ニ伴フモノ |
- 五、軍司令部及軍情報部ニ集合スベキ通信部隊ニ關シテハ依然軍通信隊長之ヲ區處スベシ  
 六、予ハ依然現在地ニ在リ明六日七時「バリチギール」山東方六糎ノ高地ニ到ル  
 四時以後<sup>668</sup>高地ニ情報所ヲ開設ス

第一軍司令官 大 將 某



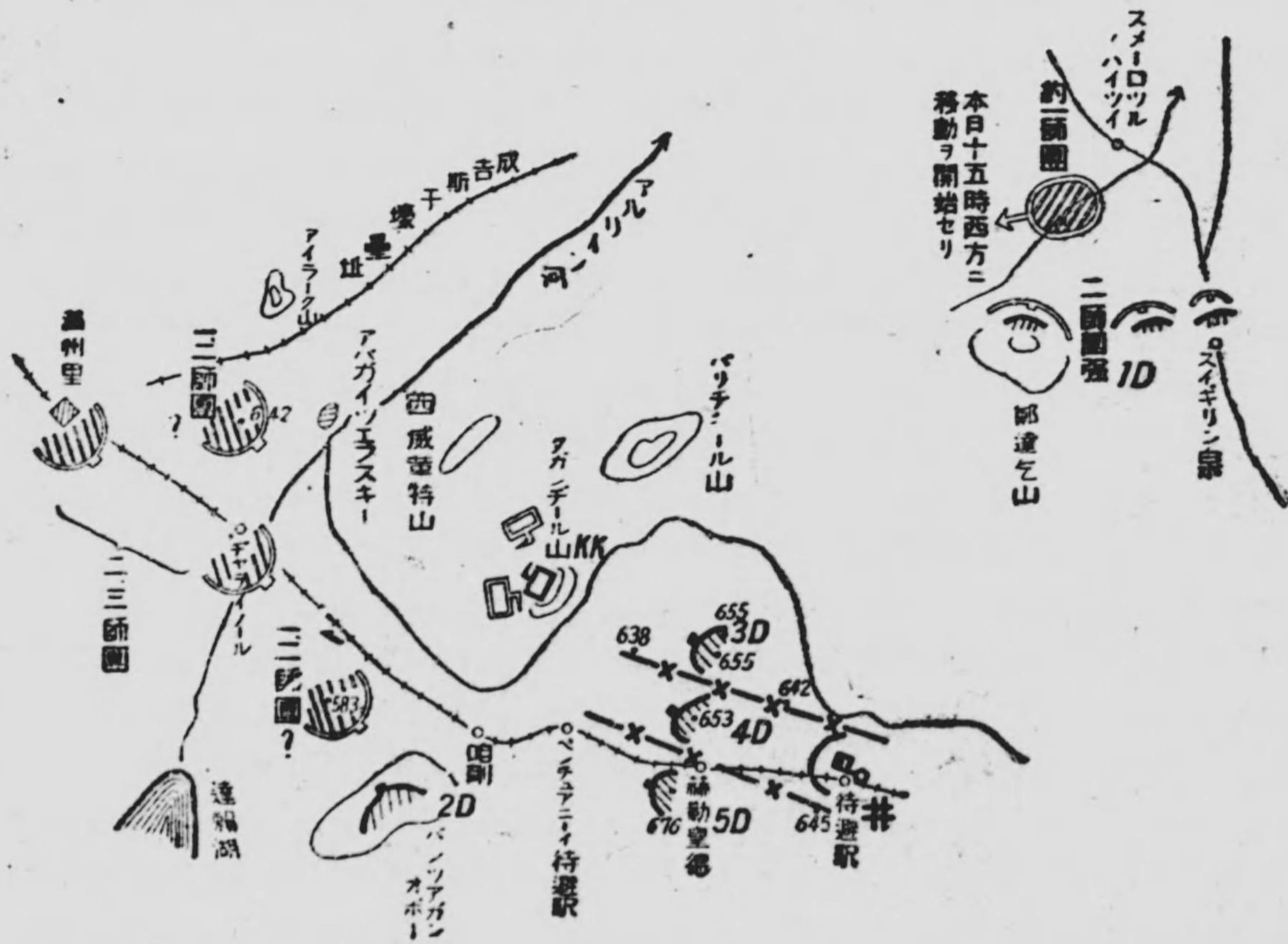
三月五日十六時ニ於ケル軍用無線通信網



(別紙第五其ノ二)

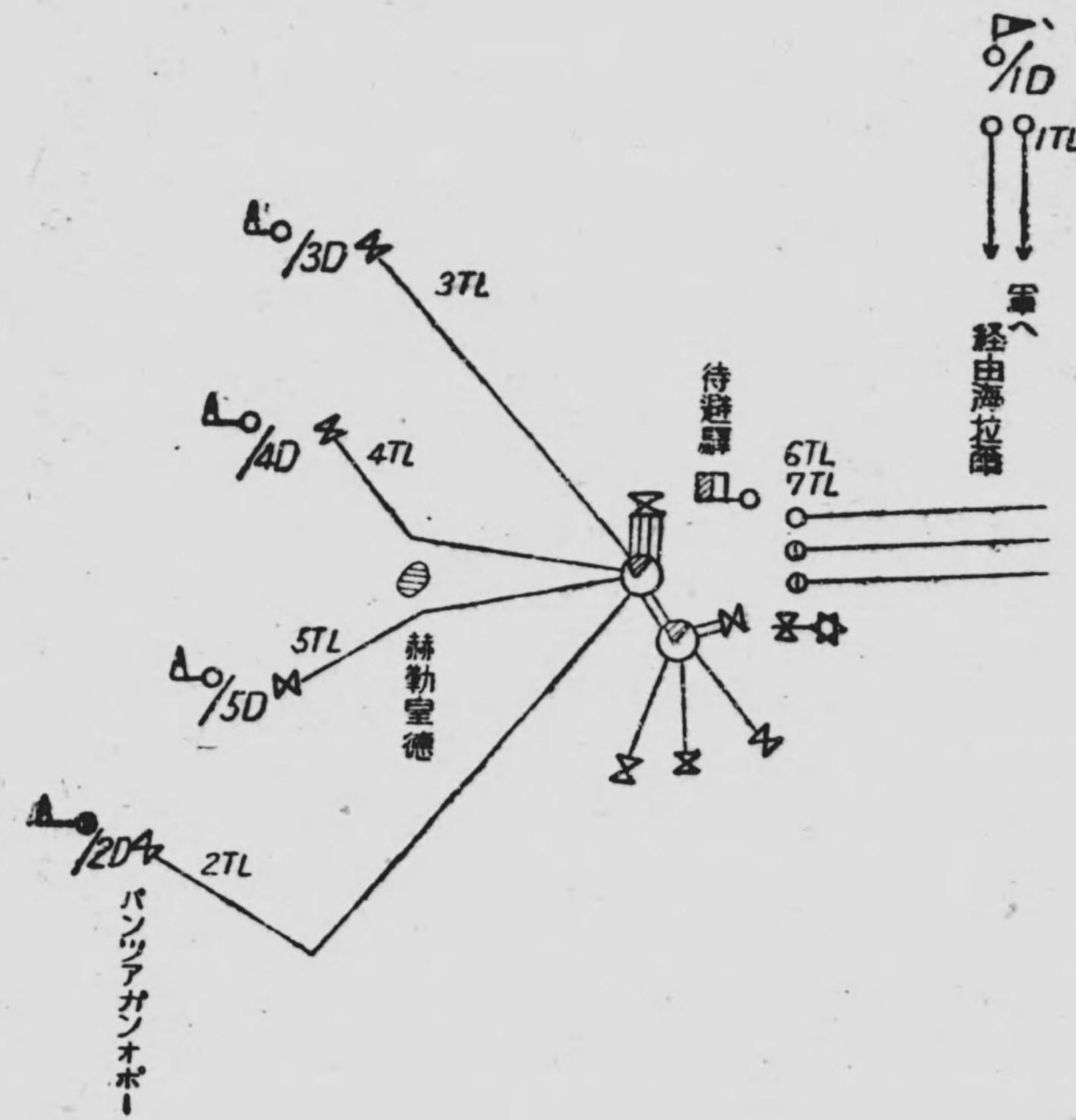
(第三想定別紙要圖)

三月五日十六時ニ於ケル我々ノ態勢要圖



(別紙第五其ノ一)

三月五日十六時ニ於ケル軍用無線通信網



三月五日夕ニ於ケル第一軍通信隊命令

第一問題

備考

有線各中隊ハ既ニ携  
行量ノ材料ハ補給ヲ  
終リアリ



## 第一問題原案

一軍通作令第〇〇號(一軍作令甲第〇號)

第一軍通信隊命令

三月五日十六時三十分  
赫勒皇德東方十二軒待避隊本部

一、軍當面ノ敵ハ約七、八師團ナルモノノ如ク本五日十五時頃達賴湖東北地區及机賽諾爾一帶ノ地區竝ニ滿洲里附近ニ達セリ

我ガ騎兵集團ハ世威革特山附近ニ於テ二、三師團ノ敵騎兵團ト衝突シ目下「ダガンチール」山ヲ確保シアリ第二師團ハ「バンツアガンスオボ」ニ達シ近ク優勢ナル敵ト觸接ヲ保持ス  
軍ハ本日没後行動ヲ起シ「バリチギール」山附近ニ轉進シ明六日深ク敵ノ左翼ヲ求メテ之ヲ包圍攻撃ス

軍司令官ハ明六日七時「バリチギール」山東方六軒<sup>668</sup>高地ニ前進セラレ同地ニハ四時以降情報所ヲ開設セラレル筈

軍飛行隊ハ明拂曉「バリチギール」山東南方海拉爾河畔ニ近ク其ノ前進飛行場ヲ推進スル筈

二、軍通信隊ハ速カニ行動ヲ開始シ主トシテ先ヅ「バリチギール」山東方六軒<sup>668</sup>高地ヲ基點トシ各

第一線兵團トノ連絡確保ニ任ズルト共ニ今後ノ攻撃前進ヲ準備シツツ一部ヲ以テ勉メテ航空通信網ヲ完成セントス

第一線兵團間ノ作業完了時刻ヲ明六日六時三十分ト規定ス

三、有線第二中隊ハ依然前任務ヲ續行スベシ

四、有線第三中隊ハ第三師團ト共ニ行動ヲ開始シ<sup>668</sup>高地ニ軍司令部交換所竝ニ附屬設備ノ構成及之ガ監督ヲ實施スルト共ニ該交換所ヨリ第三師團司令部間ニ裸線一條、軍飛行隊司令部間ニ裸線二條ノ電話回線ヲ構成シ其ノ通信連絡ニ任ズベシ作業完了セバ其ノ兵力ヲ第三師團司令部附近ニ集結シ爾後ノ前進ヲ準備シアルベシ

有線第六中隊到着セバ通信中樞竝ニ軍飛行隊司令部通信所ハ之ヲ該中隊ニ繼承セシムベシ

又第六中隊誘導ノ目的ヲ以テ綠燈ヲ携行スル標兵ヲ<sup>655</sup>及<sup>576</sup>附近ニ設置スベシ

五、有線第四中隊ハ第四師團ト共ニ行動ヲ開始シ先ヅ<sup>668</sup>高地ニ到リ該地ヲ起點トシテ第四師團司令部間ニ裸線一條、軍砲兵隊間ニ裸線二條ノ電話回線ヲ架設シ其ノ通信連絡ニ任ズベシ但シ軍砲兵隊方向ヘノ回線中一條ハ第五中隊援助ノ目的ヲ以テ其ノ端末ヲ該中隊ニ引繼グベシ  
作業完了セバ其ノ兵力ヲ第四師團司令部附近ニ集結シ爾後ノ前進ヲ準備シアルベシ



六、有線第五中隊ハ第五師團ト共ニ行動ヲ開始シ被覆線ヲ以テ之ニ追躡シ隨時軍司令部間ニ移動通信ヲ實施スベシ師團「ダガンデール」山ニ進出シ得ルニ至ラバ<sup>668</sup>高地、軍情報所間ニ電話回線一條ヲ架設シ其ノ連路ニ任ズベシ但シ<sup>668</sup>高地ヨリ軍砲兵隊附近迄ノ架設ハ第四中隊ヲシテ之ヲ實施セシム

作業完了セバ主力ヲ第五師團司令部附近ニ、一小隊ヲ軍砲兵隊附近ニ集結シ爾後ノ前進ヲ準備シアルベシ

七、有線第六中隊ハ十七時行動ヲ開始シ現第三師團司令部位置ヨリ在來裸線ヲ延伸シ<sup>668</sup>高地ニ至ル間ノ裸線一條ノ架設並ニ軍飛行隊司令部推進ニ伴フ通信ヲ援助スベシ

作業完了セバ主力ヲ以テ<sup>668</sup>高地附近ニ集結シ爾後ノ前進ヲ準備シアルベシ又速カニ軍情報所(軍司令部豫定地)通信所ヲ第三中隊ヨリ繼承スベシ

現第三師團司令部ヨリ<sup>668</sup>高地ニ向フ架設援助ノ爲第三中隊ヨリ綠燈ヲ携行スル標兵ヲ配置セシム

八、有線第七中隊ハ本日没ト共ニ行動ヲ開始シ概ネ第六中隊ノ進路ヲ先ヅ<sup>668</sup>高地軍情報所ニ急行シ今後ノ行動ヲ準備シアルベシ但シ<sup>668</sup>高地ヨリ軍砲兵ニ至ル回線ハ爾後第七中隊ニ於テ引繼グ

ペン

九、無線各小隊ハ左ノ如ク通信網ヲ構成シ軍司令部ト各兵團間トノ連絡保持ニ努ムベシ

1. 第一期 (自五日十七時  
至六日五時)
  - 統制第八小隊ハ第五小隊及騎兵集團ト「ワ」形
  - 統制第九小隊ハ第二、第三、第四小隊ト「ツ」形
  - 但シ第三、第四小隊ハ嚴ニ之ヲ封止ス
  - 統制第十小隊 如故
  - 第六、第七小隊ハ<sup>668</sup>高地ニ向ヒ前進セシム
2. 第二期 (自五日五時  
至六日七時)
  - 統制第六小隊ハ第二小隊ト「ノ」形
  - 統制第七小隊ハ第五小隊及騎兵集團ト「ワ」形
  - 第八乃至第十小隊 躍進
3. 第三期 (六日七時以降)
  - 統制第六小隊 如故



同 第七小隊ハ第四、第五小隊ト「ワ」形

同 第八小隊ハ第三小隊及騎兵集團ト「ワ」形

同 第十小隊ハ第一小隊及海拉爾電信所ト「ワ」形如故

第九小隊 待機

六日七時以降無線封止ヲ解除ス

十、668 高地軍情報所ニ於ケル通信中樞ノ細部ニ關シテハ隊附甲少佐ヲシテ區處セシム

十一、左ノ如ク材料ヲ交付ス

有線第三中隊 裸線材料 三〇斤分

同 第四中隊 同 二〇斤分

六日七時<sup>668</sup>高地附近隊本部ニ於テ

同 第五中隊 裸線材料 一〇斤分

被覆線材料三〇斤分

六日九時「ダガンチール」山東麓海拉爾河畔ニ於テ

同 第六中隊 裸線材料 二五斤分

被覆線材料一五斤分

六日七時<sup>642</sup>高地軍飛行隊司令部ニ於テ

無線各小隊

燃料脂油「ガソリン」二〇罐分 六日七時<sup>668</sup>高地附近隊本部ニ於テ

十二、隊本部ハ日没ト共ニ現在地出發某曹長ノ指揮ヲ以テ<sup>668</sup>高地ニ到ルベシ但シ自動車ハ某軍曹ノ指揮ヲ以テ軍司令部自動車班長、行李ハ軍司令部行李長ノ區處ヲ受クベシ

十三、予ハ六日五時軍司令部ト共ニ現在地出發、七時<sup>668</sup>高地ニ到ル

第一軍通信隊長 某大佐

### 下達法

各別命令ヲ以テ要旨ヲ電話シ後合同命令ヲ印刷送付ス

隊本部附近ニ在ル各中、小隊ニハ特ニ口達ス

有線第一、第二中隊及無線第一、第二小隊ニハ各別命令ヲ電報ス

### 備考

本命令ハ特ニ電報又ハ電話ニヨル傳達ヲ便ナラシムル爲「別紙要圖ノ如キ通信網云々」ノ形式ヲ避ケタリ

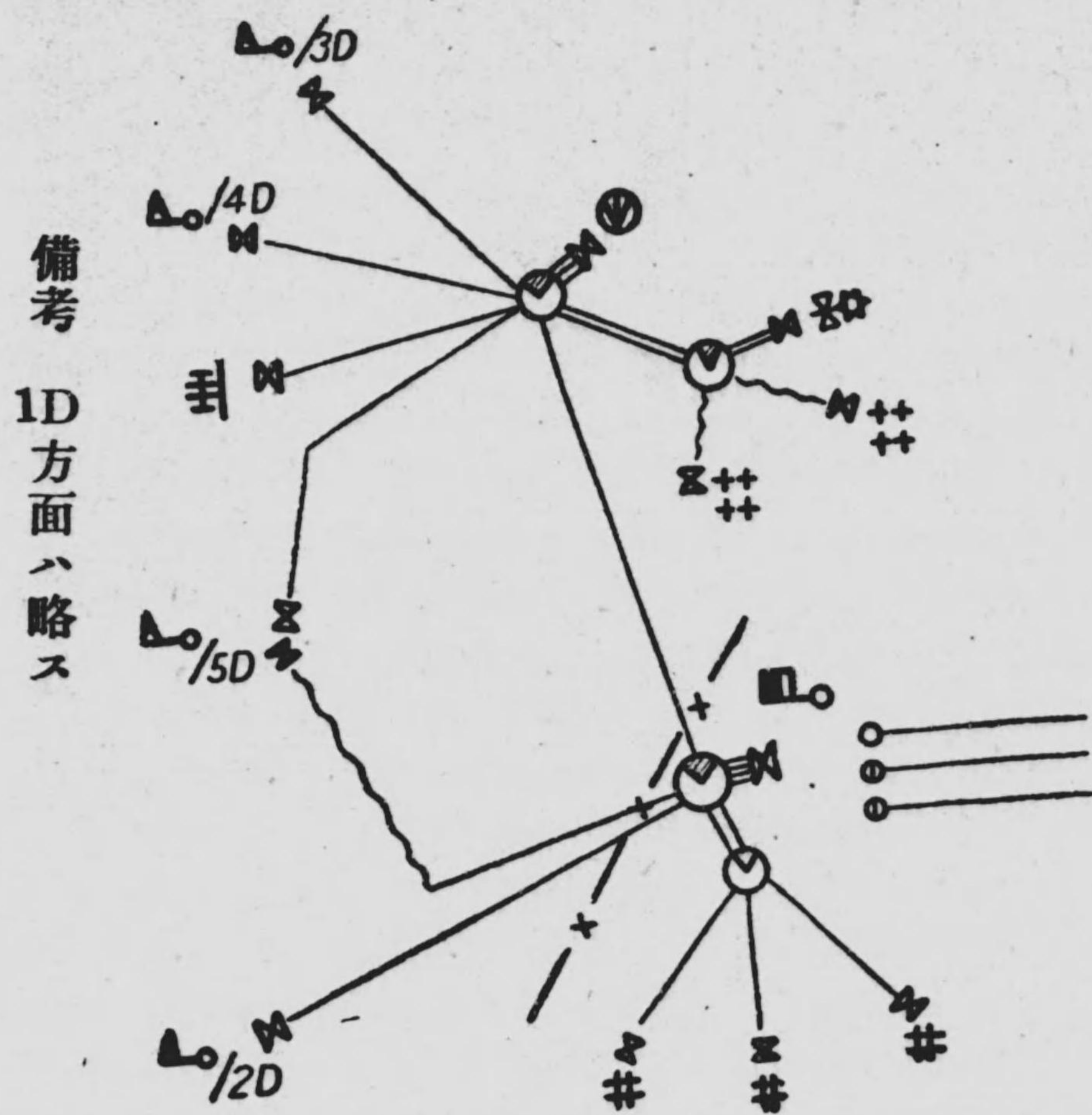
尙參考ノ爲次ノ通信網圖ヲ附スルヲ以テ研究ヲ望ム



參考附圖

軍有線通信網 其ノ一

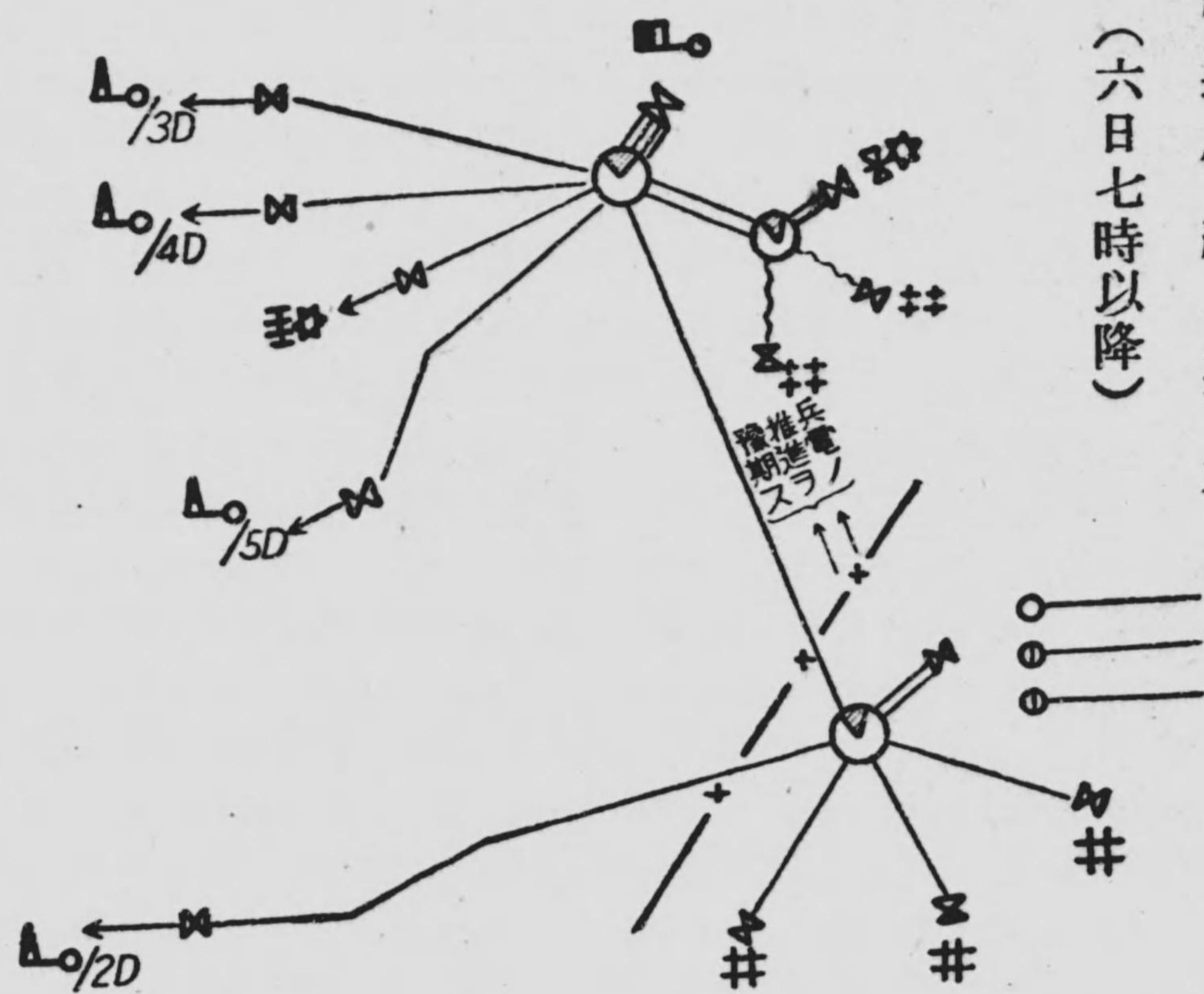
(於六日七時以前)



備考  
1D方面ハ略ス

軍有線通信網 其ノ二

(六日七時以降)



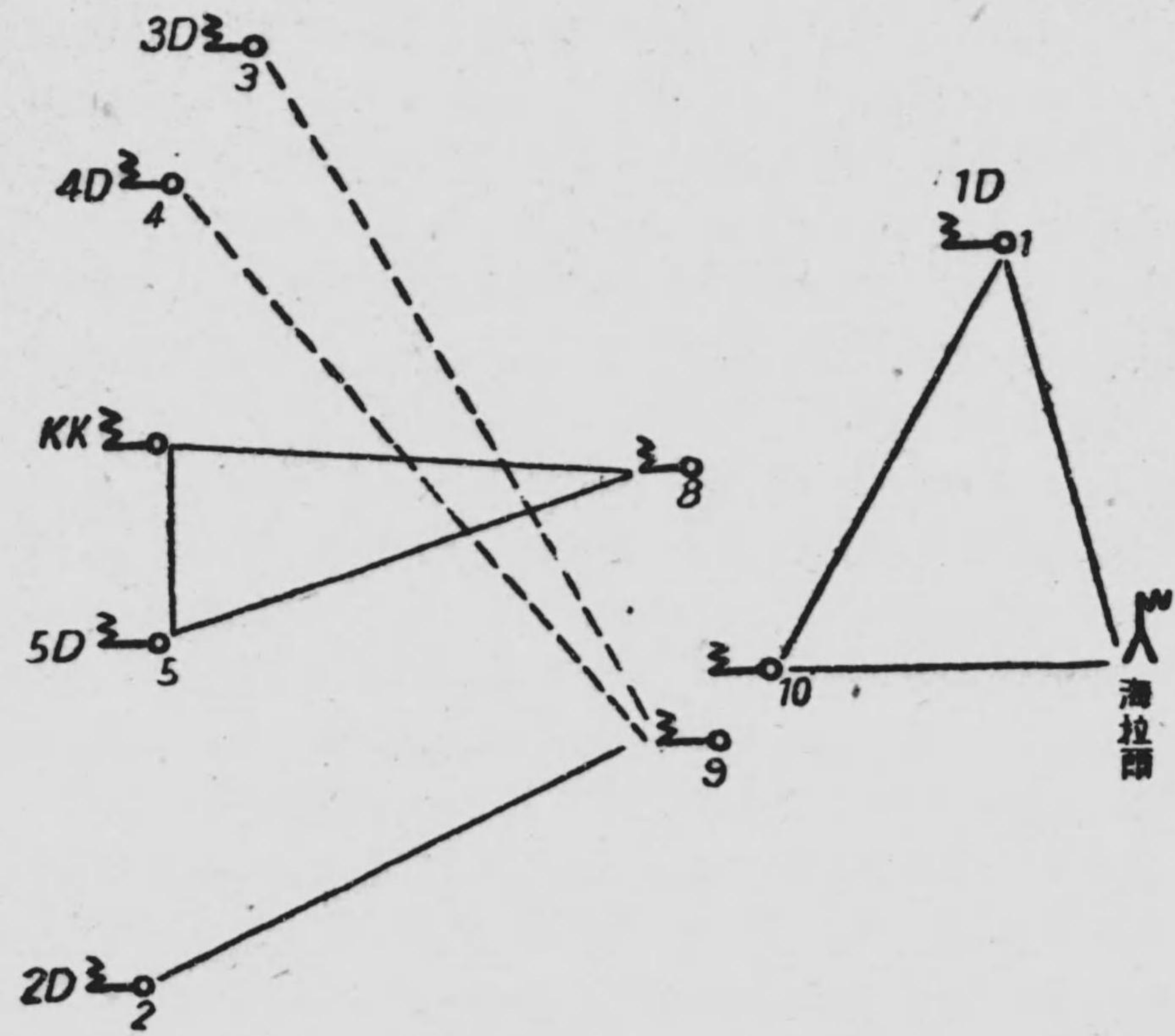
備考  
1D方面ハ略ス

要スレバ緊密ナル兵團ニ更ニ航空用専用回線ヲ構成ス之ガ爲7TLノ使用ヲ豫期ス



無線通信網 其ノ一

第一期 (自五日十七時至六日五時)



備考

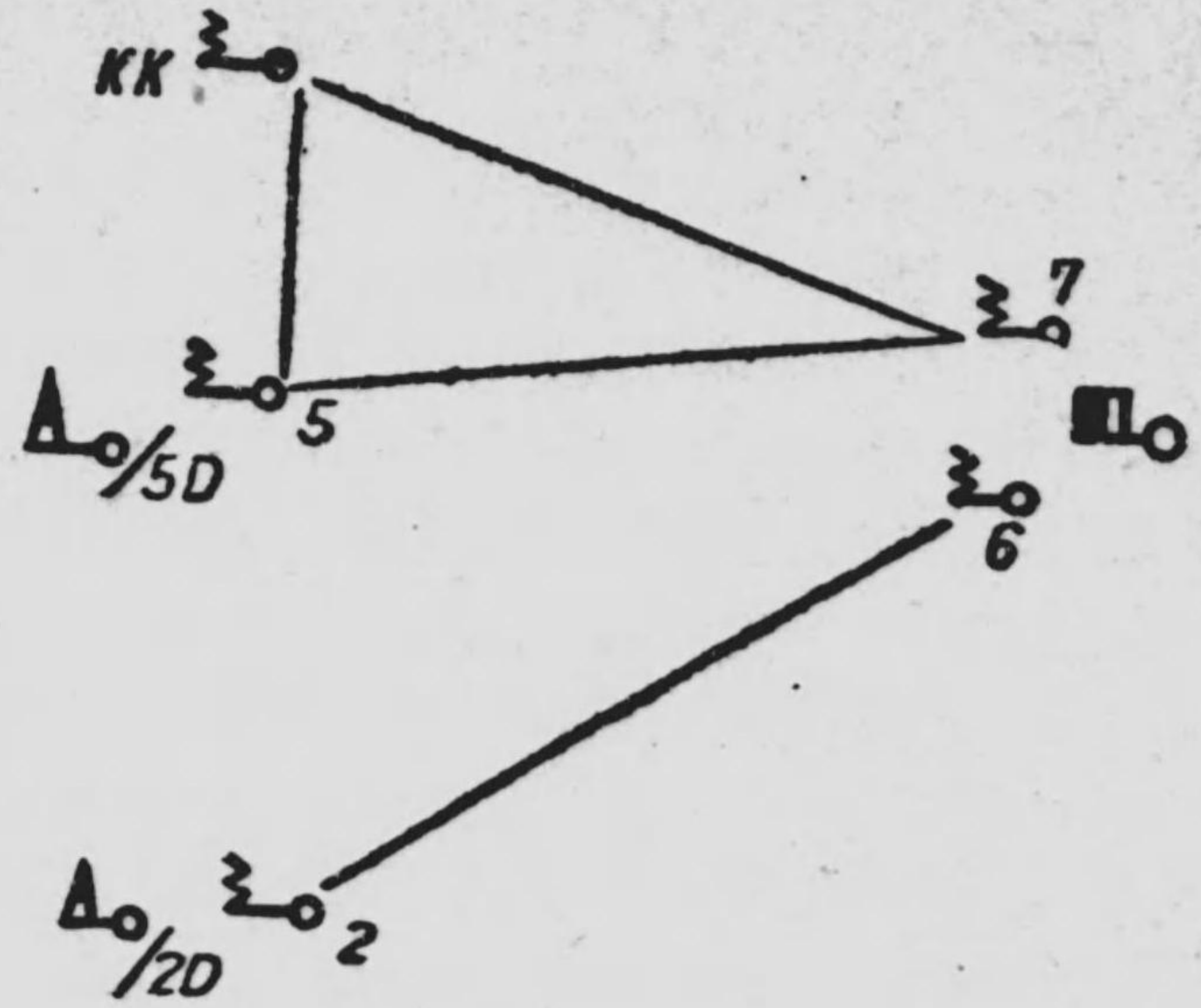
一、第六、第七小隊ハ躍進

中

二、通信諸元ハ之ヲ略ス

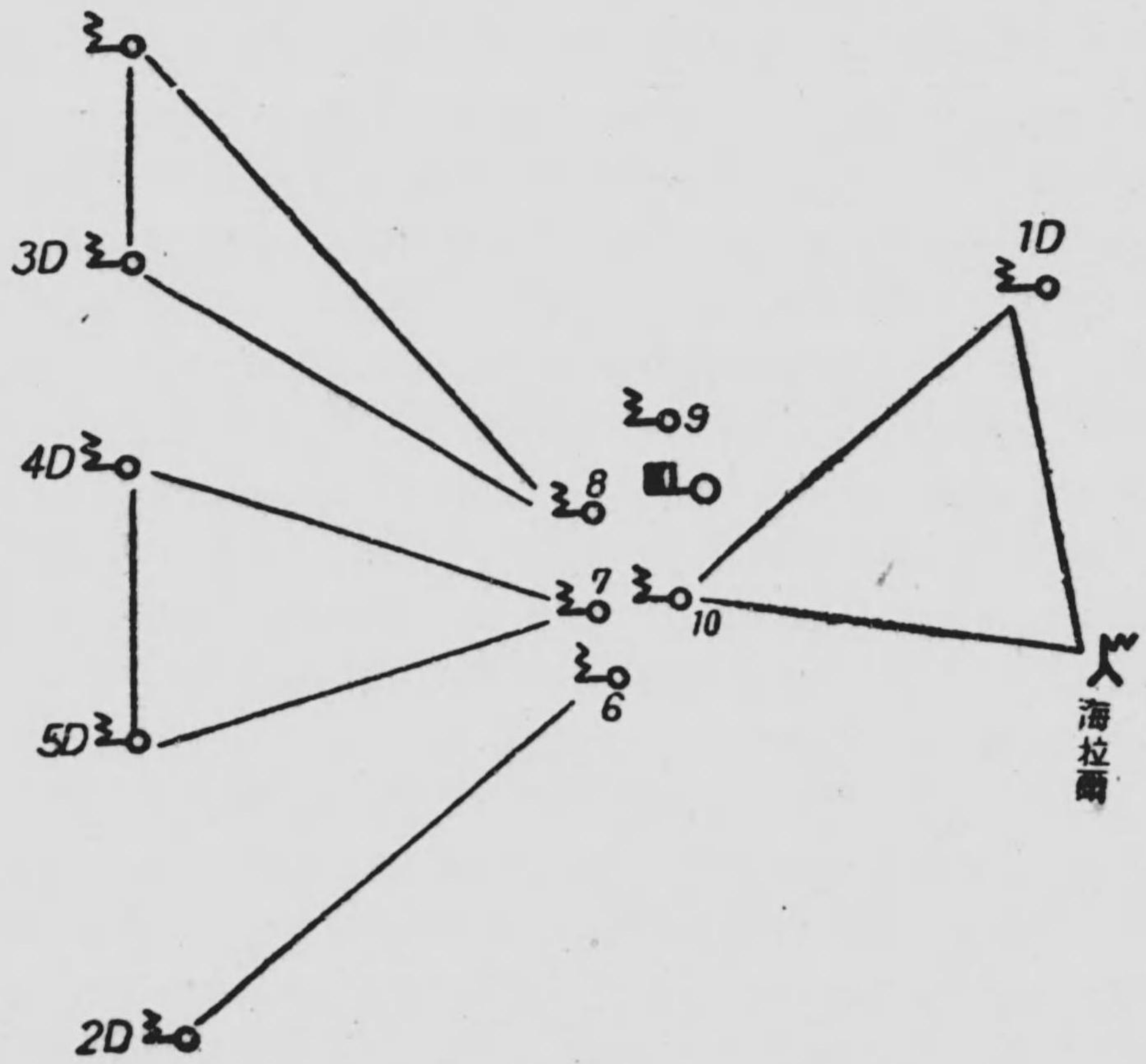
無線通信網 其ノ二

第二期 (自六日五時至同日七時)



無線通信網 其ノ三

第三期 (六日七時以降)



備考

一、第九小隊

ハ待機

二、通信諸元

ハ之ヲ略ス

- 備考
- 一、第八、第九、第十小隊躍進中ナリ
  - 二、後方及1D方面トハ一時中止ス
  - 三、通信諸元ハ略ス



## 第一問題の原案の説明

### 一、本問題研究の主眼に就て

本問題研究の主眼は「廣漠たる不毛地に於ける夜間大規模の機動に伴ふ軍通信隊の行動を研究」せんとしたのである。

而して此の様な機動は、多くの場合、晝間の機動に引續いて寸暇の休息もなく、再び夜間最大限度の機動を実施して而も翌日は更に眞面目な戦闘を開始しなければならぬ場合が多いのである。

之は餘程しつかり訓練しないと容易に出来ることではない。即ち夜間未知の不毛地を轉進しつつ而も混雜中方向を誤ることなく困難なる作業を実施するのであるから、生易しいことではないのである。

併しながら、若し之が戦捷を得る爲の必須の手段であるとするならば、軍の命脈たる軍通信を擔任する部隊としては、如何なる艱難に遭遇するも、斷乎として之を克服して、有ゆる手段を盡くし、以て軍の企圖に追隨し、之と共に斃れる覺悟が肝要である。諸官の眞剣なる研究を望

む所以である。

### 二、軍の會戰構想に對する軍通信隊長の判断に就て

本會戰の構想は、優勢なる敵に對して夜間の出来る限りの機動を行つて、態勢の優越を占め、明六日中には敵に對し決定的打撃を加へて、戦捷の曙光を把握しようとするのである。

従つて本會戰は、軍命令によつて表示せられてゐるやうに、「深く敵の左翼を求めて之を包圍」するのである。此の際不徹底な機動、更に之より當然結果づけられる不徹底な包圍は、たとひ勝つたとしても、それは凡勝であつて、時間と共に消失する程度のものとなつてしまふのである。

内線軍としては、神速な機動と、猛烈果敢な闘志のみが難局打開の鍵であり、戦勝の爲の條件である。故に此の際の夜間機動は、思ひ切つて敵の外翼遙かに深く進出するやうに實施して、敵軍主力を西南方退路外に壓倒することが肝要である。

現に第一師團方面の敵兵團の一部が當軍方面に南下中の状況を考へ併せて見れば、特に迅速なる成果を擧げることが何よりも緊要である。

併しながら今、會戰の推移を判断すると、第三師團は其の行動は獨立不羈を要する溢出兵團と



なることが至當であつて、此の方面に軍主力の戦力を充實結成することは、至難であらう。故に軍の重點は必然的に第四師團正面に保持せられることが自然である。故に軍通信隊の重點も亦第四師團方面に設置せられる要のあることも當然考へられるのである。

併し之と同時に、第三師團との連絡を如何にして保持するかと云ふことも亦考へなければならぬ重大な問題である。

### 三、第五師團の戦略價値に就て

第五師團がダガンディル山を確保し得るか否かは、實に軍が包圍作戰の爲の展開を計畫通り遂行し得るか否かの岐れ路であり、又爾後の攻勢前進に方つての旋回の軸ともなる支撐となり得るか否かの由つて分れる所である。

目下我が騎兵集團を攻撃中の敵は騎兵二、三師團程度であつて、之に對する我が第五師團のダガンディル山奪取も決して疑ふものではないが、其の次には札賚諾爾附近の敵も亦此の要線に進出し得る状態であるから、何時如何なる状況の急悪化があるかも測り知り得ないものがあらう。故に第五師團の該地確保の一報こそは、軍司令官に對して「我已に勝てり」の信念を與へる價値のあるもので、これこそ軍通信隊が軍統帥に寄與し得る偉大なる功績の一つでなくてはな

らぬ。故に第五師團に對する通信連絡の確保に就ては、技術的に如何なる困難があらうとも、之に拘束せられて大局を逸することのないやうに、萬難を排して努力の最大限を盡くす熱意が肝要である。

### 三、軍通信隊運用の重點に就て

通信隊運用の本旨は、戦局の全般を達觀し作戰の推移を洞察して、施設の重點を重要な方面に指向し、緊要な時機に適合するやうに指導するのであつて、軍通信隊も亦此の趣旨に副ふやうに努力しなければならぬ。従つて本状況に於ても、軍機動の本質をよく吟味して此の作戰上の要求に適合するやうに軍通信隊の一段の活動が要望されるのである。

即ち本想定に於ける夜間機動は、機動そのものが目的でなくして、明拂曉以後の戦闘實施が目的で、機動は之に對する準備行動である。

従つて軍通信隊運用の重點も亦明拂曉以後の戦闘に際し其の要求を十全に充足し得ることを第一着眼とすることが肝要である。

之が爲本状況に於て明拂曉時軍がバリチギル南北の線に戦略展開を終つた頃には、軍通信隊の主力は<sup>668</sup>高地を基點として各兵團間の連絡を完了して居ることが肝要である。又それと同時に



に、今後の軍の攻勢前進に伴つて、活潑に之に追躡し得るやうに、兵力なり資材なりを第一線近く推進して弾力性を保有して居ることが何より大切である。

此の際後方回線の如きものは、前述したやうな第一線通信の絶對的要求を達成し得る確信を得た後に於て徐ろに考慮せられてよい程度のものである。蓋し、後方通信網構成の爲には、第二線部隊とも看做し得る兵站通信部隊もあることであり、又其の通信内容を考へて見ても、決戦に臨まんとする軍としては、前方連絡よりも重要な後方連絡の此の際あらうとも思はれないし、又若しあつたとしても、其の通信量は少いであらうし、又止むを得なければ快速機關を介して從來の施設を利用して、連絡の手段が皆無ではないのである。

併しながら、航空用通信網は、縦ひ其の位置が軍司令部より後方にあつたとしても、これは明日の戦鬪の爲各兵團との密接な連絡が必要であるから、第一線通信と同様に重視して整備する必要がある。之に關しては航空部隊も亦自ら其の有する通信部隊を使用するであらうが、軍通信隊としても、自分の通信網のやうな氣持を以て援助する必要がある。

##### 五、隨伴式か躍進式か併用式か

夜間は部隊の協同動作並に指揮の統一が困難であつて、動もすれば錯誤を生じ易いのは原則の

示す所であり、古來幾多の戦史がそれを實證して餘りある所である。

故に一寸考へると現在の態勢を以て其の儘其の地兵團と共に行動して、所謂隨伴式とするを可とするやうに思はれるが、抑、部隊の行軍速度と作業速度とは著しい差異があり、更に夜間に於ては通視の出来ないことによつて連絡すべき部隊をも見失つてしまつて却つて後方遙かに殘置せられ、隨伴式の目的を達成し得ないことに立ち至るのである。況んや機動せんが爲の機動ではない本狀況に於ては、隨伴式によつて絶えず機動間の連絡を保持することは、師團の戰略的位置に鑑みて、絶對的な要求ではないであらう。各兵團とも寧ろ機動間は黙々として一意目的地に向ふ運動に専念して、通信連絡の如きは展開開始時の完成を希望するであらう。又技術的に見ても、線路は長遠薄弱となり、夜間豫期しなければならぬ敵騎兵部隊の侵入や友軍自らする避け難い交通障碍等によつて切斷せらるることもあらうから、此等を考へると隨伴式は勞多くして效少いと云ふよりも事によると却つて翌日に及す害の方が遙かに大なることもあらう。況んや兵力と材料とを努めて多く第一線方面に保持して後方は必要の最小限度に止めなければならぬ本狀況に於ては、隨伴式によつて多くを消費することは避けなければならぬ。



之に反して躍進式は、所望する時機に、所望する地點に於て、其の能力を最高度に發揮して所望の効果を期待し得るものであるから、途中に於ける要求さへなければ、即ち、通信の中絶を許し得るやうな状況ならば、有利なる方式である。況んやこれによつて、爾後の推進の爲に彈撥力を保有し、且後方を經濟的に整理し得るものであつて、本状況に於て最も希望する方式である。

即ち此の方法によれば、機動間一時各兵團間の連絡は中斷するけれども、之は暫く忍び得る所であること前述の理由によつても明かである。又一度離れた部隊が豫期する地點で求めて合し得るかと云ふことに關しては、夜間の特性上勿論相當の困難はあるけれども、其の求むる部隊が師團と云ふ權威の高い大きな團結であることを思へば、概ね軍命令の規定する時期に、所望の地域に進出し得ることは一般常識であつて、作業隊に若干の強力性を有してゐるなら、之を求めて追及することは決して困難ではないであらう。若し甚だしく軍命令と相違した地域に師團が行つてしまつたとすれば、それは軍の會戰構想に於て再検討を要することであつて、軍通信隊運用の是々非々の範圍外の問題であらう。併し通信部隊としてはあくまで兵團を求めて追及すれば足りることは勿論である。

次に併用式に於ては、一見すると躍進式と隨伴式との兩者の利害を併有して居るやうに思はれるが、實際は著しく異なつてゐる。此の方法は如何なる状態に於ても必ず通信を保持しようとする努力の現はれであるが、兵力と器材の豊富な場合を除いては、甚だ無理な要求であつて、之によつて作業力は各方面に分散せられて、重點がなく、緊要な時機と場所とに於ても尙不十分な状況で満足しなければならぬのである。

夜間に於ては簡明確實な方法のみが成果を收め得るのであるから、凡百の要求を同時に許容せんとする複雑な方法は、實行性のないものであることは言を俟たないのである。

#### 六、夜間の行軍と作業の速度に就て

本作戦地は、一般に平々坦々たる砂漠又は草原地帯であつて、比高は最大二百米位の大波状地をなして、地形地物の障礙は殆ど何もないから、正しく方向さへ維持出来れば、夜間の行軍と雖も其の速度を著しく減少することはないであらうと豫想し得る。併しながら、方向の維持は極めて困難な問題で、特別な準備や施策をしないと一寸難かしいであらう。本状況に於て各部隊は色々の條件を考慮に入れば毎時三籽位の速度は出るかも知れぬと考へられやう。或はそれ以下を標準としなければならぬかも知れぬ。



従つて作業速度も概ね右に準じてよからうと思ふ。凍結地の晝間の作業は概ね試験済であるから、夜間半減の原則によつて毎時〇軒の連続速度にて実施し得ると見てよからうと思ふ。

七、有線各中隊の用法に就て

1. 第三中隊は之を従來該中隊の架設した來線の延伸に使用した方が、668高地と後方との連絡を完成し得るので有利のやうではあるが、前述した躍進的利益を十全に收めさせる爲には、將來の通信中樞である668高地に最も近接して居る該中隊を、可及的速かに前方に推進して、其の通信中樞設置や本通信網の重點である第一線兵團との連絡の爲に十分活動させることが最上の策であらう。

2. 第四中隊は、之を隨伴式に使用することなく直ちに668高地に急進せしめて、之を起點として第一線の通信網構成に一意専念させることが必要である。

此の際第五師團と668高地との連絡完成は甚だしく遅延する虞があるから、其の方面を擔任する第五中隊の作業の一部を援助してやる著意が肝要である。

而して異なる部隊の作業を何處で連絡させんとするかは、それが夜間であるだけ一層困難な問題であるけれども、軍砲兵隊の如く、たとひ夜間と雖も容易に發見し得る好目標附近に選

定すれば、作業上の連絡も容易であらう。況んや兩作業隊の面接する時機は概ね五時乃至六時の間であつて、既に黎明時であるから、心配の要はあるまい。

3. 第五中隊は、第五師團の行動並に其の成果が軍の機動の成否如何を律する重大性を有して居るのを考へると、機動中途の通信中絶は好ましくない所である。故に隨伴式の不利や技術上の不便はあつても、暫く之を黙視して、先づ被覆線を以て爲し得る限り不斷の連絡保持に努むる著意が必要である。それと共に明拂曉時の展開時には668の通信中樞に向つて連絡を直接確保することが必要であるから、最も不利とする併用式を採用することが最も適切なる方法となるのである。

4. 第七中隊を現在地より直ちに豫定兵站線に沿うて架設せしむるときは、六日八時前後には後方一回線を構成することが出来るけれども、之は最初に研究したやうに、本狀況に於ける最大の著眼である第一線通信網を充實して更に弾力性を保有させると云ふ方針に悖るものであつて、此の中隊は直ちに高地附近に躍進させて、爾後作戦の推移に即應して活動し得る豫備隊として控置して置くのが適當である。

後方回線の整理は前述したやうに兵站部隊に任すべきである。



#### 八、無線の使用に就て

無線は其の特性上からして集散離合が極めて容易であるから、其の用法は往々疎漫に陥つて思ひ著きになり易いものである。宜しく作戦上の要求を深刻に検討して、要點、要時に重點に使用することが大切である。系の構成に於て特に此の感を深くする。

今時機的に本狀況について研究して見ると、先づ本夜間に於ける最も重要な通信は、軍司令部と騎兵集團及第五師團との間の通信である。即ち騎兵集團は近く敵の攻撃を受けて居り、第五師團亦之に赴くのであつて、此の方面の軍の會戰構想に基く戰略的價値に鑑みて、此の際互に連絡し得る如く「フ」形一系として萬全を期する必要がある。

次に拂曉時に於ける狀況を考へて見ると、第二師團方面に於ては新たなる戦線を構成し、爲し得る限り多くの敵を牽制して、且戰略包圍の完成に重大任務を果すものであるから、其の包圍機動の方向なり實情なりは、軍司令官として多大の關心を持つ所であらう。故に軍司令部と此の師團との間には「ノ」形一系の對向として隨時連絡し得る如くする必要がある。

之を第五師團と併せて三所一系とする案は、第二師團と第五師團とは戰略的任務も行動も別であり、且兩兵團の間隙に敵が突入しようが軍としては何等痛痒を感じないのであるから、此の

異なつたものを一系に收むる案には同意し難い。

次に拂曉以後軍の攻撃前進に際して問題となるのは、外翼兵團と騎兵集團との關係である。此の際第三師團は溢出兵團であつて、騎兵集團と行動の上について相共通するものがあるから、之を纏めて一系に收むることが一つの著眼である。従つて此等兵團間には直接協力に便利なやうに「フ」形の一系とすることが必要である。

以上を以て比較的詳細に第一問題を研究したのであるが、要するに通信部隊は、技術部隊ではあるけれども、之が運用は戰術戰略に基いて爲されるものであることを十二分に了得されたいのである。たゞ緒言でも述べたやうに、技術的限度とか技術的隘路とかがあつて戰術戰略上の過大な要求に對して追隨し得ない所があるから、運用に當る者は、此の限度なり隘路なりを速かに把握することが緊要である。此の把握を過つたものや或は把握し得ないものは、此の種部隊を運用すべき資格のないものと謂へるであらう。